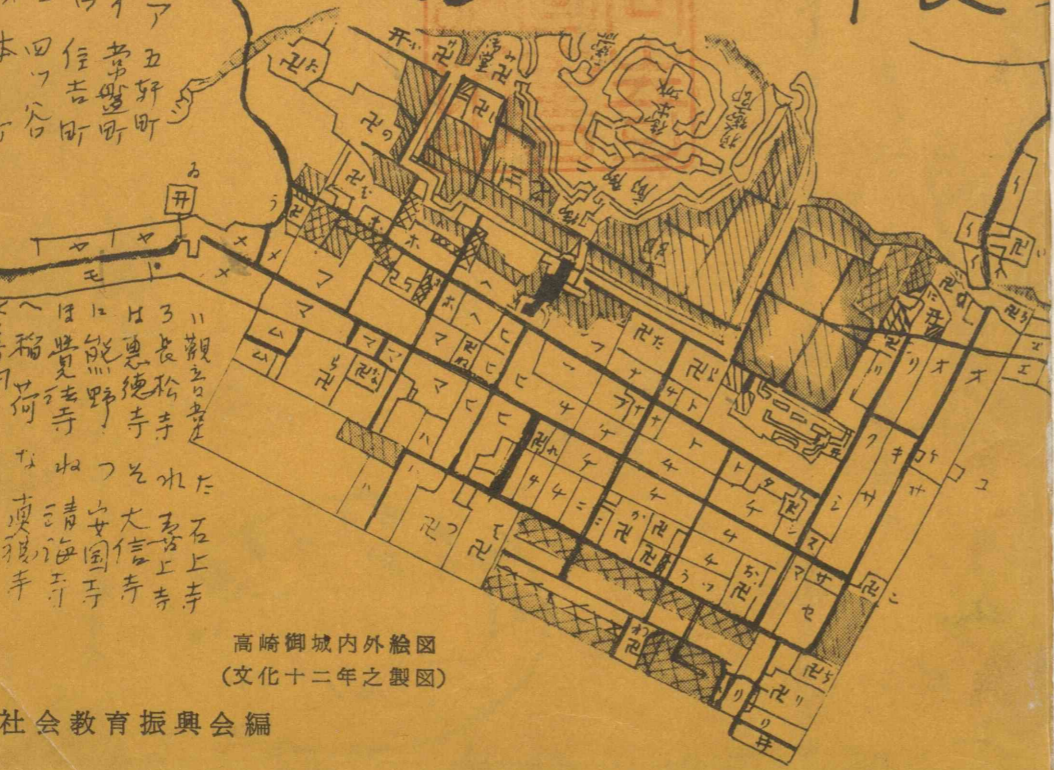


高崎人物年表

ア 五軒町
 イ 老野町
 ウ 任吉町
 エ 四ッ谷町
 オ 本坊町
 カ 赤坂町
 キ 本町中町
 ク 拜領地青木多町

ハ 観音堂
 ニ 長松寺
 ホ 恩徳寺
 ヘ 熊野寺
 ニ 賢法寺
 ハ 稲荷寺
 ニ 普賢寺
 チ 法華寺
 リ 大蔵寺
 ヌ 金剛寺
 ヲ 石上寺
 カ 大信寺
 ケ 山女国寺
 コ 清海寺
 セ 真観寺
 シ 延養寺
 シ 向雲寺
 ス 興禪寺
 ソ 石上寺

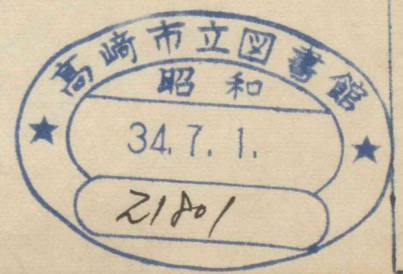


高崎御城内外絵図
 (文化十二年之製図)

K242
10
09/0
18
42

1681

寄贈者	
名	所住
高崎市教育委員会	高崎市高松町一
殿	



一、装 幀 中 島 祥 夫
 一、表紙 題字 中 會 根 広
 一、序 教育長 中 沢 宗 弥
 一、編 集 根 岸 省 三

096
28
42

歴史年表 (時代別概観)

社会政治文化	西 曆	国 史	郷 土 史	郷 土 の 人 材
編	六〇〇			

[Faint historical text and tables, including a large table with columns for dates and events, and vertical text blocks.]

郷土史の手引ともいべき『高崎市史年表』をさきに出版したが、その年表を調べても直感されるのは、その時代／＼に生きた人々の業績である。

山高きが故に貴からず、木あるをもつて貴しとし、地広きが故に興らず人あるをもつて興る、地を離れて人なく、人を離れて事なし、地氣と人文と相交渉し相関繋する所に郷土あり、かつ郷土の歴史あるゆえんである。その時代に生きた人物が偉大であればあるだけに、いかにその時代を大きくしたかは、その郷土史をひらけばすぐ感じられるので、出来るだけ多くの人物をあげて、ここに『高崎人物年表』を出版することになった。これは当然『高崎市史年表』と姉妹篇となりあわせ読むことによつて、高崎の過去を知るしるべとした。

しかしここにあげられた人物が、高崎のすべてではもちろんない。世にかくれた偉人、実力者がより多くあつたに相違ないし、現代に活躍している方々の中にもまだまだたくさんの方が洩れているが、乏しい資料の中から選んだので十分とはいえないが、今後歴史を調べ郷土を興す上にも、過去の人々の業績があずかつて力あることを思えば、この書もまた後進者のために、大きな資料とならうことを疑わぬものである。

序

郷土史の手引ともいべき『高崎市史年表』をさきに出版したが、その年表を調べても直感されるのは、その時代／＼に生きた人々の業績である。

山高きが故に貴からず、木あるをもつて貴しとし、地広きが故に興らず人あるをもつて興る、地を離れて人なく、人を離れて事なし、地氣と人文と相交渉し相関繋する所に郷土あり、かつ郷土の歴史あるゆえんである。その時代に生きた人物が偉大であればあるだけに、いかにその時代を大きくしたかは、その郷土史をひらけばすぐ感じられるので、出来るだけ多くの人物をあげて、ここに『高崎人物年表』を出版することになった。これは当然『高崎市史年表』と姉妹篇となりあわせ読むことによつて、高崎の過去を知るしるべとした。

しかしここにあげられた人物が、高崎のすべてではもちろんない。世にかくれた偉人、実力者がより多くあつたに相違ないし、現代に活躍している方々の中にもまだまだたくさんの方が洩れているが、乏しい資料の中から選んだので十分とはいえないが、今後歴史を調べ郷土を興す上にも、過去の人々の業績があずかつて力あることを思えば、この書もまた後進者のために、大きな資料とならうことを疑わぬものである。

昭和三十四年春

高崎市教育長 中 沢 宗 弥

高崎人物年表

一、古代社会

原始社会でも、古代社会でも、赤坂の荘を中心として片岡、碓氷八幡、多野八幡の丘陵に飛躍した人々は余りにも伝説的であつて、史実で確認される記録はないが、ここが上野の中心をなしたことは残された伝説でも知ることが出来る。

上野における古墳の大半である五百五十余の古墳が、この丘陵を中心として集落していることは、いかに多くの豪族がこの地のその実力者として政治を行つていたかを物語るものではあるが、国の指定を受けている観音塚古墳でも、その出土品が全部完全に保存されているにもかかわらず、豪族の名は一つとして残されていない。

上毛野にこの時代飛躍した人々はこのおびただしい古墳に深くねむつてはいるが、それが何人であるかは今にして知る由もないが、この時代にわずかに記録に残されているものを拾いあげることが出来るが、これが、高崎のあけぼのである。

不幸にしてこれ以前の人の名は今にして知る術もないのは残念である。

西暦	年間	氏名	略歴
前 五〇	崇神四八	豊城入彦命	この年正月東国を治める、これ上毛野君、下毛野君の祖にして、上野国に葬る、岩鼻の赤城神社は豊城入彦命を祭神としている。 越後より上野に入り平定し、碓日坂にて、弟橘媛を葬るの情あり、碓氷嶺に登り東南を望み三度歎いて曰く吾孺者邪と。 豊城入彦命の孫、東山道十五国都督に任ぜられ、春日の穴咋邑に到り病に薨す、東国の百姓上野国に葬す、石原町三島塚はその古墳と伝う。 彦狭島王の子、東国を統治する。 御諸別王の子孫にして上毛野を平定し上毛野氏の祖となる、
一一〇	景行四〇	日本武尊	
一二五	景行五五	彦狭島王	
一五六	五十六	御諸別王	
二八九	応神年間	荒田別	
三二〇	仁徳年間	竹葉瀬	
四三七	雄略年間	射狭公	
五九二	推古年間	鞍作鳥臣	
六三六	舒明 九	上毛野形名	

荒田別の子にして上毛野の文化の発達に力つくす豊城入彦命八世孫、車持公なり、群馬はその名より起る、群馬郡は初めくるまよんだ。

大八木に土木工事を起したが毒蚊のため難業、よつて諏訪神社を勧誘しその目的を達する。

上毛野統治のため蝦夷征伐を行つた、時に利あらず敗れたが、その妻自ら陣頭に立ち侍女數十人に空の弓弦を鳴らしめ遂に敵をしりぞける、上野の祖なり。

六八一	天武 九	黒壳 刀自	佐野の人、山名丘陵にある山上碑にその名あり。
〃	〃	新川 臣	佐野三家の人、山上碑にその名あり。
〃	〃	健守 命	佐野の三人の人、黒壳刀自は孫なり、山上碑にその名あり。
〃	〃	斯多々弥足尼	山上碑にその名残り。
〃	〃	大兒の臣	斯多々弥足尼の孫なり、右に同じ。
〃	〃	長利 僧	黒壳刀自と大兒の臣との間に出来た子にして佐野放光寺住職なり、父母の供養のため山上碑をこの年建立する。
七〇一	大宝 一	石上部 君	上毛野坂下君の姓を賜わり坂本ならびにこの付近を統治する、碓氷八幡村の古墳は坂本朝臣の祖墳と伝う。
〃	〃	佐自 努君	さじぬぎみなり。上毛野君の支族にして車持君と同じ。佐野を統治し、その付近の古墳は佐自努君のものと同伝う。
七一	和銅 四	羊太 夫	朝鮮より帰化、機織人ともいう、この年多胡郡に産する白絹を皇室に献上する、高崎絹の基である。羊太夫のこと多胡碑にあり。
〃	〃	多治比ノ真人	左中弁五位、多胡碑に刻まれている人なり。片岡郡等三郡をこの年三月九日多胡郡となし羊太夫に与えている、この頃の片岡郡は里見、八幡、豊岡、山名を含む、これは姓であり三宅麻呂のことである、大宝三年には東山道の巡察使に補せられ後世武藏七党の一つ丹党の祖となる。
七二六	神龜 三	他 田 君	太政官にして右同、天武天皇の第五皇子である。左大臣正二位右同、名を麻呂と称し尊は敬称なり右大臣、正二位右同、藤原不比等である。群馬郡下養郷高田里の屯倉を預る人の戸主の妻なり、即ち三家氏宗家の主婦にして金井沢碑にその名あり。
〃	〃	二品穂積親王	家刀自即ち主婦の氏かばねなり。
〃	〃	石上ノ尊	金井沢碑に残る人なり。
〃	〃	藤原ノ尊	右に同じ兒加那刀自が物部君某に偶いて生める子なり。
〃	〃	目頼 刀自	物部君午足の妹なり。
〃	〃	兒加那 刀自	瓢刀自の妹なり。
〃	〃	物部君 午足	毛人の弟金井沢碑にその名あり。
〃	〃	乙瓢 刀自	鍛冶師、右に同じ。
〃	〃	知方 呂	
〃	〃	磯部君身麻呂	

七二六	神龜 三	毛 人	金井沢碑にその名あり。
七四六	天平感宝 一	石上部君諸弟	この年五月十五日、上野国碓氷郡の人にして国分寺に知識物を献じて外従五位下を授けらる。
七六八	神護景雲 一	磯部 牛麿	この年五月、外大初位下磯部牛麿等四人に姓を物部公と賜う。金井沢碑に關係ある人か、甘菜郡の人なり。
〃	〃	午 足	新羅人にしてこの年五月、上野国に百九十二人と共に帰化、吉井姓を賜わる。
七八二	延暦年間	飯野 主馬	上佐野郷の長者屋敷の主、朝日の長者と称す、その娘に關する悲恋は『舟橋』で有名なり。
〃	〃	お 並	主馬の娘にして悲恋の主。
〃	〃	片岡 民部	片岡郡の長者にして夕日の長者ともいう、その子小治郎と朝日の長者の娘との恋は舟橋の伝説を残す。
〃	〃	小 治 郎	片岡民部のせがれなり。
八〇七	大同 二	江積太郎左衛門	乗附邑の人、この家に傭われた飛騨の工人が作った家が板鼻の木島家に伝つて和宮様の宿舎となつた本陣の家である。
八〇八	大同 三	法印 祐清	石原清水寺の開山なり、同寺は天正十年和田信業が再建したと伝う。
〃	〃	坂上 田村麿	清水寺の開基、観音山に陣をはり、東夷が威を張つていた利根川を中心にして平定したが、観音の信仰者なり、清水寺の観音像はその作と伝う。(七五八—八一—)

二、赤坂の莊時代

和田の以前、赤坂の莊時代というのがある。赤坂の莊は王朝時代の名称にして、莊は莊田より出ているが、この時代に活躍した人物は文献に残っているものが極めて少なく、一部史家のうちには赤坂の莊時代は、あるいは無かつたのではあるまいかとさへ言われる。それほど伝説めいた人物が出て来るからである。この時代の人物として知ることの出来るのは新田義重を中心とした山名、寺尾郷における人々であり、のちの高崎は従つて片岡、山名の丘陵を中心として文化が開かれたのである。

八六四	貞観 六	慈観 大師	上並覆護国寺を建立した名僧なり、この寺に小野道風の額あり。当時僧坊三百余を数えた大名寺なり。
八七四	一六	真 覚	僧正真覚は石上寺の開山にして宮元町にあつた。井伊直政築城の時箕輪より移る。

一〇六二	康平 五	八幡太郎義家	衣川に貞任を打ち、碓氷八幡宮に奉幣する。また前九年の役の際豊岡若宮八幡に参拜し奉幣した。更に永承六年六月十八日若宮八幡にも祈願しここで薄雪の松の奇蹟が現われる。この頃豊岡は十八日村とも称した。
一〇六三	康平 六	梶原 景時	頼朝義仲征伐に際し、祈願所とし畠山重忠の両名に命じ八幡八幡宮社殿を改修せしめ田百町を寄進時の関白なり。赤坂荘を所領する。赤坂荘は和田以前の高崎なり、堀河天皇の藤原氏末期にしてこののち藤原氏亡び源氏の時に赤坂城が出来たと伝う。
一一〇〇	康和長治	藤原 忠実	義盛の八子、寺尾郷根小屋城を築く、仁平四年に寺尾館を築いたとも言われ、和田城の祖なり。従五位下式部大夫、加賀守なり。妻は藤原基綱の女なり。
一一一六	永久 四	源 義国	小八木・妙典寺の開山なり。
一一四五	久安 一	秀存 法師	義重の二男、大炊助に任じ根小屋城に住す。そののち世良田に移る、義兼ともいふ。皇嘉門院藏人でもあつた。
一一五二	仁平 四	新田 義包	母の父上野介藤原敦基に拠り、上野に帰す、碓氷、片岡、群馬各郡を管す新田と称す。寺尾館を作つたと伝う。式部大夫義国の一男なり。永久四年八月十五日根小屋城に生まる。
一一五五	〃	源 義重	義重の女なり、悪源太義平の室となり、義仲に滅ぼされ寡婦となる、頼朝に望まれたが師六郎に嫁す、このため義重、頼朝に憎まる。
〃	仁平年間	妙満比兵尼	義重の三男、のち義之と改む。その子義郎より八代時代まで山名城を守る。緑野郡片岡郡に封じ山名三郎義範と称す。義経に従い平家を攻む。山名八幡宮社殿を建築する。従五位下伊豆守なり。
一一五七	保元 二	新田 義範	義重の長男、碓氷郡里見郷に封ぜらる。八幡、豊岡をその旗下に治め、四男得川四郎義季、五男額戸五郎経義、六男新田冠者義光みなこの地に起る。和田合戦に敗れ、上野国白川郷に逃れ誓居す。和田の祖にして義盛の大男とも言う。
〃	〃	里見太郎義俊	天台の僧、東谷陵の開祖にして下横町興禅寺の開山なり。
一一七七	治承 一	和田 義信	秩父平四郎行高の子にして倉賀野に來り住み、倉
〃	〃	良 尋	
〃	治承文治	秩父三郎高俊	

一一七七	治承文治	倉賀野 秀行	賀野と称す。武藏七覚児玉党の族なり。太郎兵衛尉にして三郎高俊の子なり。倉賀野城主となりその子行澄に伝ふ。朝経入朝するやその随兵百九十二騎の十四番に列す。
一一八〇	治承 四	足利 俊綱	平家に属し上野国寺尾城に拠り、千葉常胤が頼朝に應ずるを憤り火を放ち府中の民家を焼く。総社町日枝神社もそのとき焼かれた。
一一八五	元暦 一	源 頼朝	木曾義仲追討のため碓氷八幡の八幡宮に祈願する頼朝の弟にして兄にくまれて亡命。この頃碓氷峠の伊勢三郎の家にかくれて居り、豊岡には義経の腰掛石なぞ残れり。
一一九〇	建久年間	源 義経	寺尾住人、頼朝入洛の先陣随兵二十二番にあり。寺尾住人、頼朝入洛四十三番にあり、太郎の弟なり。
〃	建久 一	寺尾 太郎	倉賀野の住人、その娘は頼朝の腰元となり頼朝の子を生む。
〃	〃	寺尾三郎太郎	新田義範の子にして山名城をつぐ。山名太郎重村、山名二郎義長、山名孫三郎これをつぐ。
〃	〃	大友新右衛門	金売吉次が旅館を襲つた賊で豊岡の人という。頼朝が大友新右衛門の娘に生ませた子にして、のち豊後臼杵の城主となる。
〃	〃	山名 義節	この年三月廿一日頼朝那須野及び上野国三原野に狩倉し二十二人がそば近くお供したその一人、碓氷嶺の武人、この時佐々木三郎盛綱、藤沢二郎清親、波谷二郎高重もいたがいずれも上野に關係ある武将なり。
〃	〃	豊岡 源八	寺尾太郎の子なるべし、承久の役、北条泰時父子に従い左衛門尉と共に京師に攻めの怪る、承久の役には傷を負えり。
〃	〃	大友一法師	又太郎と共に京師に攻め上り、三年六月十四日宇治橋に奮戦して戦死する。
一一九三	建久 四	里見太郎義成	義範の孫なり。即ち太郎義節の子にして太郎重国は承明門院の藏人、承久の役に出陣し戦死、二四才なり。その長子小太郎朝家、次子小太郎重村、三子国長、四子小太郎義房、五子八郎義行、みな山名氏を称す。
〃	〃	寺尾左衛門尉	父は左近大夫、關東軍にあり、今の小橋、新波は長野郷にして師政支配する。
〃	〃	山名 重国	
一二二〇	〃	箕輪太郎師政	
〃	〃	〃	
一二一九	承久年間	寺尾 又太郎	

一二三七	嘉禎 三	佐野 小太郎	源左衛門尉、源左衛門常世が父なり、上野上佐野城主となりこの年歿した。
一二四一	仁治 二	藤原 定家	新古今集を編纂、上佐野に住んだと伝う。定家神社の祖にして、ここで歌をつくる。雑髪し明静と称し諸国を行脚す。文治元年殿上で源雅行と争つて上野に流されたといふ。
一二四一	仁治年間	藤原 家隆	乗附郷に居住、定家と歌川町に歌合戦をしてその名残る。家隆神社に祀られ、石船で烏川を渡つたと伝えらる。

三、和田城時代

和田の一族が赤坂の荘に移り住んで、その勢力日に日に強力になるに従つて遂に和田時代を形勢し、赤坂の荘の中心として和田城が建設され、道路が開かれここに和田文化が築かれた。一方、寺尾中城、寺尾茶臼山城、山名城、根小屋城を始め、浜川、大類、木部の砦や館を中心として武将がその勢力を張つてこれより戦国時代に入り、これ等の頭領の運命に左右されて、文化はのびなやみ状態に入つたのも当然で、この中であつて和田宿は、箕輪城の長野氏の重大な要所ばかりでなしに、交通の中心点となり中山道、鎌倉街道などが開かれて、鎌倉文化がしきりに入つて来て和田宿の文化もおおい高まつて来た。しかし上杉、武田両氏の争覇はここ西上州に及び、長野氏が信玄に亡ぼされるに至つて和田城もその犠牲になつて運命を決し、バトンを次の世に渡さざるを得なくなつたが、高崎の基礎となつたのは実にこの時代が最初であらう。

一二四三	寛元 一	和田 正信	義信の子、赤坂に移り宿を開く。父祖のため興禪寺を下横町に建立した。又相洲三浦より熊野、二宮を勧請し鎮守神とした。
一二四四	寛元 二	新田 政義	義重の曾孫なり。父義房と共に新田荘寺尾城に居り、義貞の祖となる。この年上野国役となる。
一二四七	宝治建長	佐野源左衛門	常世という、鎌倉武士なり。佐野に住み謡曲『鉢の木』の主人公、常世神社あり。
一二四九	建長年間	落合 和泉	武田信玄の家臣にしてこの頃浪人し赤坂に住む、井伊直政築城に際し十一面観音菩薩（是行基菩薩作）を城中より赤坂御門に移す。
一二五〇	建長 二	宝 伏	田町慈上寺の祖なり。普化庵無寺にして今はなし幕府軍勢第四番にあり。山名郷に住し頼朝に味方す。山名義範の胤。正安三年八月廿五日謀反の風聞あり捕えられて誅せらる。
一二五一	建長 三	山名中務俊行	幕府軍第三番にあり。
〃	〃	山名中務直景	〃

一二五八	正嘉 二	山名進二郎	行直、將軍に供奉し鶴岡八幡奉幣供奉人となり第二番にあり、山名の住人、左衛門尉なり。
一二六一	弘長年間	並榎 将監	庄九郎と共に上並榎の烏川にのぞむ要所に和田時代五稜形をした塁城を築く。
〃	〃	和田 信高	赤坂の荘を開き、和田宿と改む。新田氏に属す。正信の孫なり。
〃	〃	弘長 一	赤坂の荘を開かれた頃稚水郡八幡に住む。武蔵一の宮大國魂神社付近の不動堂に銅の阿弥陀如来を献納しその台に檀主として縁友伴氏と共にその名刻まる。
一二七四	文永 一一	柏 七	信州小方郡白鳥宿住人、祖先のためこの年九月二十三日金銅製地藏尊を下小墻、円性寺に献納、今に残る。
一二〇三	乾元 二	寧 一	興禪寺再興の開山なり、この頃新田氏光が寄進した大鐘がこの寺にある。
〃	〃	新田 氏光	興禪寺に大鐘を献す。この銘に乾元二癸卯歲五月新田氏光寄進と見ゆ。氏光は義貞の父朝氏とも又はその弟ともいふ。永仁六年二一才で早世。
一二四一	元弘年間	豊岡三郎義行	新田の族、里見義俊の三男、豊岡郷の領主となる。若宮八幡を信仰したと伝う。
一二四六	延元 一	飯谷伊介道政	宗良親王を遠州に迎え奉る。のち道政が女宗良親王の御子尹良親王を生む。
一二四九	正平 四	和田 高重	大炊助にして寺尾城を築き、宗良親王、尹良親王をここに迎えて護る、信高の子なり。
〃	〃	宗良 親王	正平四年より七年まで寺尾城に居られ、詩藻に富まれ上野での歌多し。その御子即ち尹良親王なり。
一二六八	正平年間	良 王 君	尹良親王の御子なり。寺尾城中において御降誕。
一二八三	永徳 三	鳥屋新左衛門	上小墻・鳥子稲荷の石宮にその名刻まれている、林七右衛門、山田左衛門と共に同村の人なり。
〃	〃	山田 左衛門	上小墻・鳥子稲荷の神主なり。鳥屋と共に石宮にその名刻まれている。しかしこの石宮に永徳三年とあるが後年の人が刻みなおしたもので実際は元和九年のものではないかとも言われている。
一二八四	至徳 一	美珍 真禪尼	この年七月十七日が命日で浜川館の祖長野氏の墓地が来迎寺にある。同寺の僧なり。
一二八五	至徳 二	清 海	若松町・光明寺開山なり。
一二九一	明德 二	惠藏 法師	上大類・安楽寺開山なり。
一二九四	応永 一	義照 法師	中尾・大福寺開山なり。

一三九四	応永年間	倉賀野行光
一三九八	応永五	世良田政義
一四〇〇	応永七	尹良親王
一四〇三	応永一〇	信濃宮伝
一四一〇	応永一七	小鳥道通
一四一八	応永二五	和田義信
〃	〃	和田信忠
一四四四	文安一	寛文法師
一四四九	宝徳年間	長野乙業
一四五八	長祿二	修天禅尼
一四六五	寛正六	和田信景
一四六七	応仁年間	佐藤次郎少輔
一四六九	文明年間	沙門元海
一四七〇	文明二	円山
一四八五	文明一七	千葉勘五郎
一四八六	文明一八	道興准后

倉賀野行澄の二子にして智略あり、新城を築き、これを倉賀野城と称す。
 寺尾城にあり、後醍醐天皇の皇子宗良親王の御子尹良親王を擁して鎌倉と戦う。政義の女との間に生れたのが即ち良王君なり。
 この年正月遠藤の兵を率いて寺尾城に入る。尹良親王は後醍醐天皇の孫にして征夷大将軍宗良親王の御子にして鎌倉と戦う。
 この年四月、高崎、安中、碓氷に賊あり、これを破つて平定する。
 小鳥・幸宮神社境内にある石宮にその名陰刻されている。この郷の人なり。
 正信六世の孫にして和田に住す。南北朝紛争の時に当り智略ありて近傍を併呑し勢力を扶植する、和田氏初めて強大となり上杉憲政の旗手となる。
 正信六世の孫義信の子にして和田に住す。この年城を築くともいふ。即ちのちの高崎城なり。更に愛宕神社をたてる。
 下和田・宗真寺開山なり。和田義信の開基なり。在原業平二十八世の孫で長野氏中興の祖なり。浜川字道場の北方に乙業の館を築く。その南に居館を構えたのは乙業の男隆業である。
 正月二十二日歿す。長野氏の祖にして浜川館に關係あり。来迎寺にその墓碑残る。
 信忠の子なり。後土門帝の時、足利將軍義政に従い、兵衛尉に任じ、和田城主となる、更に応仁元年上杉顯定旗手となり永祿六年歿す。
 小幡氏の老臣、寺尾豊後守にして野付凶獄正として寺尾を三つに割つて采地とした、その三つ即ち寺尾、石原、野付なり。
 赤坂町・長松寺の開山にして名僧なり。
 通町・庚申寺開山。明治三十八年焼失し今はなし
 千葉常胤の四男、大須賀信胤の子にして大須賀姓をも名乗る、猛将にして大八木融通寺に墓碑残れり。この年三月歿す。
 関白近衛房嗣の第三子、幼にして出家、この年東国に旅して『回国雜記』を出す、豊岡や片岡にあそび歌を詠じている。

一四九二	明応年間	長野守業
一四九八	〃七	明茫禅定尼
一五〇二	文亀二	松田宗繁
一五〇三	文亀三	長野尙業
一五〇四	永正一	和田信輝
〃	〃	増鏡上人
〃	〃	深貴法師
〃	〃	新田信種
一五〇八	永正五	一心僧都
一五〇九	〃六	新田義国
一五二五	大永五	清水新二郎
一五三二	天文年間	長野康業
〃	〃	文瑚和尚
〃	〃	松本三左衛門
一五三四	天文三	荒船善慶

伊勢守にして浜川館城主なり。戦略上からこの城を鷹留城に移す。浜川館は在原乙業、隆業時代につくられたもので、乙業の館ともいふ。
 浜川・来迎寺に關係あり、この年四月十七日歿しここに墓碑あり。
 加賀守なり。この年京都の宗祇が伊香保温泉からの道すがら浜川の館にたづね十日余り滞在し連歌を作つた。その年箱根で宗祇は病のため歿している。
 乙業の子、浜川城にあり。室田の鷹留城を築いたのはこの人と伝えられる、長子憲業は即ち箕輪城主である。尙業この年二月二十日歿す。
 右兵衛大夫なり。和田城主、祈願所のため興禅寺を再建。天文七年七月二十日北条と戦い川越で戦死す。勝業とも称し天文元年熊野、五靈神社も勧請した。
 中紺屋町・玉田寺開山なり。この寺和田信輝がたてた和田氏の寺なり。
 中居・発性寺開山なり。
 和田の武將信忠の子なり。兵部大夫となり足利氏に仕え武功あり。
 和田兵衛信業の臣、反町大膳亮の四男なり。上中居極楽寺を建立。
 新田荘にあり、尙純と称す。宗長紀行の時、五六日滞在し連歌をなす。その墓八幡の森の東方水田中にあり、貞松院殿尙純君之塚とある。
 晴正の長子、長野信濃守に属し和田山に住む。清水赤城の祖なり。
 長野堰を開発したと伝う。平城天皇の皇子阿保親王の裔、上野の守に任ぜられ浜川の館をまもる。大永頃より着手する。
 興禅寺の第二開山なり。この寺に文瑚のかいた和田古城図あり。
 和田に痘瘡流行したとき全治せしむ。敬神厚く鰻を同病に移し長野の川に投ず。今にこの川に片目鰻残り。
 和泉守なり。熊野神社(今の高崎神社)にわに口を献納す。

一五三八	天文七	賢宥 法師
一五四四	天文年間	和田 信業
〃	天文一三	倉賀野 行政
〃	〃	小野 播磨守
〃	〃	上杉 憲政
一五四六	天文一五	金井 秀景
〃	〃	秩父 行政
〃	〃	内藤 修理
一五四九	天文一八	原 加賀
〃	〃	原 隼人
〃	〃	馬場 民部
〃	〃	浅利 式部
〃	〃	小宮内 丹後
一五五〇	天文一九	山田 与太郎
〃	〃	和田 業繁
一五五一	天文二〇	和田 業繁
〃	〃	大類 伊勢守
〃	〃	木部 定朝
一五五五	弘治年間	然空 玄廓
一五五六	弘治二	通岩 遠和尙

下之城・如意寺開山なり。
 信輝の孫なり。甲斐の勝資の子で業繁の養子とな
 る。勝資の位牌を興禪寺に納めた。玉田寺を開基、
 天正十三年北条に従い戦死する。
 倉賀野城主、行信の子にして三河守と称す。北条
 氏康に従い川越合戦に敗れて戦死。
 行政と共に川越合戦に戦死する。倉賀野党の金井
 景秀、福田伊賀守、須賀佐渡守、富田伊勢守、須
 田大隅守、田沼庄左衛門等十六騎城をまもる。
 川越の合戦に敗れて平井にかえる。のち和田付近
 の合戦で戦死、乗附普濟寺に位牌と墓地あり。
 倉賀野党にして前進する武田晴信の軍を碓氷峠に
 迎えて戦い敗れる。死するもの千二百人。のち永
 祿二年板鼻の役に戦功あり信支より賞され、倉賀
 野淡路守となる。業政の七女を妻とす。
 倉賀野城主、この年七月十五日川越の戦に戦死する。
 この年九月三日武田信支は和田に來り上杉と合戦
 和田城を中心として行われ和田勢大いに戦つて上
 杉勢を敗る。これを三寺尾の合戦と称し内藤等五
 手をもつてこれを破り五百七十二首を打とりこれ
 を埋めたのが石原の千人塚である旨甲陽軍鑑に記
 されて和田武士の武功をたたえている。
 上小塙・稻荷神社の弥宣、武田信玄上野国攻略の
 時、小笠原長時と戦う。その際武運長久を祈願す。
 和田城主、初め五郎左衛門後右兵衛大夫と改む。
 その妻は長野氏の女。三十騎、初め上杉に属し
 のち武田に移る。三寺尾合戦に武功あり。更に永祿
 九年七月謙信一万三千を率いて和田城を攻めたが
 死守す。天正三年長篠合戦に敗れて戦死す。信輝
 の子なり。
 大類岩の城主にして長野氏に属し武田信玄と戦つ
 て敗る。源義頼に従い平治の役に武功あり。
 宮内少輔にして木部城主、長野氏の第四女を妻と
 し武田勢と戦つて敗る。この妻様名湖畔にのがれ
 湖に身を投じ蛇となつたと伝えらる。定朝自害す。
 駿河守範虎ともいう。
 九藏町・大雲寺の開山なり。
 下中居・普門寺開山なり。

一五五八	天文永祿 永祿一	蓬萊太郎成重 芳宝長慶禪師
〃	永祿年間	和田 正盛
〃	〃	憲重成道子 和田 朝常
〃	〃	又大郎 憲重 又四郎 重国
〃	〃	重 国
一五六一	永祿 四	村上彦四郎義国 長 太 郎
〃	〃	心巖長信和尙
一五六二	永祿 五	武田 信玄
一五六三	永祿 六	青柳金全忠家 下田大膳昌勝
〃	〃	白川五郎滿勝
〃	〃	清水内証正智
〃	〃	北爪 土佐守
〃	〃	矢島久左衛門
一五六五	永祿 八	横田十郎兵衛
一五六六	永祿 九	反町 大膳

明珍家一門の鍛工なり。八幡に住む、父は康重なり
 宿大類・慈眼寺開山なり。
 越中守、和田城主業繁の弟にして下の城主なり。
 三寺尾合戦に加わる。天正十八年落城、初め弥一
 郎のち又左衛門信景と称す。
 刀匠、和田並白井に住んだという。
 新兵衛尉、和田城主、長野氏に属して武田勝頼およ
 び加賀守に攻められて落城した。幼名六郎丸なり
 明珍家一門の鍛工なり。和田(高崎)に住む。
 右に同じ、重国の子九郎国重は白井に住む。
 成道子の門人、刀匠なり。和田に住む。
 豊岡郷住人、薬王寺境内に墓あり。
 倉賀野の人、喜太郎、庄兵衛、善右衛門、八左衛
 門、新右衛門、善兵衛、九郎兵衛、五兵衛の十人
 でこの年二月六日倉賀野河岸を開く。慶安年中に
 既に問屋があつたという。
 下之城・徳昌寺開山なり。
 この年箕輪城を攻め落し八幡豊岡に布陣し永祿十
 一年には足利幕府の許可を得て、碓氷の八幡宮の
 祭祀を掌つた。
 下田、白川と共に箕輪城主長野氏の武将。
 この年正月二十日(一説に秋)武田信玄の三万五
 千余を碓氷郡若田カ原で喰いとむべく戦つたが、
 力つきて敗る。これを若田カ原の合戦と称し箕輪
 城はこれによつて落城した。
 我峯にあつた住吉城主、住吉玄審の城代としてこ
 の城を守つたが箕輪と共に亡ぶ。
 浜川と南新波との間にあつた城を北爪因防の城と
 いう。箕輪の保るいであり、北新波の岩と共に武
 田勢に亡ぼされる。
 浜川に矢島久左衛門の城を築いて守る。信玄と戦
 い寄手の大将堀意安と槍で戦つて武名を残し、の
 ち浪人す。
 和田城を守る甲州の武将。鉄炮の名手輝虎を城中
 より狙撃して知らる。城中に横田の腰掛石があつた。
 幸定なり、和田兵衛大夫信業の部下として永祿九
 年七月の和田城合戦に武勲をたてた槍の名手。天
 正十八年小田原落城と共に浪人し佐野郷に數居す。

一五六六	永祿年間	徳井 伊賀	和田業繁の下臣にして永祿九年の和田合戦に謙信と戦い、この城を死守して武勲を残す。
〃	〃	柴田 弥次郎	右に同じ。
〃	〃	須藤 伊勢	右に同じ。
〃	〃	後閑 左京	右に同じ。
一五六八	永祿一一	武田 信玄	甲斐の名将、西上州の諸城を破る。この年足利義昭の命により八幡八幡宮の祭儀を司る。
〃	永祿年間	望月 甚八	武田の家臣にして永祿十三年信玄により新城を設け守らせられる。この城根小屋城なり。
〃	〃	伴野 助十郎	右に同じ。
一五七〇	元亀 一	梶山与三左門	武田信玄和田地方(現高崎)を征服し、信玄より和田宿問屋の許可をうける。
〃	〃	総管 誓巖	和田宿問屋の許可をうける。
一五七一	元亀 二	長野 正兼忠	通町・大信寺開山、武州巖槻の城主、北信氏房が伯父なり。和歌をよくし元和三年入寂。初め武藏平方馬蹄寺に住し、円蓮社総管終願と号し蓮馨寺の学頭となつた。
〃	元亀 二	光 誓	濱川・善長院開山なり。
一五七二	元亀 三	宝泉 法師	新町・延養寺開山なり。足利尊氏の祈願師であつた。
〃	〃	清水 六郎	通町・安国寺中興の開山、慶長年中箕輪より移る。
一五七三	天正 一	木雲宗沆和尚	慈光山常照院と号し京都智恩院末寺なり。
一五七五	天正 三	防村新左衛門尉	新保・華王寺開山なり。
〃	〃	秋山 縫殿亮	晴重の次男正功なり。長右衛門と称し赤坂に移る。赤坂の祖なり。
〃	〃	長島 因幡	上佐野・光雲寺開山なり。
〃	〃	大沢 備後	謙信の旗下にして上野で勇戦、豊岡薬王寺境内に墓石あり。
〃	〃	福島加兵衛	長篠合戦に和田信業に従つて徳川方酒井忠太と戦い。比類ない手柄をたてて敗れ敗軍の中から信業を救う、和田の七騎の一人なり。

天正、慶長の間に感状九、首級三十三をあげる。佐野の羽林寺に慶長三年春首供養を営む。上中居極楽寺開山。

和田業繁の下臣にして永祿九年の和田合戦に謙信と戦い、この城を死守して武勲を残す。

右に同じ。

右に同じ。

右に同じ。

甲斐の名将、西上州の諸城を破る。この年足利義昭の命により八幡八幡宮の祭儀を司る。

武田の家臣にして永祿十三年信玄により新城を設け守らせられる。この城根小屋城なり。

右に同じ。

武田信玄和田地方(現高崎)を征服し、信玄より和田宿問屋の許可をうける。

通町・大信寺開山、武州巖槻の城主、北信氏房が伯父なり。和歌をよくし元和三年入寂。初め武藏平方馬蹄寺に住し、円蓮社総管終願と号し蓮馨寺の学頭となつた。

濱川・善長院開山なり。

新町・延養寺開山なり。足利尊氏の祈願師であつた。

通町・安国寺中興の開山、慶長年中箕輪より移る。

慈光山常照院と号し京都智恩院末寺なり。

新保・華王寺開山なり。

晴重の次男正功なり。長右衛門と称し赤坂に移る。赤坂の祖なり。

上佐野・光雲寺開山なり。

謙信の旗下にして上野で勇戦、豊岡薬王寺境内に墓石あり。

長篠合戦に和田信業に従つて徳川方酒井忠太と戦い。比類ない手柄をたてて敗れ敗軍の中から信業を救う、和田の七騎の一人なり。

秋山等七名と共に武田勝頼より感状を受け退口七騎の一人なり。

和田の七木槍と称せられた勇士、関東にきこえた武将なり。その邸址今に矢中に古宅址として残る。

武田氏その功を賞し、矢中の郷を与えたので世に矢中七騎とも称す。

四、高崎城時代

一五七五	天正 三	松本九郎兵衛	享保十三年興禅寺内にその七騎の墓を建立、その一人にして今古き五輪碑あり。また古宅址矢中に残る。和田七騎の一人なり。
〃	〃	真野 下野	この年十二月十七日豊岡庄岩長郷寺尾村清水寺本堂宇建造に須藤孫左衛門、松本半右衛門、齋藤右馬助等と共に十四を献納している。
一五七七	天正 五	高井孫太郎	嘉多町・覚法寺開山。
〃	〃	存 詩	和田信業の弟にして元紺屋町善念寺開山なり。
一五八〇	天正 八	岌菅 心故	父信盛天正七年長篠の合戦で戦死し、浪人となり豊岡に移る。常安寺前を開き杉を植える。
一五八一	天正 九	飯野善左衛門	木部長野姫の一子なり。幼名新九郎、父範虎と共に武田氏に従い、この年父範虎、勝頼に殉ず。貞朝は滝川一益に従う。
一五八二	天正 一〇	宮内少輔貞朝	石原・清水寺住職。和田信業によりこの時建立され棟の銘に「堂一字上野国豊岡庄岩長郷寺尾村清水寺」とあり。
一五八三	天正 一一	別当 祐清	惠徳寺開山にして名僧なり。直政伯母惠徳院宗貞尼公のために建立したるもの。
〃	〃	竜山 英潭	武田信玄より社領寄進の証が残されており、上小墻の稻荷神社の禰宣なり。
一五八五	天正 一三	山田 宮内助	美作守なり。総社神社に懸仏の鏡を奉持した人で和田(高崎)の人とも称される。この年丙戌歳三月四日と書かれている。
一五八六	天正 一四	小島 定吉	中石原・利濟寺開山なり。慶長十三年十一月入寂する。
一五八七	天正 一五	道光 和尙	石原・利濟寺住職。
〃	〃	天寶 竜尊	井伊直政の乞いにより龍広寺開山す。城地鎮護のため千人法幢を行い高崎山と号す。和田をして高崎と改名せしめた発案者とも言われる。烏川畔の露の松より始め松が崎と直政が命じたのを改めたもの。
〃	天正年間	白菴 秀閑	

享保十三年興禅寺内にその七騎の墓を建立、その一人にして今古き五輪碑あり。また古宅址矢中に残る。和田七騎の一人なり。

この年十二月十七日豊岡庄岩長郷寺尾村清水寺本堂宇建造に須藤孫左衛門、松本半右衛門、齋藤右馬助等と共に十四を献納している。

嘉多町・覚法寺開山。

和田信業の弟にして元紺屋町善念寺開山なり。

父信盛天正七年長篠の合戦で戦死し、浪人となり豊岡に移る。常安寺前を開き杉を植える。

木部長野姫の一子なり。幼名新九郎、父範虎と共に武田氏に従い、この年父範虎、勝頼に殉ず。貞朝は滝川一益に従う。

石原・清水寺住職。和田信業によりこの時建立され棟の銘に「堂一字上野国豊岡庄岩長郷寺尾村清水寺」とあり。

惠徳寺開山にして名僧なり。直政伯母惠徳院宗貞尼公のために建立したるもの。

武田信玄より社領寄進の証が残されており、上小墻の稻荷神社の禰宣なり。

美作守なり。総社神社に懸仏の鏡を奉持した人で和田(高崎)の人とも称される。この年丙戌歳三月四日と書かれている。

中石原・利濟寺開山なり。慶長十三年十一月入寂する。

石原・利濟寺住職。

井伊直政の乞いにより龍広寺開山す。城地鎮護のため千人法幢を行い高崎山と号す。和田をして高崎と改名せしめた発案者とも言われる。烏川畔の露の松より始め松が崎と直政が命じたのを改めたもの。

長い間の武田、上杉の勢力争いも、やがて生れた新勢力に押しつぶされて、遂に世は徳川政治下に入った。和田氏は天正十八年の戦いに敗れて和田氏が全く滅び廃城となつたが、徳川幕府は箕輪城に護りをかためた井伊直政をして和田の守護に当らしめ、ここに改めて城を再建し名も高崎城と新しい芽ぶきが始められた。高崎の名はこの時に興りしむかに七百二十四戸に過ぎなかつた和田宿

も、直政の移り住んだことにより商業の道が開かれ、遂に『お江戸見たくば高崎田町、紺ののれんがひらひらと』とまで歌われる程の繁昌を見るに至り、問屋街の出現により、奥利根から新潟へ、碓氷峠から長野にまでその販路を広め、これに伴って人材もまた多く出て、新しい文化が生れた。徳川三百年の和平は封建的な諸制度となり、庶民をして苦しめはしたが、高崎宿は大河内一門の政治が民心を安定せしめ、商業都市として発展を示すと共に、一方に文武二道の振興にも力をそそいで、バトンを明治政府に移した。高崎の歴史において文献に残されているのは実にこの時代からである。また人物にも井伊直政、大河内輝貞、清水赤城、羽鳥一紅など傑出した人々が生まれた。

一五九〇	天正一八	井伊直政	小字を萬千代丸、姓藤原、遠州井伊直親の子なり。家康に認められ、小田原合戦に功あり。この年八月箕輪城に封ぜられて十二万石、更に慶長二年和田宿に移り高崎と改む。高崎城を再建す。関ヶ原の合戦に負傷している。十一月江州佐和山城主となり十八万石に榮進、慶長六年四二才で歿す。慶長二年中仙道を開く。
〃	〃	松本市右衛門	和田氏従僕にして和田氏没落後髮を剃り医師となり名を道観と改む。四ッ屋町に住み元和七年、ここより出火、城下ごとく焼失した。
〃	〃	松鷄軒常安	彌津の城主であり徳川家康より和田城西、豊岡領を賜る。根津新兵衛又は彌津宮内の大輔昌直と称した。
〃	〃	秩父三郎左衛門	盛勝と称す。応永中に倉賀野の城を築いた高俊四世の孫、小田原合戦と共にこの城も落つ。
一五九三	文禄二	本龍院白敬	九藏町・正法寺を箕輪より移す。
一五九五	〃	明堂芳珠和尚	寺尾・永福寺開山なり。
〃	〃	正法	この年箕輪城の大手門を築いたが、この門のちに高崎城の榎木門となり正法作の刻字がそのまま残されていた。
一五九六	慶長一	彌津神平	豊岡郷領主なり。下豊岡の常安寺をたてる。上大木(中川)百姓なり、民部、円藏、養周等と協力しこの年五一筆四五〇畝余を開墾する。
〃	〃	求馬	井伊直政の時、刀鍛冶として名あり、高崎に住み吉重と名乗る。
一五九七	慶長年間	落合七兵衛	三郎次郎と云い、のち左近と称した、従五位に叙す、真乗が二男、この年二月武藏、上野兩國の賊徒十三人徒党し飯塚に拠るを真次これを平ぐ。
〃	〃	松平真次	

一五九七	慶長二	甚五右衛門	中川上八木田(今の正観寺)で三町三反一畝二一歩を開墾した。
〃	〃	伊太夫	甚五右衛門と協力する。
〃	〃	伝州忠的	下横町・向雲寺開山なり。
〃	〃	大類太郎季行	大類城主、大類伊勢守弾正の子孫にして大類五郎左衛門行義の子なり。また二郎行定も行義の子なり。宿大類にはこれよりさき大類氏あり、武藏児玉党の派にして関係あると思われ。
一五九八	慶長三	梶山与三右衛門	和田宿金井に住居、井伊直政に協力して本町に移り問屋年寄の役をつとめる文化人なり。その子孫明治五年までこれをつぐ。なおこの年糸市のため高崎宿に市日が設けられ、五、十の日、三、八の日と定めた。
〃	〃	中村下野	彌津甚平の家老にして豊岡の宗伝寺を創建している。
〃	〃	清虚梵理	上豊岡・宗伝寺の開山、大和尚なり。
〃	〃	貝発新兵衛	箕輪の富豪にして城主の命により連雀町に移り長となる。関ヶ原の合戦に功あり、黒印を賜わる。
〃	〃	信普单求	二代目大信寺住職、この年井伊直政に従つて西明屋の大信寺を現在のところに移す。
〃	〃	賢芳代	浜尻・真福寺住職、高崎石上寺末社にして天正七年創建さる。
一五九九	〃	祐慶法印	新保田中・延命寺開山。
〃	〃	西郷藤左衛門	井伊氏の臣、九藏町の法華寺の中興なり。高崎城完成と共に西郷は市街の区画を制定したがこれが今日の市街の基であり、のち箕輪より人家を移す新町の人、井伊家より五月端午殿閣諸門に菖蒲を飾り、更にその年の暮松飾を命ぜられた。
〃	〃	飯塚常仙	領内に居り功あり、運雀町の地子を免ぜられる。慶長三年頃浜尻の真福寺を開山す。
〃	〃	堀口務右衛門	善右衛門という。初め赤坂町に住み、のち鍛冶町に移る、刀工なり。
〃	〃	和田舟瑞	直政佐和山に転仕したあとの高崎城代なり。四年後信州諏訪郡に移る。二万石なり。
〃	〃	守重守行	城下に町道場を開き武道の達人として知られたが門弟の事より馬庭の樋口定次と争い烏川河原で血闘して斬らる。定次の割つた石今に山名八幡前に残る。
一六〇〇	慶長五	諏訪五郎	
〃	〃	村上天流	

一六〇一	慶長	六	金最	和尙
一六〇二	〃	七	大沢市	左衛門
〃	〃	〃	茂右	衛門
一六〇三	〃	八	忠尊	法師
一六〇四	〃	九	羽鳥	大和
〃	〃	〃	酒井	家次
〃	慶長年間	〃	慧	賢
〃	〃	〃	龍山	英潭
〃	〃	〃	秋元	長朝
一六〇五	慶長年間	〃	伊奈	忠次
〃	〃	〃	江原源	左衛門
一六〇八	慶長一三	〃	門休	和尙
一六一二	慶長年間	〃	箱田吉右衛門	〃
一六一三	慶長一八	〃	大谷三右衛門	〃
一六一四	〃	一九	祐善	法師

飯塚・長泉寺開山なり。
 武勝、箕輪城下から直政と共に高崎田町に來り住む。この年、長となり勤続三十年、寛永十年三月二十三日七才で歿す。
 田町の人、治郎右衛門と協力して、篠場橋を烏川にかける。今の君が代橋の基であり、渡銭を徴した新保・善性寺開山なり。
 高崎の人、この年歿す。麦舟、一紅の祖なり。
 高崎城主となる。五万石を領し、大阪夏の陣に功あり、元和二年十一月高田に移されて十萬石、親氏の庶長子なり。小字は小五郎、家康偏諱を賜いて名付く、天正十六年封をつく、元和四年三月歿す。中仙道は通町が本通りであつたのを本町三丁目から九藏町を通る道を開く。
 酒井家次の子息病悩の時加持、宇賀白蛇法を十七日修行し全治せしめた。若松町の光明寺住職なり。寺領十一石と二千七百坪を賜わる。
 赤坂町・惠徳寺の開山なり。門前は皆竹林であつたのを正保年中これを開き民家を建て町並とする上杉管領家の臣、初め名孫四郎、行朝の子にして越中守と称し、知謀をもつて知らる。この年高崎城主井伊直勝に領内耕耘の用水乏しきを敷じ溝渠を穿たんことをすすむも入れられず、独力衆を指揮し利根川より引水すること数里、天狗岩用水を疏通さす。寛永五年給社城に卒す、年八三。
 酒井家次の頃法輪寺を開山、酒井宮内丞によつて建立したと伝う。
 備前守、代官なり。この年代官堀を試掘し慶長十三年起工、十五年に完成した。
 重久、伊奈忠次代官をたすけて代官堀疏通に協力し農耕に寄与する。
 中石原・利濟寺住職。同十九年永福寺に転じ、寛永十八年十月廿八日入寂。
 箱田將監の孫、このとき浜尻に移る。母は反町美濃の娘、今に箱田屋敷に残る。
 高崎宿の年寄、田町に住す。高崎宿に佐渡御金藏があり元祿五年建てたという、この係をしていた板鼻の鷹巢寺の開山、修験者にしてこの年三七日

一六一五	元和一	〃	酒井	雅楽頭
〃	〃	〃	北爪	九藏
〃	〃	〃	井伊	直勝
一六一六	元和二	〃	相阿弥	陀仏
〃	元和年間	〃	角田儀右衛門	〃
〃	〃	〃	松平	康長
一六一七	元和三	〃	不残	和尙
〃	〃	〃	松平	信吉
一六一九	〃	五	安藤	重信
〃	元和年間	〃	湯浅与左衛門	〃
〃	元和五	〃	伝	洲

の間金比羅大権現の秘法を修行した。片岡郡石原乗附、寺尾の三村はこの支配する霞村にあつた。岩鼻陣屋を支配していた。その子宝曆二年九月山名八幡に神地二町七反一畝余を寄進した。
 酒井家次と共に大阪夏の陣に旗持として出陣武功あり。須藤、反町、梶山と共に城下四人衆とよばれ元老なり。九藏町を開き、この町に九藏稻荷社今に存す。
 直政の長子、安中三万石の城主となり、更に父と共に近江佐和山に移り十八万石の父の家をつぎ金亀城を築く、完全せず弟直孝嗣ぎ九年完成す。
 高岡の人、酒井家次の供をして天王寺合戦に武勲を現わし感状を賜う。
 下野那須郡馬頭の宗香林寺三世住僧で煙草の創裁者として知られる。八幡村山名の光台寺に來住し煙草をつくる。これが下野よりも早く山名種を下野に移したとも伝えられる。光台寺煙草と稱し將軍に献上した。
 丹波守、酒井氏のとをつぎ高崎城主となり五万石、幼名虎千代、家康より偏諱を賜う。僅か一年にして信濃松本に移る。この年下小鳥の農民検見役人の残酷に怒りこれを殺したので農民の暴殺行われる。今首塚として残る。(明治三十四年建立)
 松山城主、上田友直の弟にして幼より学を好み天才なり。大信寺三世住職、後陽成院より春日の神号を賜わる。浄土の重鎮なり。この年入寂八十二、康長のとをつぎ高崎城主となる。伊豆守なり、のち丹波篠山に封ぜられて、元和七年八月卒す。対馬守なり。信吉のあと高崎城主となり五万六千五百石を領す。父は木工助基能、三方平原の役に戦死、初字彦十郎、五右衛門と稱す。大阪冬の陣に戦功あり、元和七年六月、六五才で歿す。崇仏尊神の念厚くまた城の改造をなし五公五民の制を定めたが民苛斂に苦しむ。
 高崎藩臣にして与左衛門の娘が嫁いで寛永十九年藤岡で関孝和を生んだ。
 下横町・向雲寺の開山なり。

一六一九	元和年間	興五 右門
〃	元和年間	守重 守次
一六二〇	元和 六	菅谷 喜兵衛
一六二一	元和 七	安藤 重長
〃	〃	〃
〃	元和年間	安藤 丹下
一六二三	元和 九	仁右 衛門
〃	〃	〃
〃	〃	唐沢所左衛門
〃	〃	〃
一六二四	寛永 一	小出政左衛門
〃	〃	亮円 法師
一六二五	〃 二	理山吟察和尚
一六二六	寛永年間	川合 賢寧
一六二七	〃 四	諸星庄兵衛
一六二八	〃 五	怒岳 和尚
一六三一	〃 八	内藤平左衛門
一六三三	〃 一〇	駿河大納言忠長

井野村名主なり。安藤重長にたえず村の代表となり、その動を起し斬首される。
又衛門と云う。その子孫安藤氏の時、本丸、二丸諸門を改作した時の鍛冶なり。
掃雲の祖、三河に生れこの年大河内金兵衛久綱に仕えた。
高崎城主、重信の子にして勝藏と称す。慶長十四年徳川秀忠に仕う。大阪夏の陣に出陣して武功をたて、年十六才にして敵の首級をあげる。七年父の家を継ぎ五万六千石、駿河大納言忠長を領けられ十二年寺社奉行となり明暦三年九月、五八で歿す。右京進なり高崎から備中松山に転ず。寛永九年に五、十日に田町に上州絹開市を許している。
大工なり。大八木の諏訪神社境内に石宮あり建設者としてその名刻まる。
安藤氏の長臣なり、主君より江木の地を受けて無縁堂を建立する。
安藤氏に仕えた百姓なり。唐沢年貢というあり、八軒町に住み町地の悪年貢を取めたのでその名あり大八木・妙音寺第一世にして開山なり。
南新波に柔剣道の道場を開き千余人の門弟あり、白扇をもつて二賊を倒したのでその名高し。柔道は置新流、剣術は橋天流なり。長野村秋葉神社に碑あり『寛延二年九月門弟一千余人造立し奉る』とある。
上小橋・大森院開山なり。
忠五郎と称し、のち利藤次と改め高崎藩大坂蔵屋敷詰を命ぜられた。儒学に深く書道にすぐれ俳句にも長じて、五九才で歿す。
徳川の代官にして豊岡郷を支配する。
並復・常仙寺の開山なり。
碓氷八幡宮に扁額を寄進し今に残る。
徳川二代將軍秀忠の次男で家光の弟なり。幼名国千代、兄と家督を争い宇都宮鈞天上の伝説あり。高崎城内に幽閉され、兄家光に憎まれて自刃、通町安寺に葬られ墓碑残る。駿河遠江五十五万石の大名なり。その遺品安国寺に存し、寛永十年十

一六三三	寛永一〇	敬 西
〃	〃	良普 法師
一六三四	〃 一一	河合又五郎
〃	〃	〃
一六四一	〃 一八	松平 信興
〃	〃	〃
一六四五	正保 二	柴田三左衛門
〃	〃	亮賢 僧正
一六五一	慶安 四	菅谷喜右衛門
〃	〃	慶安年間 愚門 和尚
一六五三	承応 二	利右衛門
〃	〃	〃
一六五五	明暦 一	五良 衛門
一六五六	〃 二	風月 円心
一六五七	〃 三	安藤 重治
〃	〃	〃
一六六一	寛文年間	茂木 米翁
一六六二	寛文 二	源栄 和尚
〃	〃	諸星惣左衛門

二月六日死を命ぜられた。
嘉多町・寛法寺開山なり。
新後閑・莊嚴寺開山なり。
伊賀の水月で名高い荒木又右衛門の相手で渡辺数馬に討たれた人、高崎城主安藤右京進重長の家臣河合平左衛門が又五郎の父なり。安藤侯の玄関で伊能五郎右衛門を斬つて退散し、更に池田侯の家臣となり渡辺源大夫を斬つて伊賀上野での仇討となつた問題の人なり。
高崎城主、本名治綱、字は三左衛門信綱の五子、寛永十八年將軍家綱に仕う。のち高崎城主となり美濃守と称す。貞享四年大阪城代となり永祿四年八月、六三才で歿す。藩の仕事として漆の栽培を奨励したことが明暦二年の『無銘書』にある。大河内輝貞の義父なり。
碓氷八幡郷の代官でこの地を治める。
八幡大聖護国寺住職、桂昌院の運命をうらない將軍綱吉に愛され、江戸護国寺を賜わる名僧なり。観音塚の仏像を江戸に移す。
高崎藩臣にしてのち治五右衛門と改めた。この年召され五十俵を賜わる。
新町の旧家、角田外記の男なり。主水と称し、のち永平寺三十六世となる。
大八木の人なり。大日孁を開墾する。父は源左衛門諱は公経、この年工を起し明暦元年に完成す。寛文三年七月歿す。
中尾・金打として知らる藤原正次のことなり。その作品原山・長純寺に残り、立派な鐘にして銘あり慈上寺風月の弟子、新町に清海寺を建立、虚無寺なり。風呂寺となす。
高崎城主となり六万石を領す。堤カ岡三ツ寺堤を一日千人の人力を使用して灌漑用溜池として完工、寛文四年本町、新町に市場を開いている。重博と称す。
大八木・名は知次、通称六郎兵衛、米翁は号なり、父は名主太郎兵衛にして米翁風流人なり。
中尾・観窓寺開山なり。
豊岡郷の代官にして若宮八幡社殿を再建する。

一六六二	寛文二	嶺雲 和尙
一六六三	〃三	菅谷段之助清
一六六七	〃七	宥 寛
一六七〇	〃一〇	落合 権三郎
一六七一	〃一一	江積市左衛門
一六七五	延宝三	平岡治郎右衛門
一六七七	〃五	亮 田 師
一六八〇	〃八	本間五郎左衛門 和田 正重
一六八五	貞享二	宮部 義辰
一六八六	〃三	住 光 長
一六八七	〃四	富岡 藤九郎
一六八八	元禄年間	東阜心越禪師
〃	〃	高 弁
〃	〃	お は る

山名・光台寺第十六世の住職、このとき改寫した過去帳あり。同寺は正慶元年(元弘二年)建立したものである。
 喜右衛門の子としてこの年生まる。初め高崎藩で五十石を領し累進し六百五十石をはむ家老となり享保十五年五月、六八才で歿す。
 正観寺・龍泉寺住職、元禄三年入寂、開基は沢慶法印。
 正純という。落合和泉の子孫なり。赤坂観音の御堂を建立する。権三郎の長子七兵衛正信、石燈籠を寄進す。
 乗附村名主、桜井十郎左衛門と共に寺尾村儘田喜右衛門、館谷佐藤伊兵衛、同惣右衛門と協力し清水寺再建する。
 下豊岡の領地を支配する、この頃この地方養蚕が盛んとなり籠敷五、六百枚も養うものさえあつた中尾・萬願寺開山なり。
 中豊岡の領地を支配する。
 幼名十郎右衛門のち随心と号す。霞新流柔道を早水長右衛門信正の流れをくみ研修し、のち小島の峰岸一家に伝う。この年歿す。
 高崎藩臣、この年家老となる。元禄六年歿す。宮部家の大祖なり。
 朝町の鐘樓の鐘銘の中にある人、寄進者ならん。諱は光重、この年十九才にして初めて信興に仕う宝曆六年八八才で歿す『上野名跡考』の著者富岡正美の曾祖父なり。
 少林山中興の開山なり。だるまの絵たくみにして明国よりの精化人なり。
 大八木・妙音寺中興開山なり。豊岡亮尊の弟子で融通寺七世住職なり。本堂、観音堂を建立、宝曆三年五月、七八で入寂。
 山名の人、水戸旧藩主黄門がこの頃元起(山田左膳)と共に越後国漫遊の帰途高崎宿に逗留中山名八幡に参詣した際、この後山森林中に危難を救われたと伝う。

一六八八	元禄年間	高 重
一六九〇	〃三	善右 衛門
〃	〃	藤右 衛門
〃	〃	八左 衛門
一六九一	元禄年間	樋口十郎左衛門
〃	〃四	明堂 芳珠
〃	〃	長 太 郎
一六九三	〃六	お 染
一六九四	〃七	八木 仁平
〃	〃	安藤 重長
〃	〃	菅谷 有清
一六九五	〃八	佐右 衛門
〃	〃	宮部 義尙
〃	〃	大河内 輝貞
一六九六	〃九	大谷三右衛門

高崎城下において新刀をつくる刀匠なり。
 倉賀野宿の間屋、長太郎、喜平次と共に玉村倉賀野間烏川江戸通船積荷に関し玉村宿の金七郎その他から訴えられている。
 右の事件に加わつてゐる倉賀野宿の名主。右に同じ。この船争いは同じような理由で相当長い間玉村宿と争つたが倉賀野はこの頃烏川利用の船業が盛んであつた。
 真庭念流の達人。山名八幡を信仰し祈願のおり社前で堀部安兵衛と会見武術の問答をなす。
 この年碓氷郡後閑長源寺より寺尾永福庵に移り再興し永福寺と改称。茶臼山下に伽藍を建築、徳川家光より三十二石五斗の朱印地を賜わる。
 喜太郎、庄兵衛、善右衛門等十人で倉賀野に船積問屋の許可をうく。なお船積問屋は慶長十一年頃より始まる。
 西鶴の心中もので有名になつた久松との情死者。この年木部に生れ今その墓碑あり、一恣貞巡信女という。
 下豊岡の領地を支配した人。
 この年安藤家を継ぐ、六万六千六百石となる。
 国次郎という。段之助元清の子にして宮部兵右衛門義尙の次女デンを妻とした。元文五年九月、四七で卒す。
 正観寺・名主、この時百姓六軒にして徳左衛門、茂兵衛等なり。
 義辰の子、兵右衛門と称す。この年番頭より昇進して家老となる、『高崎寿奈子』の中で詩をのせている。元禄十一年十二月の頼政神社遷宮祭には名代となり参拝している。
 右京大夫、この年高崎城主となり七万二千石、同七年越後村上城に封ぜられたが、享保二年二月再び高崎城主となる。父は即ち智恵伊豆なり。摩名湖を疏す計画をし田町の商店街を開く、名君といわる。のち老中、延享二年十二月歿し、八三才なり。『雑兵物語』を著わし、將軍に愛されて、春日為則の名あり。
 田町・この年より五年間問屋年寄をつとむ。享保

一六九八	元祿一一	村上庄左衛門
〃	〃	紀伊国屋 伊右衛門
〃	〃	照海 法印
一七〇一	〃	小森谷金助 萩原甚右衛門
〃	〃	鉄円 和尚
一七〇三	〃	折右衛門
〃	〃	平右衛門
〃	〃	庄兵衛
〃	〃	半兵衛
〃	〃	元右衛門 山本十左衛門
一七〇八	宝永五	和田自寸
一七〇九	〃	六宗 兵衛
一七一〇	〃	七間部 詮房
一七一二	正徳二	十郎左衛門

元年七月死去、その子孫宿の元老となる。源清勝、高崎藩奉行なり。この年二月頼政神社を再興した。

江戸本石町呉服商、上州絹に目をつけ運上によつて幕府財政を救い、かつ一儲けしようとして計画したので、桐生総代からの連絡でこの時高崎宿でも藤岡宿と協力しこの計画に反対している。

石上寺住職、この年十二月廿六日頼政神社を石上寺内に祀りその遷宮祭が行われ導師となる。

高崎藩に仕えた大工、頼政神社をつくる。

後屋と称し上州絹の間屋なり。木部の人にして『お染久松』のお染はこの人の娘ともいう。安楽寺に墓碑あり。

第七世永福寺住職、元和年間同寺火災にかかりこの年再建したという。

本町の人、頼政神社が初めて祭典を行つた際、俄踊を献じた。

赤坂の頼師なり。他に久右衛門、兵内等があり。高崎の荒物、つけ木屋なり。伊右衛門、又一郎あり。樺町のつけ木屋にしてこの町には他に与惣兵衛、安右衛門が、つけ木、塩を売つていた。

高崎の絵師、この頃半兵衛という石屋もいた。

高崎城を築城学上、又は軍略上から見て論述した『上州高崎城大意私之註解』を著わす。不幸にして刊行されない。元明年中松山源左衛門、文化四年に下河辺英通、文化九年に寛真方がこれに註をしてゐる。

通称は伝右衛門、本町の旧家三代目柴田六右衛門道林の三男なり。寛永十五年生まれ。安藤対馬守に仕えて百石、文才あり。この年七十一才で『鼻鬚猿』なる随筆を著わし正徳五年六月七八で歿す。九藏町・酒味噺等を製造する藤崎惣兵衛が祖なり。越前守なり、大河内のおとを受け高崎城主となり三万石を領す。享保二年転出、詮言はその子なり詮房極めて美貌にして家宣に愛せられ老中となる片岡郡石原の名主、桜井氏なり。この年領主間部越前守に乞ひ小祝神社を建立、別当は石昌寺四世亮珍代なり。寛文十一年清水寺も再建する。

一七二三	正徳三	長太郎
一七二五	〃	須川 太郎吉
〃	〃	志賀 随心
〃	〃	小森 閑齋
〃	〃	田代貞右衛門
〃	正徳年間	菅谷 元清
一七二六	享保一	騰 菅 茂木 筑翁
〃	〃	亮 珍
一七二七	〃	澄空 法師
一七二八	〃	紙屋半左衛門
〃	〃	飯沼久右衛門 菅谷 清乗
一七二二	〃	六 片岡 彦七

善右衛門、九郎兵衛と共に倉賀野宿間屋伝馬の仕事をす。同宿八左衛門は年寄役なり。

佐野の人、佐野の舟橋悲恋の記録をもつてこれが宣揚につとめた。(正徳三年馬場重久著養蚕育自鑑中に高崎田町の市場は絹生糸の市場であると記してあり。)

この年三月朔日生島園軒宅に園軒八十才の賀を祝つて集つた人で、この年百六十七才の長老であつた志賀と同じ、この年百三十七才である。

松平右京大夫輝貞の家臣、同家に將軍綱吉が来遊した時の給仕人、通称定右衛門、諱は忠金、藤原氏で百石を領す。この年願により役を免ぜられ享保七年歿す『陪従私記』八巻を著わす。

喜右衛門の子として寛文三年生まれ段之助と称す。五十石を食み果進六百五十石となり高崎藩家老となる。掃雲が祖にして享保十五年五月六八で歿す石昌寺四世住職、この年間郡越前守(城主)に乞ひ小祝神社社殿の營造に着手享保二年落成する今の本社なり。

通町・第十一世安国寺住職にして本堂を造営した大八木・祖先是箕輪落城後ここに土着した米翁の三男にしてこの年生まる。諱は知亮、幼名千次郎百姓なるも神学を修め神祇管領下部兼雄門人と称し算学、医学を学んだ、高崎の永山義長の門人なり北新波・満勝寺二十五世住職、大黒天の中に米麦大豆小豆粟の五穀を封じ込んで残した、昭和三十三年秋に発見される。

上州高崎に飛脚屋を開く。本町の最初にして享保十四年には島屋佐七が伊勢崎を開く。一説に平左衛門ともいう。

八幡少林山・黄檗宗達磨寺の開基といわる。掃雲の父にしてこの年に生まる。通称は次兵衛、牧牛と号し、家老にして六百五十石をばむ、書家として知られ性剛直にして主君の感氣にふれる。京都三井の絹買入人にしてこの年六月十五日佐々木平五郎と共に初めて高崎宿、藤岡宿に來り絹を大量に買入れた。それから毎年三、四人が下つて買上げている。

一七二五	享保年間	飯塚善左衛門
〃	一〇	弥平次
一七二七	一二	市兵衛
〃	〃	近藤直指
一七二九	一四	野上寅亮
一七三〇	一五	落合武平
一七三二	一七	宮部義正
〃	〃	矢野拙齋
〃	〃	僧儀貞
一七三六	元文年間	日野法師
一七三八	元文三	坂上嘉太夫
一七四一	寛保一	宮部喜右衛門
〃	〃	寛保年間 白井烏醉

高崎城主輝高に仕えお勝手向御用を司り、豊岡郷開発につとむ。
 通町・この年十一月十八日この家より出火、六カ町焼失し新町諏訪神社のみ残る。
 田町一丁目商人、この年二月晦日この家から出火し風下全部を焼失した。
 諱は重寛、通称新二郎、高崎藩臣、吉田正唯の第二子にしてこの年生まる、長じて重守の養嗣となる。林仕雄に兵学槍術を学び藩の少壮に教ゆ。
 道堅の子、この年二十七才で若死す。本姓は藤原、諱は隆綱、字は清大夫、学者として知らる。
 正吉という。落合和泉五代の孫で赤坂観音の由来を書き残す。
 通称喜右衛門、忠八郎、孫八、雅名三彌、享保十四年生まれ高崎藩大夫にして歌学を冷泉為村に学び、幕府の和歌所に仕り、その名京都に知らる。
 義尚の孫なり、寛政四年一月歿す。六四『三藻誌、千首和歌』等の著あり、時の將軍の節範となる。妙義白雲山歌碑今に残る。
 伊勢の人、河越侯に仕えたが、その女婿高崎侯に経を授けたのが縁で高崎藩臣となり四百石をはむ。諱は義道、通称理平、綱吉の侍講となり輝貞の儒官なり、この年歿す。
 菊地に生まる、権僧正となり護国寺の住職たり。享保十七年三月廿一日生まれ、享和二年三月十一日七十一才で歿す。
 劍崎の桃の改良に努力し新種の天津種を植え、産業につとめた。
 諱は重矩、雅揚軒と号す。高崎藩士、短刀術にたくみにして、この年歿し、墓は正法寺なり。高五十石、坂上烏涯の父にして本姓は井上氏。
 諱は義休又は淳義と称し更に義淳と改む。通称主馬藏、高崎藩臣、この年父兵右衛門義尚のあとをつぎ二百石をはむ、のち五百石の大夫となる。義旭の祖父、歌道に通じ『快岸集』あり。
 俳人、豊岡にいて門人多数あり。元禄十四年上総国に生まれ晩年ここに来た『松露庵隨筆』その他あり、豊岡に句碑残り明和六年四月江戸で六九才

一七四一	寛保年間	松露庵烏明
〃	〃	生方雨什
〃	〃	羽鳥佐翠女
一七四五	延享二	長兵衛
一七四六	延享年間	長谷川小右衛門
〃	〃	山岡文右衛門
一七四七	延享四	最辰
〃	〃	大河内輝規
〃	〃	寛菅
〃	〃	野上道堅
一七四八	寛延一	菅谷清章
〃	〃	伊奈半左衛門
一七四九	二	大河内輝高
〃	〃	川野刃形右衛門

で歿す。豊岡に涅槃塚、白郷井隻林寺に烏醉塚あり、白井喜右衛門が通称で代官の子なり。
 下野の生まれで蚕種屋にして本町に住む、烏醉の門人なり。毛真平に庵雨什と月一入
 平花庵なり使屋宇兵衛という商人、俳句をよくす烏醉の門人。二八頁佐翠女と同一人
 新町に江戸三度飛脚問屋仲間島屋佐衛門の取次店を開いた、伴佐七これをつく。
 高崎藩臣にして則正と称し、輝規侯の側室で長光院長谷川氏は妹なり。長光院夫人の子が即ち輝高なり。
 高崎藩近習、二百石五人扶持を食み『土の心得物語』を天休院輝貞の命で写本している。
 碓氷八幡宮別当なり。この年から宝暦三年まで六カ年、上野、武藏、下野を神社創営のため行脚募金につとめる。
 延享二年封を襲ぎ高崎城主となる。右京大夫撰津守なり。初め仲、又大学と称し、同族伊勢守信定の二子、天和二年六月生まる、大阪城代、更に老中にすすみ宝暦六年二月、七五才で卒す。
 高崎砂子にある『無常之鐘』と称された洪鐘を無縁堂のため奉納、鐘は法輪寺に保存されたが今はない。
 字は清四郎、二十八扶持の高崎藩士、この年十月十一日八十三才で歿し、学者として知らる。
 岩鼻陣屋を支配した。
 高崎藩士、家老加判月番に栄進、元清の孫にして通称団之助、安永六年四月隠居している。この年八月野火止平林寺の輝貞の碑前に石燈籠を献する右京大夫佐渡守なり。この年封をつく八万二千石始め長十郎、享保十年八月生まれ、宝暦二年四月七日大阪城代となり四位に叙し更に京都所司代となり侍従に任ず。また老中となり天明元年九月二十五日五十七で卒す。高崎城内に遊芸館を創立、文武向上につとめたが天明元年には生糸や絹、織物にまで取引税を課したので運上騒動が起き街に落首がはられた。
 武州荒川の産、天和二年高崎藩に仕え、諱は重内

一七五一	宝暦年間	海	鷺	この年八月十日歿し、大雲寺に葬る『高崎志』の川野辺寛の父なり。
一七五四	宝暦 四	京屋 弥兵衛		佐野・定家神社境内に芭蕉塚をつくる。本名塚原六右衛門、下総結城の蚕種問屋で高崎に住み、梧竹庵一世と称した。白井烏酔に俳句を学ぶ。城下に飛脚問屋を出したが田町の江戸京屋の出店なり。京屋は三、八の日、島屋は四、九の日飛脚が立つた。
〃	〃	菅谷 掃雲		名は清成、字は伯美、通称喜兵衛にしてこの年生まる。高崎藩臣にして五百石を食み、文武に長じ性剛直、特に書に秀で有名なり。君侯の額を批判し興にふれ禄を奪わる。文政六年八月六七で歿す。
〃	〃	菅谷 鏡印		大染寺第二世、この年十二月入寂す。
〃	〃	菅谷 吉		掃雲の妻なり、深井幾右衛門の女にして貞操の誉高し。
一七五五	〃	五 亮	覚	碓氷八幡宮の別当。この年社殿の建設をはじめ同七年に竣工したがこれ現在の神社なり。棟札によると大工棟梁は和田山村の松本主水栄貞である。
〃	〃	宮部 義旭		高崎藩臣、大阪の藩邸に生まれ父は義方、主馬藏ともい、義正とは伯父甥の仲なり。通称は亥朔のち亥作主馬藏となる。諱は義栄、字は子且鶴夢又は小桃源主人と号す、文化人なり。歌人として將軍にも仕え龍駒鳳雛ともいふ。
〃	〃	西田 美英		梨蔭庵風子と号せし俳人なり。この年『高崎寿奈子』を出版し、当時八十に近い大家なり。高崎史としては最も古い。
〃	〃	持田十郎兵衛		本町の人、町田延陵の手摸した『世尊寺法帳』十巻を板刻している。
〃	〃	松本主水栄貞		和田山村大工棟梁なり。碓氷八幡の八幡宮の政梁をこの年請負う。
〃	〃	新井源助幸房		八幡郷の大工棟梁なり。松本と共に八幡宮政梁に協力する。
〃	〃	飯野善治郎		佳久という豊岡の人。八幡宮政梁に協力し地形礎石その地を寄進する。
一七五六	〃	富岡 藤九郎		諱は光重、宝暦十六年四月八十八で歿し赤坂町恵徳寺に葬る。『上野名跡考』の著者富岡正美の曾祖父なり。
一七五八	〃	八 小	夜	高崎の人、呼雪の妻である。一紅と共に涼岱門、

一七五八	宝暦 八	前谷 復軒		一紅女が雪路舎中で吟じた筈句四十章に、紫苑女が画いた戯画十余図を加え『あやにしき』一冊としてこの年上梓している。寛政頃歿す。
一七五九	〃	九 小林伊左衛門		城主が城内に遊芸館という文武の学館を起したので師範となる。名時敏、字淳治、伊勢の人、宝暦十一年四二才で歿す。京都で久米順利の門に字ひこの年高崎藩に仕える。
一七六〇	〃	一〇 長坂 円陵		多野新町駅の人、岩鼻との間烏川に舟も橋梁もないので、官許を得てこの年定船渡(今の柳瀬橋)を設け運賃を定め旅人の便をはかる。遊女屋を営み山県大式がここに滞在している。
〃	〃	〃		高崎藩臣にして武道に秀で名あり二四才で歿す。大内能耳の門人にして狙来の学を受く、名は黒脇字は蒼人、通称平介『回陵子』二巻の著あり、十才の時江戸屋敷で狐狸を退治す。
〃	〃	〃		高崎の人、木村氏、名はみね、綾園と号し、涼岱門の女流俳家、吸露庵春興にその句見ゆ、文化頃歿す。
〃	〃	〃		藤岡宿の人、この年本庄宿の間屋年寄内田伊左衛門等が上州絹を改良する名目で第二の運上を計画し製産者から税類似のものを取りあげようとしたのに高崎宿や藤岡、吉井宿と協力して反対した。その時の代表者である。
〃	〃	〃		高崎の人、涼岱門、吸露庵春興にその句見ゆ、天明頃歿す。女流俳家なり。
〃	〃	〃		俳人なり、高崎に住む。この頃高崎の定家神社境内に句碑を残し十二年頃青海に引きあぐ。鳥酔門下にして松露庵三世をついだ。
〃	〃	〃		鳥酔門下にして松露庵二世をつぎ俳人として知られる。
〃	〃	〃		上大類の人、手塚に庚申供養塔をたてた。
〃	〃	〃		上大類・安楽寺に鐘を献納した。
一七六二	宝暦年間	長井 安藏		高崎本町禰商人にしてこの年二月十三日の仲間議定書にその名が出ている。
〃	〃	長井四郎石衛門		正観寺・孫八に同じで禰商人なり。
〃	〃	孫 八		新町の商人、この家よりこの年正月晦日出火し二一七戸を全焼せしめ弥兵衛火事という。
一七六三	〃	一三 弥兵衛		高崎の人、涼岱門、この年の吸露庵春興にその句

一七六三	宝曆一三	佐 琴 女	見ゆ、天明頃歿す。 上州の人、羽鳥氏、涼俗門の俳女、吸露庵春興中にその句あり、一紅に關係ある人ならん。宝曆中歿す。
〃	宝曆年間	金井 金陵	名は正字、白翁とも称す。豊岡若宮八幡宮神主、『山吹日記』に現われ、詩人金正風の父として寛政六年八月八一で歿す。
〃	宝曆一三	永山 義長	諱は見性、武州の産、算学の大家として知られ高崎に住み門人多く、この年十二月歿す。高崎の門人高橋和全、清水解林、儘田勝美等により安中の大泉寺に葬る。
〃	〃	弾 兵 衛	新町の町人、この年一月三十日この家から出火し二一七戸を焼失する。
一七六四	〃 一四	長谷川 道阿	諱は吉次、通称小十郎、のち故あつて野火止へ移され、平林寺に入り剃髪して道阿と改む。同寺十三世要峰師の徒として首席にのぼる。長谷川小右衛門の子にて歌人なり。
〃	〃	弥 一	山名の山下に住む百姓。この家に山上碑ありて崖崩れにより山上碑を発見したものの街吏なり。山名の百姓、この屋敷内に山上碑ありてこの家衰え族絶ゆ、村人碑を汚したためという。
一七六五	宝曆年間	田 忠	九藏町の人、馬庭念流の道場に入門、門人として登録されている。
〃	〃	安達 伊八郎	右と同じ。
一七六六	明和 三	鈴木 民平	高崎藩士にして右に同じ。
〃	〃	今井次郎吉	石原の人、右に同じ。
〃	〃	松本 忠次郎	右に同じ。
〃	〃	石井 弥八郎	下並榎の人、医師にして赤城の父なり。諱は為豊字は俊達、舞台とも号し、五兵衛の子にして享保十五年生まる。西谷養後に医学を烏涯に儒学、高橋惣介に剣を学ぶ『心学伝』の著あり。
〃	〃	清水 謙山	井野・名主、享保七年五月十二日生まれ、年貢米取立にたえぬと高崎藩主に訴え騒動を起しこの年捕えられ十一月九日斬罪さる。
一七六七	明和 四	関口与右衛門	松本彦兵衛の戯名なり。一行亭と号し高崎の人、寛政九年に歿す。江戸に出て狂歌師となり名あり、奇々羅金鶏と同時代の人なり。
〃	〃	籠 近道	大築寺六世、矢島村の人、反町氏なり。この年浜
一七六八	明和 五	本光 大律師	

一七六九	明和 六	羽鳥 麦舟	尻のこの寺の住職となり、愛染堂建立、文化元年八月六八で入寂。
〃	〃	笠原 有膳	田町の絹太織問屋、俳人一紅の父にして俳句をよくしこの年歿す。羽鳥屋勘右衛門と称した。
一七七〇	〃	七長坂 忠寛	大工、小八木の築宮神社の再建をなす。明和四年に火災で焼失したものなり。
〃	〃	清井 正倫	この年五月二十六日恒例の頼政神社奉納歌会に藩主輝高等と十人で歌会を開く。
〃	〃	井上 武之	同 右
〃	〃	い つ 女	同 右
〃	〃	萬 女	菅谷義旭の母にして一女ともいう、歌人なり。恒例の頼政神社歌会に出る。
〃	〃	大沢 知恒	高崎藩、大夫宮部義正の妻、冷泉為村郷の歌学を受け『萬女詠草』歌集あり。他に『木草物語』四冊をつくり、天明八年六月五〇で歿す。関東の紫式部と称され一家三人歌人なり。
〃	〃	洞 井	大沢市左衛門六代の孫、字は公固、千秋庵と号し市左衛門という。この年父に代つて五保長となる笙笛太鼓を学び和歌に長ず、冷泉為康卿の門下である。田町の人なり延享三年生まる。
一七七二	明和年間	分 江	建部綾足が高崎で交友のあつた雅人。建部綾足が高崎で麦舟等と共に交つた人で、俳句をよくす。
〃	〃	美 昭	同右『上野日記』に出て来る人々。
〃	〃	安永年間	赤坂の住人、同町に放火して数百戸を焼失したので、烏川原で火灸の刑に処せらる。
一七七三	安永 二	権 八	豊岡の人、字は孟利、通称内藏之助碧翁とも号す、若宮八幡の神司金井正宇の男で夫人鈴氏は三十六才で歿したが共に文人として名あり。
〃	〃	浅井 勝之丞	貞喜、高崎藩家老にして享保八年十二月江戸に生まれ溫柔謹慎の晩年を送つた。
〃	〃	茂木 金四郎	知英、大八木、筑翁の家兄なり。高崎藩主輝貞に仕え、大目方の門人となり剣を学ぶ、儒、詩、歌医の諸学を修む。また大宮の大宮司角井氏に神学を学ぶ。
一七七四	安永 三	察 栄	この年三月五日歿す。善念寺住職、十五才より善念寺十世観誓上人より得度のお祐天僧正の法を受く、堂宇を修し鐘樓を建立、博学多識なり。

一七七五	安永 四	大河内 輝和	從四位下四品右京大夫、始め長三郎、寛延三年三月生まれこの年十二月十六日從五位下美濃守と称し高崎城主となる。更に寺社奉行加役、寛政十年十月大阪城代となりよく十一年八月大阪で卒す。五十一才。
〃	安永年間	大石 久敬	初め堤安右衛門と称し輝和の時、馬廻役郡方知行百石を食む、名権十郎なり。農政の大家にして『地方凡例録』を著わす、姓は藤原、巖華と号し、久留米藩有馬侯に仕えたことがある。
〃	安永 四	深井 景温	高崎藩臣景武の子、兄景当は番頭なり。宝暦元年高崎に生まる、字は子玉、学問に精進しこの年近習に進み能耳の門に入るも詩文を好み『采風集』にその作のる、安永六年十月二十七で歿す。
〃	〃	椿 山	本名福田平左衛門、連雀町の旧家本陣に生まれ、字は方忠、後に忠、椿山と号す。豊岡の烏酔句碑は椿山の揮毫なり。天明七年歿す。
一七七六	安永 五	深井 量平	高崎藩臣にして歌を好み、この年十二月卒す。落合の人、この年十月十日百番供養として清水寺に半鐘を納めた。
〃	〃	三輪太左衛門	輝和に召されて医並儒臣となり、掃雲とも交わりが深く砂賀町に住む、名は豹、字は伯皮、烏水敬人、因裁、日田とも号した、天明四年天然痘流行しその子を失う。
一七七七	安永年間	吉田 周斎	八幡の大門前の板鼻田圃中に寒熱橋の橋供養碑に揮毫、二十四才の時なり。市川寛齋の子である、名三亥、字孔陽また金洞山人と号し、書家なり。
一七八〇	〃	米 庵	高崎藩儒臣『高崎志』『宮里藏時記』等を著わす学者なり、字は子緝、博学多識故事に通ず、寛政元年『高崎志』を刊行する。
〃	安永 九	川野辺 寛	高崎藩臣、蓬萊山人として知らる。大の鈍とも号し、吉原・深川・品川三遊里の状態をよくかき『遊婦里会談』その他の著多く洒落本極めて多し。一時藩公より戯作を禁上されたことがある。
〃	〃	河野 掃橋	江戸の人、この年京都から中仙道をへて高崎に来て初めて書店を発見して驚く。享和二年に出した記行文にも……豊岡を過ぎ右に大日堂あり(中略)見ゆる城は高崎なるべし高崎の駅舎にぎわしく江戸にかえりし心地ぞする……とある。
〃	天明年間	蜀 山人	

一七八一	天明 一	庄左 衛門	大八木の人、井野川がはんらんしたり助郷の役が大儀となつたので以後勤弁してほしいと村方を代表し高崎藩主へ陳情している。
〃	〃	吉 重 郎	町屋の人、糸絹運上騒動が高崎藩関係の緑野郡金井、新町宿等より起り、運上に賛成した連判状が吉重郎の家から発見されたが、この暴徒に襲撃されたものである。
〃	〃	大黒屋九兵衛	高崎宿の新町、絹運上事件で高崎に二千人の暴徒おしよせこの家を破る。絹運上事件は絹一疋につき廿四文の口銭を増すことに反対した運動である。この年第三回目的絹運上事件が起りこれが騒動と化して暴徒はこれに加担賛成者の家を打ちこわした。その時の被害者、この騒動は藤岡から始まり八月十三日高崎宿へ押寄せたが、高崎藩が鉄砲を放つてふせぎ、暴徒は観音山へのがれた。
〃	〃	佐藤 忠 藏	大八木・俳名を柳下亭祭舟、地方大家、鍛冶職にして三日月薬輪の門人なり。諏訪神社にその額残る。
〃	〃	原田宇左衛門	高崎藩町奉行なり。この年絹運上の不当を鳴らす上武の農民が高崎城下に押寄せたので弾丸硝薬でこれを追い払う。諱は種徳、字は子邁。
〃	〃	利 七	柴崎村無宿三十才、糸絹運上騒動に参加し首謀者として捕えられ処刑を受ける。
〃	天明年間	与惣 兵衛	田町の人、酢屋、姓は瀬下、名は房昌、箕輪城以来の旧家の主人である。
〃	〃	持田 好古	高崎の人、福田平左衛門の弟子、江戸に出て森尹祥の門に入る、本町の人、通称は十郎兵衛、五十二才で歿す。
〃	〃	柴田 繁脩	本町の人、通称菊屋彦太郎、家伝の目薬をもつて知らる。武州葛和田の根岸氏より入り本名市右衛門、家付の妻民女に死なれ酒を好み客を好む。歌に巧みにして幽泉齋と号し『世渡り草』を出す。寛政二年十月死す。
〃	〃	小泉六郎右衛門	四ッ屋町の人、諱は弥典、名は隆、字は仲之、愛古と号す。書道に志深く米庵の墓碑を揮毫す。
一七八二	天明 二	西谷 養俊	高崎藩医、正徳四年に生まる。諱は広承、広生館とも号した。父祖二代医をもつて藩に任せ、俳号疎節とよぶ。松露庵烏明の門下でこの年八月六九で死す、太田氏である。

一七八三	天明三	新右衛門 又左衛門	倉賀野宿の間屋なり。 南大類の人、浅間山降砂の為伝馬の賃金値上げの ことを道中奉行に、十五カ村総代として提出する。 高崎の人『浅間焼の言伝』なる一篇を著わす。一 紅『文月浅間の記』とやや類似の点あり問題とな り、その一篇小島弥平家に残る。この時の高崎に 降砂は御城下で一坪につき砂五斗五升五合あつた 高崎藩、江戸詰年寄、諱は景逸。 高賢、高崎藩上席家老であつたがこの年十一月六 日隠居する。 貞英、高崎藩の家老なり。 深井次郎左衛門、長坂又左衛門等と共に高崎の家 老なり。 浜川の人、高砂町を開く。 弟半右衛門と共に大河原に協力して高砂町を開く。 唯助、印南と号す。諱は純則、はじめ姫路侯に仕 えて大夫に列す。出でて青木氏を継ぎ其女と配す。 この年十一月高崎藩臣となり五口を食み、昌平志 を始め十余の著あり。文化十年十月六日歿す。 下佐野・光雲寺住職にして烏川と号し書師なり。 この年入寂す。
一七八五	五	大河原門左衛門 秘井三右衛門 大塚退翁	倉賀野宿問屋年寄、喜太郎と共に中仙道柳瀬川定 渡船の請負人問屋年寄の総代である。 岩鼻観音寺十四代の住職、この年十月一日鐘を献 納す。 重守、高崎藩、武道の達人、この年二月二十七日 八十九で歿し、大雲寺に葬る。 『上野名跡考』の著者正忠、高崎藩士富岡秀高八 世の孫なり。秀高は足利城主長尾頭長に従つて天 正元年功あり金山城による。 本町の旧家港屋の息、定家神社の芭蕉句碑建設を なす。父は本木政右衛門、句は海鷲に学ぶ。この 年八月早世す。 下佐野・大用山光雲寺十四世、武藏国に生まる、 井上氏、字天倫、同寺二十年一日の如く道俗を開 誘する。有名な書師、この年七七で入寂。 苗雄という、上並履の人、曆字の大家石田玄圭の門 弟で石田と共に碓氷八幡宮に算法の額を奉納する
一七八六	六	藤右衛門 明禪師	近藤伊兵衛 良真 富岡政義 天明年間 天明六
一七八七	七	烏川道人 矢島与七	天明七

倉賀野宿の間屋なり。
南大類の人、浅間山降砂の為伝馬の賃金値上げの
ことを道中奉行に、十五カ村総代として提出する。
高崎の人『浅間焼の言伝』なる一篇を著わす。一
紅『文月浅間の記』とやや類似の点あり問題とな
り、その一篇小島弥平家に残る。この時の高崎に
降砂は御城下で一坪につき砂五斗五升五合あつた
高崎藩、江戸詰年寄、諱は景逸。
高賢、高崎藩上席家老であつたがこの年十一月六
日隠居する。
貞英、高崎藩の家老なり。
深井次郎左衛門、長坂又左衛門等と共に高崎の家
老なり。
浜川の人、高砂町を開く。
弟半右衛門と共に大河原に協力して高砂町を開く。
唯助、印南と号す。諱は純則、はじめ姫路侯に仕
えて大夫に列す。出でて青木氏を継ぎ其女と配す。
この年十一月高崎藩臣となり五口を食み、昌平志
を始め十余の著あり。文化十年十月六日歿す。
下佐野・光雲寺住職にして烏川と号し書師なり。
この年入寂す。

一七八七	天明七	速水桂氏 福田平左衛門	天明七
一七八八	八	吉沢恭周 吉右衛門	天明八
一七八九	寛政年間	角田八左衛門	天明八
一七九一	三	山口太郎平	天明八
一七九二	四	大河内輝延	天明八
一七九三	五	須賀長太郎	天明八

速水桂氏
福田平左衛門
吉沢恭周
吉右衛門
角田八左衛門
山口太郎平
大河内輝延
須賀長太郎

寛政一
寛政年間
寛政年間
寛政年間
寛政年間
寛政年間

川野辺昌藏
市川鶴鳴
西谷宗寂
大河内輝延
須賀長太郎

茂平次茂矩、矢島に同じ。
連雀町の本陣、文人にして桐井と号し榛山田忠と
称し俳句にたくみなり。この年十二月歿す。羽鳥
麦舟等と交わり、書もまた巧なり。
武藏の人、算術の大家にして小野榮重と親交あり
共同してこの年碓氷八幡宮に算額を奉納している
浜尻の名主、この頃他村に嫁入する場合名主送りの
証文を出すそれが残れり。
高崎宿の間屋なり。祖先は儀右衛門、飯塚常仙の
跡をつぐ。
片岡の人、常盤町の萩野七郎次等と協力し清水寺
拝殿を再築する。
長谷川氏、通称小太郎、諱は吉次、歌人にして宮
部義正の門下、罪を得て野火止に追われ平林寺で
剃髪した。儒雲が野火止に配処の月を眺めたのも
この頃である。
川野辺寛の子、佐四郎とも称す。俳諧をよくし青
齋と号したが長生せず墓は大雲寺にあり、父寛の
碑をたてる。碑銘は鶴鳴撰文、書は門人吉野吉利
である。
高崎藩医官、亦辭と号し俳句和歌に長ず。鳥醉と
も交友あり海鳥に学ぶ、養俊の嗣子にして徳道と
稱す。この年四月歿す。
右京大夫美濃守、この年任官し高崎城主となり八
万二千石、初名は仲、輝相の弟なり。安永乙未年
十二月生まる。享和二年寺社奉行加役となり同十
二年四月大阪城代となる。更に文政六年十二月侍
従となり同八年正月年五十一才で歿す。
名は匡、字は子人、通称多門、高崎藩士市川正芳
の子なり。十才にして能く書をよむ、大内能耳に
師事、本居宣長に反対し『麻我之比礼』を出版す。
のち藩に召され百五十石を食み、寛政七年七月五六で歿す。
義正の妻にして歌をよくし三歳日記にその名あり
その子義直と共に親子三人で歌をよんだ。
倉賀野の人、この年四月、高崎宿連雀町に伊勢殿
を建立したがこれは倉賀野新堤開発の工なり。そ
の世話人小林藤右衛門、春山大太郎の名あり共に
倉賀野の人。

一七九三	寛政 五	江積源八	柳川町に学習会を起し多数の子弟を教ゆ。百五十名収容、天保九年廃止。
〃	〃	吉川榮左衛門	岩鼻陣屋初代にして酒井氏が治めていた。墓地この地観音寺にあり。同所赤城神社に宇迦之御魂命を祭り桑葉の神とした。
〃	〃	近藤和四郎	吉川等と共に初代岩鼻代官として着任陣屋につとめのち転出す。
〃	〃	吉川永左衛門 三九郎の三子 月一人	二代目代官にして初代榮左衛門の養子なり。好学の士、大田蜀山とも親交あり狂歌を好む。細田榮之の門に入り美人画もかいた風流人。
〃	〃	深井 藤助	高崎藩執政、景美、この年歿す。深井市左衛門の二男、歌人、慈照院を室とし藤兵衛景平を生む。景平もまた歌人である。
〃	〃	嶺 春 泰	高崎の生んだ蘭学の大先輩、この年十月六日江戸で歿す。『西医斐生所撰五診法』がある。
〃	〃	慈 照 尼	深井景政の妻、夫子なきのち甥の二代目深井次郎左衛門資俊の世話になり歌に親しみ詠草七、八十冊に及ぶ。並履護国寺の八景絵巻中に『片岡の秋月』をよんでいる。
一七九四	寛政 六	金井 金陵	名は正、金陵はその号なり、別に白翁と号す。豊岡若宮八幡の神主、多胡碑を拓本にして世に紹介した最初の人なり。この年八月十四日八一で歿す。歌をよくす。
〃	〃	京屋 孫兵衛	江戸室町二丁目の飛脚屋、この頃高崎の得意先へくばった差立日は五、十日であった。
〃	〃	宮部 義直	高崎藩臣、通称孫八、年三十にして天明八年年寄に昇進す。従兄は掃雲清成なり。この年三六才の若さで四月三日歿す。宮部義正の子、安永二年十五才にして父に従い上洛、宗匠家澄覚入道の歌道の弟子となる。年十才で深川の三十三間堂に千本の通し矢を射った。
一七九五	七	羽鳥 一 紅	田町羽鳥麦仙の妻、俳句・和歌・茶道・華道に通じ浅間山噴火記『文月漫聞記』を著わす。この年八月二十三日七二才で歿す。延養寺に葬る。『孝子小伝』の著もある。下仁田町石井某の女にして幼にして文学を好み、その文才を早くから認められる。養父は即ち麦舟なり、加賀の千代女とも親交あり。

一七九五	寛政 七	中庸 精義	市川匡、高崎藩臣にして儒者なり。大内能耳、山本北山に学び学者として名あり。この年七月歿す
〃	〃	良 真	岩鼻観音寺住職、歌をよくし広く歌人と交友あり
〃	〃	井 輪	倉賀野宿の人、松露庵系の俳人で里乙、知二等と共に知られる。
一七九八	一〇	忠 兵 衛	本町の人、この家よりこの年正月二十四日出火し藩土邸三八〇戸、町家一〇八〇戸を焼く。忠兵衛が放火したもので山田長左衛門に召捕われ江戸で火灸の刑にさる。
一七九九	一一	市川 達齋	鶴鳴が男、安永七年生まる。幼名楳太郎、一角、一学とも称す。名は延、字は孟瑤、長沼流の兵学、弓馬刀槍皆学ぶ。文政中銚子の砲台を築く。この年藩公と共に大阪城に赴任す。松前城の軍師となり城の縄張をなす。この年二月八十一才で歿す。孫熊雄は国学家にして高崎にもいた。
〃	〃	沼田 順義	中尾の生まれ、国学者としてその名あり。
〃	〃	島田 善右衛	日本三富限と称された人でこの人の経営する御懸屋(今の銀行の如し)高崎宿に本店を出す。他に山本宗兵衛、吉田孫八等同様の店この頃七軒あり
〃	〃	吉田 荘 八	田町、高崎藩の御用達なり。荘八の他に中島伊平中島仙助等も同様なり。甘楽郡南蛇井に生まれ元紺屋町麴屋に奉公のち、田町二丁目に油、ろうそく屋を営む和泉屋なり。弘化四年十一月十日七十六才で歿す。
〃	〃	飯島 藤平	元紺屋町、高崎藩の御用達なり。岡本大右衛門、小川太平、藤巻喜平等も同様なり。
〃	〃	関根作左衛門	連雀町、高崎藩の御用達にして高崎宿の元老なり。市長関根作三郎の祖父なり。
〃	〃	深井 景福	字は君祺、高崎藩士にして詩人なり。
〃	〃	高橋 宗助	大八木、霞新流の柔術、一刀流の剣法を指導した。知誓と号し本姓は天利。この年歿す。
一八〇〇	寛政一二	清水 赤城	名は煥、字は章郷、通称俊藏、明和三年並覆に生まる。文武に秀で特に砲術の大家にして新らしき砲術を案出、門人極めて多し。『火砲要録』八巻を出し国防を説く。嘉永元年八三才で歿す。勤王を説き兵学者として知られたが、終生浪人して儒学者として甘んじた。
〃	〃	享和 一	高崎住、刀劍師。その弟子に刀匠震麟子克一がある
〃	〃	享和年間	手柄山 正繁

一八〇二	享和 二	大河内 輝健	撰津守にして輝延の子なり。
〃	〃	大河内 輝茂	美濃守にして輝延の子なり。
〃	〃	大河内 輝実	豊前守にして輝延の子なり。大河内家をついだ輝承は末子なり。
〃	享和年間	井上 武之	鳥涯はその号なり、坂上氏ともいう、字は文若、又柳喬主人と号す。高崎藩臣清水謙山の師なり。重矩の長男にして野上道堅の門に入り儒学を修めた。旅屋なり。伊能の測量の時御用人がこの宿へとまつた事が『高崎名集』に出ている。
〃	〃	金升屋 庄三郎	伊能忠敬が高崎に来てこの家に宿泊し測量をしているが、田町の旅人宿なり。また伊能の測量に手伝う、十月十八日なり。
〃	〃	大黒屋 九郎兵衛	測量家にして日本地図をつくる。この年高崎宿にとまり、上州各地の測量をする。
一八〇三	〃 三	坂本 亮春	江戸の石工なり、この年倉賀野宿の飯盛女積金二百兩余りで中山道のこの宿に太鼓橋をつくる。三年八月落成せり。倉賀野の飯盛女は寛保二年に一戸二人づつ置くことを許されたのがはじまり。
〃	〃	伊能 忠敬	棟高の人、丹治と称し石田玄圭の門人。この年四月清水観世音に算額を奉納する。
〃	〃	左右 衛門	この年原市町より分家し寄合町に福田屋の看板をかける。これが伊兵衛商店の祖となる。即ち福高の養父なり。生糸・生絹・足袋を商う。
一八〇四	〃 一	中島 伊兵衛	田町の人、世尊寺流の書家なり。並護護国寺にある並覆八景絵巻の作者にしてこの年歿す。
〃	〃	瀬下 与惣兵衛	下日高の百姓なり。勇吉、反町藤之丞と共に同村諏訪神社へ石の大黒天を奉納し今に残る。
〃	〃	轟 文五郎	正秀の門人にして刀剣師なり。
〃	〃	正 一美	高崎藩の御用鍛冶にして雲騎子克一と称す。刀匠にして奥州正繁の門人、その作今に残る。その鍛冶小屋は宮元町にあり、のち鍛冶町と改む。
〃	〃	慈 緑	並覆・護国寺住職、字一元、文化元年十一月雅友を集めて護国寺並覆八景絵巻をつくる。
〃	〃	流水 軒	赤坂山長松寺住職、名普山、字興宗、流水軒は号なり。詩・和歌をよくす。
〃	〃	辻 宗閑	田町の人、伝右衛門と称し後謝世、老いて宗閑と号し和歌に達す。

一八〇四	〃 一	可 興	松声庵にしてこの年三月碓氷八幡宮に発句合せの額を献納している。当地の俳人なり。
〃	〃	深井 景平母	高崎藩士、藤兵衛と称し歌をよくよんだ。
〃	〃	羽鳥 敬徳	田町の人、四郎兵衛と称し駅吏であり街長を兼ね梶山家より養子として羽鳥家に入る。
〃	〃	梶山 山彰	本町の人、梶山与惣右衛門なり。駅吏兼街長をつとむ。書をよくし沢田文龍の門人なり。伯彰、大椿館とも号した。また照亭ともいい文化七年十一月歿す。文化人なり。
〃	〃	大沼 佳明	高崎藩士、勝弥、佳明と称す。並覆八景をうたう。
〃	〃	田 熊	高崎の医官、友甫のち熊甫と号す。字文祥熊、芸名実田、豹の弟なり。
〃	〃	金井 金正風	豊岡の人、詩人なり、その名知らる。金風に關係あり。
〃	〃	大沢 武雅	上並覆、黒正氏、大沢松五郎、武雅等上毛の歌人として知られ並覆八景をうたう。
〃	〃	堀越 周明	九藏町、箱田村の出身、仏工にして書をよくした岩鼻村観音寺住職、和歌をよくし並覆八景をよむ
〃	〃	良 真	高崎藩士なり、茂助、字公則、号を松琴、宣範と号す。
〃	〃	島崎 宣範	高崎藩臣にして砲術家なり、肥五右衛門はその名なり。『紅毛火術録』二巻を伝え更に清水正徳に伝う、南蛮流なり。
〃	〃	富岡 光賢	連雀町・太吉呉服店なり、この時の足袋商二五軒質屋三九軒が多い方で荒物商四九軒で冥加金を二十五兩納めていた。
〃	〃	松本 太平	田町・絹太織問屋羽鳥屋四郎兵衛にして麦仙は号なり、妻一紅は歌人なり、俳句をよくしてこの年六月歿す。
一八〇五	〃 二	平花庵 雨什	高崎の人、狂歌の判者なり。初め崎出鷹人と号した。『俳諧歌麈』にその名あり。
〃	〃	深井 房昌	丕景、字子角。君祺の子にして詩人なり。
〃	〃	大江 丸	名は政胤字は宗二、氏は大伴、初め安井氏又は小島氏、飛脚問屋島屋左衛門の主人の号なり、回心齋大江隣ともいう。高崎に店があり羽鳥一紅と交る、俳人なり。この年八八で歿す。浪華の生まれにして小堀の地藏尊清水観音閣にも奉納句残り。享保五年大阪に生まれ、藤岡にも店があつた。大八木の人、六三才、慶雲荘の墓地に『酒は百薬
一八〇六	〃 三	茂木 金弥	

一八〇六	文化	三	持田好古勸成	本町の人、好古堂と号し、榛山に師事し書をよくす。江戸に出で『世尊寺法帖』十巻を出す。この年歿す。
一八〇七	文化年間	四	川村 富藏 中島 仙助 市田 清兵衛	この年十一月十六日一茶は高崎宿本町の金升屋という旅宿に泊つたが、江戸への上下必ずこの家にとまつたので高崎宿で作られた句もあり、交友の俳人もあつた。
一八〇八	文化年間	五	小林 弥七 小野 良佐 東 明	田町近江屋にして太物卸を行つていた。 中紺屋町・和泉屋にして、絹太物問屋なり、昭和初年までその店あり。 田町・金物、陶器の卸を上下店で行い更に質業もなす。 本町・百足屋にして乾物砂糖卸を行つていた。 栄重なり、東横野に生まる。算術の大家にして碓氷の八幡宮に算額を献す。伊能忠敬に従い越後方面の測量にも加わる。天保二年六十九で歿す。
一八〇九	文化年間	六	深井次郎右衛門 瀬下 房昌 松花堂 俊経 蚕 仲人	高崎世臣、この年五月廿六日頼政神社の祭典に藩の主力を入れ流鏑馬神事を行つた。御用掛である。羅漢町・医師なり、この年二月廿二日この家より出火五八〇戸を焼失す。 この年寄合町に橋屋の書道教授を始め門弟四〇〇人。峻江、字仲貞、臥龍齋と号す。本姓井田、備前岡山藩臣にして浪人す。文政七年四月歿す。 瀬下与惣兵衛の妹婿で、一生を書道に終始した人でこの年古稀の寿を行つた。
一八一〇	文化年間	七	富岡 正忠 松島 本馬 萩原 主水	高崎の狂歌師、全国から四十八評狂歌合せを行つた際この内選ばれる。 高崎の狂歌師なり、江戸で狂歌師宿屋の飯盛が中心となつて全国四十八評狂歌合せを行つた際選ばれる。雅望の門人なり。 高崎藩士、諱は正美、のち正忠と改め通称藤九郎。和歌を好みこの年の秋『上野名跡考』を刊行する。安政六年八六才で歿す。地理学者として名あり。名は愚原、字は子恭、通称松本九右衛門、高崎侯に仕う。この年二十六才で歿す。遺稿あり。 本町一丁目北側にあり、宿屋。 群馬郡中川島村、きぬ太織買つきおろし商、この

一八一〇	文化年間	八	新井喜左衛門	頃高崎宿通過の大名はその都度高崎絹二、三千疋を買求めたという。 貝沢堰の創始者なり。塚沢村赤岩の人、父を雅榮介と称す。秋元侯に仕え治水に功あり。 近江屋にして太物卸。 布袋屋、太物商にして、この店頭風景が錦絵になつて今に残る。 本町・銀杏屋なり、呉服太物卸。 本町・松屋絹太織問屋なり、この店昭和初年までつゞく。
一八一二	文化年間	九	吉岡治郎左衛門 徳右 衛門	田町・河内屋絹太織中継業にして、大正晩年までその店あり。 田町・呉服太物店なり。 田町・乾物塩魚卸。 田町・絹太織商。 岩鼻陣屋の代官にしてこの年十一月十五日歿す。墓は岩鼻の観音寺内にあり。 岩鼻陣屋の代官にしてこの年正月赴任す。 大八木・水車業、この年御城米四口二〇〇俵をここで白米とした。文政頃二三軒の水車がつぶれたので徳右衛門は井野川べりを引払つて上並覆で水車を開く。 碓氷八幡の人、この年八月八幡宮に石燈籠を奉納している。 通称花田文五郎、高崎の人にして豊後楼と称し狂歌人なり。 高崎の人なり、狂歌をよくし号を竹葉亭とも言つた。 工藤氏にして高崎の人、別号を青水亭と称し狂歌人なり。 高崎の狂歌人にして秋田伊当とも号した。また壺玉亭ともいう。 本町・この年十月三日この家より出火九〇〇戸を焼く。
一八一三	文化	一〇	高橋 龜吉	岩鼻初代々官吉川氏の子にして稻荷社を祀り、その神靈の験なるを称え同社に稻荷震験碑を建立する。貞幹の撰文正田健の書なり。 大八木・慶明、霞新流の柔道師範なり。宗助の子

一八二五	文化一二	詩	仏
一八二六	一三	門	松人
一八二七	文化年間	左大小較	前案白俊行
			連鮒人
			小島治兵衛
			山井寿女
			玉蹴 葎透
			一松亭 秀水
			酒杜 氏景
			木 貞 澄
			小林 蘭 秀
			柳 直 成
			飯塚 久敏

にして武芸修行に出で掃宅するや父子との試合に敗れ再び修行に立つ。この年五二才で歿す。
 詩人、詩仏がこの年多野郡新町宿で書いた常夜燈の文字ある石造の高燈籠が大八木の諏訪神社に残る。この燈籠建設に一茶は新町の宿で寄進させられている。
 元日窓、別号陸月亭又紀楽房とも称し高崎の人、狂歌師なり。判者として知らる。
 はじめ後藤市住と称し高崎の狂歌師なり。杉山送が本名。判者としても知らる。この頃高崎に狂歌流行す。
 高崎の人、富岡氏と称し武人なり。狂歌連にして別号交趾堂と称す。
 富岡氏、別号有唐館、この頃発行した『狂歌画像作者部類』にその名あり。高崎の人。
 通称近江屋文七、高崎の商人なり。号は別に金鱗亭といひ狂歌師なり。
 蓬萊島影、又は葉察亭とも称し狂歌をよくよんだ高崎の人なり。
 高崎の人、書画に巧みにして狂歌を六帖園飯盛に学ぶ。山之井なり狂歌師として知られ、のち六帖園雅雄に嫁ぐ。泉源楼うす女と改めた。安政六年六八で歿す。四ッ屋町神保忠右衛門の女なり。
 新井弥兵衛の号なり。高崎の人にして大者楽齋とも号した狂歌人なり。
 星河氏なり。高崎に住み狂歌連として知らる。商業をいとなむ。
 通称は喜八、この人信州水内郡の生まれで塚沢に移り狂歌連中に入った。
 小島氏なり。高崎の人にして狂歌連なり。別号柳桜軒とも称した。
 高崎の人、狂歌人なり。以文堂又は借楽亭とも号した。
 鈴木庄七、高崎に住み狂歌をよくす。
 倉賀野の豪農に生まれ国学をたしなみ和歌をよくす。『上野古碑考』『藤波の花』その他の著あり。
 通称弥兵衛なり。松垣内は号なり。妻三千子も歌人なり。乗附山野火により焼くこと数日、その地下に燃える石あることを発見した人。即ちこれが石炭である。
 碓氷八幡の人、算法にわたくし、この年六十一才。その算法は剣崎の五十嵐任重即ち後の岩井重造に伝えられる。
 上野公園不忍池の弁天祠に樋淵虚沖軒の碑の撰文をする。正徳は高崎の人なり。
 上野国震鱗子なり。奥州正繁の門人にして刀匠として知らる。
 赤坂・長松寺の住職なり。普山と称し詩、書にくわし。
 半村、名は虎、高崎の人にして詩人なり。
 和算の大家にして小野良佐の弟子中特に秀れた人として知らる。滝川村の生まれなり。文化十二年十月に清水観音堂に算額を献納した。他各地に六十有余を発見している。
 名は清嗣、諧翁と号し、高崎藩臣にして絵の余技あり。
 豊岡の人、俳諧師として名あり、文采庵と称す。中大類・読書、習字の私塾を開く。
 高崎とも称し西新波の人、俳諧に長す。
 高崎の人、この頃発行の関東諸家人名録にその名あり、和歌をよくよむ。
 南八幡の農家に生まれ、十七才から気楽柔術を山田勘兵衛に学ぶ。文政五年の伊香保奉額事件に馬庭方にあつて活躍する。慶応二年三月九十六才で歿す。
 高崎藩士にして若水と号す学者なり。
 高崎の人、この頃発行された『関東諸家人名録毛州部』に鉄筆としての名あり。
 名は恭、高崎藩臣にして鈴木恭齋に学び、詩書を好む。
 本町の人、狂歌師なり。
 朝川善庵の門秋田の人、高崎に来り梶山安平の隠居所に住み『藤蔭叢話』を出し、義学聿脩堂を開き多数の門弟あり。善庵の門下にて詩仏をよくす。
 寄合町・御用流書道の大家にしてここに橋懸を開き、多くの門人あり。文政七年七月歿す。

一八二〇	文政年間	義一	清水 正徳
		流 水	反町 宗卓
		菅谷喜右衛門	吐 騷
		高井仁右衛門	此 教
		柴田大右衛門	山口 才市
		馬場 大助	羽鳥 新八
		甘利 聖齋	一 つ ら
		鈴木 恭齋	橋 臥 齋

一八二〇 文政年間

清水 正徳

流 水

菅谷喜右衛門

吐 騷

高井仁右衛門

此 教

柴田大右衛門

山口 才市

馬場 大助

羽鳥 新八

甘利 聖齋

一 つ ら

鈴木 恭齋

橋 臥 齋

一八二〇	文政年間	中村元良	山名の人なり、漢学を教ゆ。直蔭はこの人の門人なり。
〃	〃	加藤新平	高崎藩士にして書をよくし直蔭はこの教えを受く。父源助は高崎で足袋屋をしていたが、弟子の安兵衛に殺された。当時十二、三才の宇市は山口才市の養子となり剣術を四年修業し江戸に出て仇討をした。
一八二三	〃	千葉周作	一刀流の剣客にしてこの頃高崎に道場を開く。伊香保薬師堂に額を献じたことから馬庭念流と紛争を起す。
〃	〃	千世田通監	高崎の人、杏園と号し医を業とす。狂歌に長ず。医齋、医杏園とも号した。
〃	〃	池上庄三郎	東昌と号し又順天ともいう。書画風流を好む。染物を業とし安政五年六一才で歿す。
〃	〃	服部紋治郎	枳齋と号し、名は霞峯、字は雪山、高崎の人なり。書篆刻の大家。
〃	文政六	駒井直蔭	橋本直秀の門人、通称は源七、根小屋の人なり。この年生まる、地方改良に努力、歌道にも達し明治三十六年歿す。
〃	〃	龍琳堂松碩	広く弟子をもち寺小屋教育をしていた。書道にも達す。
〃	〃	梶山三右衛門	安平の聲にして公中と称し朝川善庵門下の鈴木恭齋を自宅に迎えている。藤蔭書塾を開く。この頃富岡光賢と小田又藏が訪ねている。
〃	〃	大行満願海	この年九月十五日高崎に生まる。源氏、新羅三郎の胤で十六才にして剃髮慈範と名づけ嘉永六年千日の大行をなし皇子祐宮（明治天皇）の御愷安快を祈つて加持した。勤王僧として知らる。明治六年五月七日五十一才で入寂する。
〃	文政年間	黒川誠三郎	中仙道を始め高崎周辺の五街道の御勘定役にして橋梁等を支配する。御普請に川島小七郎、高津八十之進がいた。
〃	文政六	須川庄兵衛	倉賀野・回米問屋、倉賀野河岸から江戸送りの米を取扱った。
〃	〃	佐藤忠左衛門	岩鼻代官にしてこの年任ぜられる。
一八二四	文政七	井上正作	松幸藩臣、この年二月中倉賀野宿にて飯盛女（遊女）と遊興し藩から追放を受ける。この頃武士の宿場女郎買は禁止されていた。

一八二四	文政七	鳥屋佐衛門	田町に飛脚問屋を出す。大阪よりこの年高崎に移る。
〃	〃	梶山 彰	字伯彰、又公老号、緑軒という。高崎本町の問屋梶山安平がことなり。この年十一月歿す。
一八二五	文政八	小林 遜齋	名敏、字士学。高崎藩臣にして恭齋と交わる。
〃	〃	鈴木 瀬齋	名敬之、字静介、高崎藩士にして恭齋と交友のあつた詩人。
〃	〃	釈 雲 亭	大類・慈願寺の僧、名琢、字田草。恭齋に交わる
〃	〃	高橋 東平	名定龍、号は霽外史。江戸の生まれであるが高崎に住む詩人。
〃	〃	伯 順	名景礼、号彰齋。恭齋の門下にしてその父は江戸の人。高崎に住む文化人。
〃	〃	橋 瑞	下仁田に生まれ高崎に住む。字聖奴、号柑齋と称す。詩を好む。
〃	〃	長坂小平太	高崎藩老職なり、書をよくしこの年七月歿す。
〃	〃	内海 孜	宮元町に文政七年私塾を開始三〇名収容する。慶応二年には止めている。士族なり。
〃	〃	寺田五右衛門	高崎藩士、宗有と号す。寛裕膽力あり。剣法を中川子武に池田成春に無敵流を学ぶ。のち一刀流に帰す。この年正月八二才で歿す。幼名三五郎、銚子に砲台十二座を築く。
〃	〃	森右衛門	大八木・名主なり、高崎藩では一郷に一人の肝煎名主を置いて藩と村との連絡をなさしめた。その役をつとめた名望家なり。
〃	〃	山本 大膳	岩鼻代官なり、この年五月任ぜられる。
〃	〃	大河内輝承	高崎藩主、この年四月封をすぎ天保三年四月二日日光御名代となる。名は錫、文化十四年三月四日生まる。天保十年六月二十六日僅か二十二才で歿す。
〃	〃	池上庄三郎	東昌、順天とも号す。画書風流の道に達す。この年十一月発刊された『当時諸家人名録』にその名残る。
〃	〃	羽鳥 紋治郎	枳齋、名霞峰、雪山とも号す。書篆刻をよくす。
〃	〃	西岡 九兵衛	袋山、鳥川齋とも号す。盆景をよくす。
〃	〃	笠原 仙吉	周溪、奎雨とも号し画を才いた。
〃	〃	笠原利三郎	仙吉の子なり、笠齋、景廷と号し父と共に画をかいた。
〃	〃	善兵衛	田町・高崎絹仲買人。この年藤岡の名主源七や問屋七右衛門と絹のぬけ買につき協議している。

一八二五	文政八	四郎 兵衛	田町・高崎絹問屋。この年藤岡の各主源七や問屋七右衛門と絹のぬけ買いにつき協議している。
〃	〃	孫左 衛門	田町・右同
〃	〃	半左 衛門	田町・問屋年寄、この年吉井宿に新絹市が出来るのを反対して藤岡町役人に一札を入れている。
〃	〃	源左 衛門	道水、黄菊亭、寿菊齋とも号した。益景、生花並びに画をよくす。
〃	〃	川崎太郎兵衛	玉矩、観堂と号し書、花、益景をよくす。
〃	〃	川 庄三郎	寿榮、金鱗堂とも号し、益景、生花を教えていた。
〃	〃	川村源兵衛	一郷、青森庵といひ生花に達す。
〃	〃	田中十兵衛	弄山と号し花をなす。
〃	〃	山本喜右衛門	一鶴と号し花の先生。
〃	〃	山本治助	一桃、露井齋とも号し花をよくす。
〃	〃	松井小兵衛	桃之、曲肱亭とも号し生花、益景を教ゆ。
〃	〃	福田吉兵衛	裏葉、藤花園と号し夷歌をよくす。
〃	〃	藤本多兵衛	亀明、向旭亭と号す。益景、生花にくわし。
〃	〃	藤本与嘉郎	高崎藩臣、三陵、後素園とも号し花鳥画をよくした。
〃	〃	武田左衛門	一美、鶴堂と称し花、益景をなす。
〃	〃	木島竹松	秀樹、借楽亭なり、歌と俳句に親しむ。
〃	〃	荒木彦次郎	山送、健堂と号した詩人なり。
〃	〃	杉山 葉平	麦粒、花月庵と号した風流人なり。
〃	〃	須藤金左衛門	高崎藩士で早足で有名にして滅法跡八とよばれた家老と意見が合わず深尾家老を斬り京都に逃走、のち捕われて斬られる。
〃	〃	長野跡八郎	高崎藩士にして詩人なり。
〃	〃	長坂 黒肱	景忠の子景員は英五の父にして共に高崎藩臣なり。
〃	〃	深井 景忠	字士徳、高崎藩士にして詩人なり。『賀山伯影隠居新五律』の詩集あり。
〃	〃	原 彦	歌川町に鋳物工場を起す。高崎工業の始めにして小島鉄工所の祖なり。吾妻郡原町小島長五郎株の出店なり。
〃	〃	小島弥兵衛	寄合町の人、画の指導をしていた。
〃	〃	鈴木 南嶺	大類村中大類・読書、習字の寺小屋を開く。
〃	〃	高井仁右衛門	名は業広、字子勤、樺庭と号す。大和山辺郡山田岩掛の城主なり。二十一世師美初めて医を業とす。
〃	〃	山田 昌栄	子秀宗高崎侯の侍医、昌栄は孫なり。文政八年に発刊した『諸家人名簿』にその名あり。朝川善巷に儒を学び、医術を伊沢蘭軒、池田京水に受く。

一八二六	文政九	志倉 西馬	明治十三年皇太子を拜診、門弟三百余、明治十四年一月一日七才で歿す。山田勝次郎の祖なり。
〃	〃	良 翁	田町の俳人、本姓富所、通称豊三郎、名は俊明。檀庵、毛軒、蕉林子、樗道、自喚居士等多数の号あり。文化五年嘉多町に生まる。この年家業左官職をやめ可布庵逸淵の門に入る。嘉永三年江戸に出で安政五年八月十五日五才で歿す。『西馬句集』その他あり。嘉永五年には一茶の『おらが春』に跋文をかく。また天保十三年三月観音山で芭蕉一五〇回忌追善句会をする。
一八二七	文政一〇	茂木惣兵衛	新町・延養寺住職、佐野に船木観音の板碑を建立、今に残る。
〃	〃	実 倫	高崎の人、この年生まらる、惣七の二子、長兵衛とも称し大黒屋（呉服店・九藏町）と号す。絹物生糸業を営む。安政六年横浜開港と共に貿易業を営む児玉郡の人野沢庄三郎のあとをつぎ第二銀行、株式取引所等の頭取となり、明治二十年黄綬褒章を受け七十四銀行の頭取、明治二十七年八月六九才で歿す。
一八二八	文政一一	富加津徳太郎	護国寺住職となる、寂而院、江戸にあり。この年九月三日より東叡殿内において大般若経を写し始め折本二百冊を、天保十三年十月までに十四年間に写す。
〃	〃	文 五郎	碓氷・八幡の人、江戸六郷流正流の断を修め六郷新平という。この流今に残る。
〃	〃	篠原 俊芳	四ッ屋町、この家からこの年十月十五日出火五八〇戸を焼く。これにより新町に飯盛女を置くことを許された。
〃	〃	笠原 右膳	大八木静氏、宝暦十二年生まる。筆技に凝り碓氷八幡の上席神主矢口丹波の女を嫁り篠原家の養子となる。幼名弥市右衛門、後左膳、狩野探信に絵を学び文政九年法橋の称号を受く。弘化四年七月八五才で卒す。
〃	〃	岩右 衛門	正観寺の宮大工なり、充栄という。この年五月七八で死す。村の龍泉寺本堂その他をたて、高崎藩の御作事棟梁であった。

元紺屋町・湯屋渡世人、高崎宿にはこの頃九軒の銭湯があり、この年連雀町の八十吉といふもの業湯

一八三〇	文政一三	桐雅雄	高崎田町の商人、大谷氏なり。名は三右衛門、幼名清吉、諱は雅雄、歌名赤貫、家号桐屋、六帖園金多楼とも号した。六樹園に学び狂歌をよくし和歌、音曲糸竹万芸に達す。この年八月歿す。女色を好むことで名あり。一説に嘉永二三年に歿したともある。
〃	〃	岩井重遠	劍崎に生まれ、字致郷、湛々と号し通称右内『算法雜廻』『藤樹先生文武問答』の著あり、古賀侗庵の門に入りち五料村で岩井学校を起す。
一八三一	天保年間	松田 慈盧	通称多助、諱は順之、藩の世臣にして寺社奉行となり祐筆たり。英棟の三子、嘉永壬子六月歿す。七〇才。
〃	〃	三吉野 檢校	姓は沼田、中尾の出身、天保年間に生まる。十七才にして両眼失明、京都に出て按摩鍼術を学ぶ。江戸に帰る門弟を養い和漢の学を修め、郷里の飯玉神社新築に多額の金を寄進す。『かへしの風』の著者なり。
〃	〃	天保二 僧 宝 山	大信寺二十二世住職、富山侯の家臣成田氏の子、十八才の時浄土宗西養寺転替の弟子となり、京都清水の一如律師に宋学を修め、この年大信寺住職となり和歌をよくす。安政四年五月入寂。
〃	天保年間	む め	石原村・定七の後家で貧農であるが、この頃白米や鍋釜の泥棒が流行し、その被害者でその旨届出の文書が残っている。
〃	〃	落合 青溪	嘉多町の人、法輪寺の天井に絵をかく。山水画殊に巧みなり。
〃	〃	星野 碧山	法輪寺山門の懸額を書いて書道に造詣深く支那人に書道で侮辱を受けたので食を断ち憤死した。家は薬種問屋近江屋なり。天保元年本町に生まれ歿年五八才、明治二〇年三月三十一日なり。
〃	〃	木部 白満	倉賀野で藤浪屋という家名で呼ばれ古事を好む遊女屋なり。清水浜臣が宿泊したことが上信日記に残る。山名の出にして直右衛門久品と称し、天保十二年正月十七日六七で歿す。木部駿河守の裔、幼名直右衛門、光品とよび和歌をよくし、谷文晁等と交わる。

一八三一	天保年間	木部 三十郎	山名の出にして平井村に移る。白満の弟なり。馬庭念流に達し樋口家の雄となる。その額山名八幡社に残る。弘化四年三月十五日奉納したもの、名清房、父善造にして三十郎は嘉永七年六月二十四日歿す。
一八三三	天保	矢島 藤藏	岩鼻代官にしてこの年任ぜらる。高崎駅長なり。公牛と号し茶道に精通、天明元年の生まれ、梶山家の主人にしてこの年五月五四才で歿した。
一八三四	〃	梶山与三右衛門	新五右衛門の長子、名は喜澄、通称大助、字公淵高崎藩臣にして詩、画をよくしこの年九月歿す。『清風集』等名あり。
〃	〃	馬場 若水	劍崎・関流七伝算術家藤井右門重遠の門人で高弟この年八幡八幡宮に算額を献す。
〃	〃	山口重右衛門	同 下小鳥
〃	〃	松井 金吾	田町の人、新八と称し篆刻に妙を得て一家をなす。この年七月歿す。
〃	〃	桜井 歌郎	岩鼻代官にしてこの年矢島に代り任ぜらる。
〃	〃	小見 僊茂	高橋豊八という。狂歌人にしてこの年正月歿す。
一八三五	〃	六 羽鳥 震峯	高崎水魚連社、守成とも号す。
〃	〃	川崎 平兵衛	宮元町に内海塾を開き子女を指導する。
〃	〃	緑園 守清	新町・穀屋という屋号で娘等と共に三味線をもち客席に出て客一人から二朱の祝儀を貰つて踊り歌つた。これが芸妓第一号である。
〃	〃	内海 孜	清水赤城の外戚なり。
一八三六	〃	七 内海 孜	威徳寺住職、字は最実、香炳山人と号す。寺門静軒に学び詩文殊に筆札に妙を得、弘化二年板鼻の島方松蔭のため尙齒放生詩集に序文をかく。
一八三七	〃	八 お 仲	石原字前右百姓。この年五月二十日この家に盗賊しのび込み衣類三十三点と金五円とられたが、この衣類に絹物があり騒ぎが大きくなった。百姓は絹物を使用出来ない制度である。
一八三八	〃	九 青柳 文平	高崎藩主、この年九月封をつく。初め勇五郎と称し文政三年十一月四日生まる。天保十年十二月右
〃	〃	〃	大河内 輝徳
一八三九	〃	一〇	

一八四〇	天保一一	大河内輝光
〃	〃	霞庵立雄
〃	〃	綾瀬亀田梓
〃	天保年間	大助
一八四一	天保一二	山本大膳
〃	〃	関保左衛門
〃	〃	林部善左衛門
一八四二	〃	岩上元右衛門
〃	〃	大内閑長
〃	〃	巻菱湖
〃	〃	志倉為流
一八四三	〃	子之七
一八四四	〃	山口太郎平
〃	弘化年間	高橋鶴水
〃	〃	湯淺白雨

京亮となり同十一年八月十四日僅か二十才歿す。この頃の高崎は八三七戸三三三五人、倉賀野は二九七戸二〇三二人。

高崎藩城主、從五位右京亮なり。初め英五郎又は健吉と稱す。本庄安芸守道實養方弟なり。文政五年四月十一日生まる。弘化元年御本丸普請に四千百兩を獻す。文久二年八月二日四一才で卒す。武居世平等と共に高崎水魚連の社中として歌道をよくした。本名中山源五郎、天保十一年六月歿す。五八才なり、一説に安政三年十二月歿したともある。

岩鼻・観音寺境内にある萬日堂の碑この人の撰、柳灣館機の手で建てられた。

糸の貫びきをして清里村野良犬木暮家の貫びき書にその名がある。この頃から貫びき制があった。高崎の人なり。

岩鼻代官なり、この年任す。

岩鼻代官なり、この年七月任す。

同 右 九月任す。

高崎藩郡奉行である。この頃の高崎宿の旅籠屋は十五軒に過ぎない。倉賀野には三二戸、板鼻五十四戸多々良・俳人にして西馬と共に観音山下に芭蕉句碑を建設している。

西馬と共に芭蕉の百五十回忌を高崎で開いた。観音山芭蕉句碑はこの人の字という。

西馬の養子にして俳人なり、通称伊八、嘉多町に住す。可布庵逸淵の親族なり。のち諸国行脚し旅に死す。

正観寺の組頭で、寛政五年から五十一年間勤務したので御役御免をこの年願出ている。村の生字引で正に表彰もの。

石原村名主、苗字御免になり。この年正月十七日栗崎村弥五八娘せん(一七)を伴寛之助の嫁に迎え領主に許可を願い出ている。

高崎の人、通称勘兵衛、別に千滴庵と号し天保弘化時代に活躍した俳人。

新保田中の人、通称伊勢五郎、巡水庵と称し俳人なり。

一八四四	弘化年間	野村兎来
〃	〃	黒須兆水
一八四五	〃	青木周溪
〃	〃	薄庵光門
〃	弘化年間	木芝
〃	〃	那須一考
〃	弘化二	喜右衛門
〃	〃	林遊
〃	〃	三木早割
〃	〃	津田明馨
〃	〃	久米逸淵
〃	〃	穀屋彦八
〃	〃	佐藤竹浪

白銀町の人、通称善四郎、又松下庵とも号し志倉等と俳句の交りあり。

高崎藩臣、錦堂とも号し通称を惣作という。俳人なり。

新紺屋・上絵師なり。五十嵐華亭と共に大信寺本堂の天井に天女をかく。『高崎図説画抄』『周溪雜記』十卷余あり。この年歿す七五才。

通称は矢島利兵衛、橋守部の門人にして歌道に通ず。九藏町の商人。『狂歌作者評判記』にその名あり。

本町の人、通称白木屋十兵衛と称した俳句人なり。

鍛冶町の人、通称連藏、一考は号なり。源一郎とも称し生沢一太郎の父にして明治三十六年三月七四才で歿す。

高崎在の人なり、この年信州塩尻八郎右衛門等から蚕種場を譲渡しを受けている。これらが本町蚕種販売市を盛んにしたものらしい。

九藏町の人、通称林大兵衛、林遊はその号にして俳人たり。

高崎の人、武家にして胸算早割の別号あり。重宝舎ともいう。狂歌、和歌をよくす。

高崎藩臣、藩剣術師範、天真一刀流の開祖、寺田宗有の高弟、白井義謙につき字ぶ。弘化三年藩の演武会が行われ師範となる。『慶元軍要録』の著あり。元治元年十二月野州で病を得て歿す。

兄玉町の出で寄合町で俳諧の弟子をとる。可布と号し可布庵なり。西馬の師なり。

高崎の頼仲間総代にして熊野神社政築にこの頃力を入れていたが当時頼商の勢力は大きかった。片岡館の旧家にして俳句の他に文人墨客を愛す。高崎に出張所をもうけた医者にして佐藤病院の祖



治維新

一八四六	弘化三	川合 陳齋
〃	〃	長谷川 昆溪
〃	〃	清水 正則
〃	〃	大河内 輝聰
一八四七	弘化年間	梅山 善次郎
〃	〃	久坂得右衛門
〃	〃	内海 鈞経

なり。竹浪は俳名。逸々亭、伯林古泉の号あり。清はその孫なり。天保五年十一月二十日同村の市之丞後家いわの狂状を診察届出た文書が残っている。名は賢寧、大阪倉屋敷在勤にして書画俳句をよくし、この年歿す。川合深水の祖先なり。絵もよくかく。

詩人、名は城、子は子肇、一に醒翁と号す。高崎藩儒臣にして江戸に居り詩集『寒香園百絶』『昆溪百律』がこの年発刊される。

高崎藩士にしてこの年歿す。

高崎藩主、従五位右京亮、始名は恭三郎、文政十年八月廿四日生まる。嘉永五年七月寺社奉行見習となる。弘化三年九月封をつぎ八万二千石なり。万延元年六月十八日卒す三十四才なり。

下小鳥の人、読書、習字、珠算の塾を開く。一二〇人門弟あり。明治五年中止。

上小鳥の人、農家の人々に私塾を開いた。

高崎藩儒臣、名は孜、字子文、尾張の出なり。鈞経弱冠、高崎侯に召され藩学校の教授に進み六十石を食む。文学を好み高崎俊土伝、鈞経文集等の著あり。明治十二年八月七七で歿す。父遜巷、儒をもつて業とす。母に孝養をつくし庭に菊を植えて母をなぐさめて名あり。

一八四七	弘化四	喜太郎
〃	〃	亮 範

倉賀野・藤右衛門、八左衛門、八右衛門等とこの年九月岩鼻役所に船問屋株の申請をしている。

大八木・妙音寺十六世、この年九月同村施主須藤政吉の寄進で半鐘を納めた。

徳川治下の長い封建政治がようやくすれかかり、新しい思想が生まれ幕末異変を起した。猿田忠雄が高崎で死罪にされ、下仁田戦争には高崎藩からも多数の犠牲者が出るなどあわただしい世相にあつて、私塾の流行期に入り新しい学問が始められ、維新を中心として人材の動きも大きくなってきた。武道にかつて文化と産業の道が開け初めたのであるが、高崎で特に目立つたのは自由民権運動が盛んとなり宮部襄、伊賀我何人、長坂八郎等が群馬県をリードして新しい民の声を叫んでいたことである。

一八四八	嘉永一	赤見 寛
〃	〃	堀田 氏
〃	〃	浅井 忠恕
〃	〃	浅井 卓章
〃	〃	市左 衛門
〃	〃	京屋 弥兵衛
〃	〃	島屋 佐兵衛
〃	〃	反町 兼吉
〃	〃	梅山 太文治
〃	〃	高木 源太郎
〃	〃	権之 丞
〃	〃	羽鳥 藤三
〃	〃	大橋 訥巷
一八四九	嘉永二	相川 浅右衛門
〃	〃	神谷 高明
〃	〃	嶋崎 宣哲
〃	〃	井上伝五左衛門
五〇	〃	矢島八郎右衛門

若松町にこの年赤見塾を開く。

高崎藩主大河内輝聰の夫人、この年男を生む、即ち桂林公(諱は輝照、通称恭三郎)なり。

高崎藩臣、安政四年十一月二十八日歿す。竜興寺に墓石あり。

高崎藩臣、安政七年七月十七日歿す。

大八木の名主なり。名主はこの頃藩から麦二俵位を給され組頭、百姓代は無給であつた。市左衛門の年貢米はこの頃一八俵。

江戸、京、大阪定飛脚問屋にしてこの頃飛脚は二・七の日が立日であつた。

同、この人の立日は三・八の日であり、佐兵衛は享保二十年間藤岡に店があり延享二年高崎で支店を開いた。

江木の人、同地に読書、習字、珠算の私塾を開く筑繩・同上

下小鳥・同上

倉賀野宿の旅籠屋、嘉永四年二月十四日越後国蒲原郡下今町嘉七の娘喜せというものを二拾年間の年期奉公をさせる帰り証文が残されている。この旅籠屋はこの頃女郎屋であつた。この喜せは当時四才であつたが、この年にして売女の運命を負わされている習性である。

因親にして、宿大類にすみこの地を支配する。徳田寛豊はその四男なり。

坂下門事件の指導者『關邪小言』の著あり。赤城の四男なり、字周道、通称順藏、屋部居士と号した。大橋淡雅という宇都宮の人の養子となる。

上小鳥に面積千余坪を寄付し田用水のため池をつくり松平右京大夫より功を賞せられ麻袴を貰う。名主なり。

高崎藩臣、この年高崎藩主楓山御鏡の御用を命ぜられたので押合役となる。

右 同

右 同

諱は宗儀、新町に住み伝馬問屋年寄役を世襲す。

一八五〇	嘉永三	小島 弥兵衛	この年八郎生まる。矢島の祖先は和田義盛より出ず。文久三年に歿す。
一八五一	四	松田 順之	高崎の鋳物師なり。小林伊賀守、藤原信国ともいう。この年東秋間の桂昌寺にある井伊直政菩提の鈎鐘の修理をしていなおしている。また大八木妙音寺の鐘もつくっている。
一八五二	五	堤 順美	高崎藩儒臣、迂仙と号し又菘廬とも称す。吉賀精里の門に研学披群の誉あり。輝承侯に愛され藩政に参与、この年『芸林蒙求』六巻を出す。尙二編三編は出版を見ず。嘉永六年六月歿する。
一八五三	六	市郎 兵衛	高崎藩家老、この年砲術家中野善之丞と共に銚子に行き砲台十二門を修理する。しかし六年には耳を病み職を辞し安政二年五月二十一日卒す。
一八五四	一	孫左衛門 権左衛門 半左衛門 禎藏 羽鳥四郎兵衛	高崎宿の年寄なり。
一八五三	六	千葉 勘五郎	問屋なり。
一八五三	六	梶山与三衛門	同 本町の須藤家のもの。
一八五三	六	徳田 寛豊	同 問屋なり。
一八五三	六	豊島源太左衛門	同 問屋なり。
一八五三	六	安政一 喜平次	高崎宿役人総代であり当時助郷の役をしていた一紅の後胤なり。

高崎藩砲方、この年六月八月米国の軍艦四隻浦賀に來り高崎藩も出兵の準備命令を受けたので銃陣の練習し藩主これを検閲している。

井野村名主、この頃高崎藩は地芝居を禁じていたが、この村で禁を犯し大目玉を食う。磯右衛門が青年十名を村預けにされた時の引受人で名主があずかる。『吟味中手鎖腰纏にして取逃がさぬ様』

一八五四	安政一	四郎 右衛門	と役人宛て契約を出している。
一八五四	安政一	関橋 守	浜尻の百姓、このときの所有田地三九〇畝一二歩で伝馬の宿駅から割当てられた人馬の勞務賃金をこの持高と出場した働き手により徴収されたが、この時から一〇貫一六文であった。
一八五四	安政一	井 邑 氏	室田の大阪屋主人にして歌人なり。この年十一月碓氷八幡八幡宮境内に歌碑をたてる。吉田圭順の教えをうく。材木商なり。
一八五四	安政一	秋田 文頼	高崎藩主大河内輝聰の側室にしてこの年男子を生む。即ち幼名鷹之丞、のち輝剛なり、佐倉藩士井邑某の姉遊花のち袖浦と改む。
一八五四	安政一	梅 秀 樹	高崎の人、実名伊当、文頼、別に壺玉亭と号し狂歌人なり。
一八五四	安政一	鈴木 直成	高崎の人、以文堂、偕楽亭とも号した。狂歌師。字は庄七、柳直成とも号し高崎の狂歌人なり。
一八五四	安政一	飯島 新太郎	高崎藩砲術教授なり。安政元年七月十五、六日新造の大砲数門を武州大森に試射す。また高崎城に火薬千貫目以上を常備する。
一八五四	安政一	市川 純	高崎藩使番席、軍学に長じ將軍に謁見を賜る。更に者頭上席となり五口棒を増さる。嘉永二年福山城築城を命ぜられ派遣さる。その子十郎を伴い翌年終る。更に羽州庄内に海防のため砲台をも改造す。
一八五四	安政一	浅井 貞教	高崎藩番頭なり。黒船の來襲にそなえ砲術方中野善之丞等諸士十有七人を旗本備に加えて上郎をまもる。
一八五四	安政一	市川 十郎	高崎藩儒臣なり。蒔田健助が蝦夷地誌を編纂に手伝う。更に蝦夷の地を巡視し地図を製す。のち幕府の儒者となる。
一八五四	安政一	岩 野 篤	高崎藩供小姓にして大阪にあり。この年九月十九日露国の軍艦大阪に來る。警備を命ぜられてその任を全う麻上下を賜る。
一八五四	安政一	長谷部 義重	高崎にいた刀師にして野州正義の門下で新々刀である。江戸にも住む。愛宕神社にその作あり、源正重作はその門人である。

一八五四	安政年間	植原 貞吉	飯塚にこの年読書、習字、珠算の寺小屋を開く。
〃	〃	新井金右衛門	具沢の人、右に同じ。
一八五五	〃	高橋 市太郎	具沢の人、右に同じ。
〃	〃	堤 寛	高崎藩臣、者頭上席、この年正月幕府の砲術の師勝安芳の門に入り学ぶ。高崎藩が西洋兵学を入れた最初である。慶応元年二月十二日卒す。漢学多識にして心を兵事に用ゆ。
〃	〃	永井 永順	堤に同じ。
〃	〃	新井 七郎	具沢・読書、習字、珠算の寺小屋を開く。
〃	〃	長井金右衛門	同 右
〃	〃	内田 兵次郎	井野の人、畜力利用耕作機、おんがを研究完成した。農閑利用に雛人形も製作している。
〃	〃	設楽 八三郎	岩鼻代官、その名高崎古代並諸雜記にあり。この年任命。
〃	〃	小林 藤之助	岩鼻代官にしてこの年七月設楽転出後任命さる。
〃	〃	市川 左近	米沢の人、隻柳と号し、神職たり。文久二年に田町に私塾を開く。藩侯より種小学館の扁額を賜る。小学校建設なるや一千円を寄付、明治二十二年三月七八で歿す。節約家で夜の対談に燈火を用いず下駄には穴七つを穿ち節多きを用いた。
一八五六	安政 三	川上 重五郎	岩鼻代官この年四月任す、金五之助なり。
〃	〃	笠 斎	青木周溪の男にして父の教えで絵をよくし、この年六月二十五日歿す五三。
〃	〃	吉田 吉次郎	高崎藩馬術教授なり。この年四月二十三日江戸より高崎まで馳駆し二十有七里余を人馬健全にその目的を達す。
一八五六	安政 三	神保 金三郎	高崎藩諸土屋、馬術教授吉田吉次郎の指導によりこの年四月二十三日江戸より馬で高崎まで走らせたが、卯の刻江戸を出て申の刻高崎についた。二十七里余を十時間を要したが、これが速がけの初めである。
〃	〃	高島 意伯	高崎藩侍医、昌軒なり。名医として知られこの年正月十八日五十四才で歿す。墓碑大雲寺にあり。
一八五七	安政年間	遠藤清兵衛門	高崎藩北町奉行にして文久年間に起きた御伝馬事件に際し南町奉行深井八之丞と共にこれを裁く橋守部門下にして書、歌をよくす、大信寺住職にしてこの年五月入寂す。
〃	〃	宣 替 上人	大類村大字中大類、この頃より読書、習字の寺小屋を開き明治初年までつく。
〃	〃	松本 忠五郎	岡本秋暉の門、名は馨、字は降雪、高崎の人、金
〃	〃	岡本 梅坡	

一八五七	安政 四	伊奈半左衛門	井という、幼より絵を好み矢島乾庵に十三才で学ぶ。安政三年秋暉の弟子となる。慶応年間書絵を教ゆ。弟子三五〇人、のち本県師範学校で教ゆ。妻は武井世平の女なり。明治三十八年二月十二日歿す。その遺作墓碑共に大雲寺にあり。
一八五八	〃	池上 東昌	岩鼻代官にしてこの年十二月任ぜらる。
〃	〃	長谷部 義重	順天とも号す。通称は庄藏、寄合町の人にして染色を業とし画を好む。この年歿す六十一才。大信寺の板戸にこの人の絵あり。鈴木南嶺の門人。
〃	〃	大沢 武平	名刀匠、若松町光明寺境内に墓石あり。義重は細川義政の高弟で高崎藩抱え鍛冶なり。この年八月歿す。愛宕神社に五尺余の大刀残り。
〃	〃	深井 資安	嘉多町に上新田倉林右衛門株で開店。
〃	安政年間	津田 明常	高崎藩年寄にしてこの年江戸に悪疫流行しこの年卒すコレラなり。
〃	〃	宗像 蘆屋	高崎藩、天真一刀流のつかい手、父は明馨なり。藩の師範となつたが元治二年歿す。
〃	〃	山田 彦谷	岩鼻村大字岩鼻、この頃より元治時代まで私塾を開き漢学、習字を指導する。儒者にして代官所官吏が多く教えを受けた。
一八五九	安政 五	深井 量平	高崎藩士、通称彦左衛門望嶽軒と号す。文化二年六月十五日生まる。城代組世話役をつとめ俳句をよくし、かつ宝藏院槍術の師なり。子弟多く六〇〇人を算す。慶応三年六月六日六〇才で歿す。明治三十三年九月大河内輝耕家額高崎中学教諭高松彦太の書で竜興寺に建碑される。
〃	〃	高井左衛門大夫	高崎藩臣、和歌をよくしこの年十二月歿す。
〃	〃	大 瀧 口 保	熊野神社大宮司、この頃神社造営のため寄付金募集、沼田の久仁屋重作に金百足の寄付受取りを出している。役人総代は梶山与惣右衛門、小泉市左衛門である。
一八六〇	万延 一	小柴庵 泰林	この年高崎宿に算読の私塾を開き一二〇人の弟子あり、明治四年に廃止している。
〃	〃	武井 世平	正観寺の人、この年発行された狂歌『三才集』にその作のせられる。

新町の人通称善次、諱は公德橋守部の門に学び、

一八六〇	万延	一大	沼	桶	古調園世平と称す。長歌、短歌とも優秀にして旧藩主輝声の指導をする。狂歌にも親しみ薫庵はその号なり。この年『三才集』を発売し明治十四年一月三十一日八四才で歿す。
〃	〃	〃	〃	〃	高崎藩文学教授にして世子桂林公の養育に当り(公この年八万二千石を食む)その養子綱正もまた侍講たり。前年主君輝聰の死により野火止に葬りその墓誌銘を作る。
〃	〃	〃	〃	〃	親義、宿大類に生まる。桜田御門事変の水戸浪士に加わり井伊大老を刺す。この時類三二十九才であつた。のち逃れ徳田寛豊と改め天照教を創始し明治十二年十一月富士山中腹に草庵を結び信徒二〇万に達し明治二十五年五月二十五日六三才で歿す。
〃	〃	〃	〃	〃	初名輝照、この年八月封をつぎ八万二千石高崎城主となつたが十三才なり。幼名恭三郎、嘉永元年十月十五日生まる。文久元年十月皇妹和宮降嫁に際し高崎宿の警護を命ぜらる。隠藩により明治二年高崎藩知事となる。明治十五年八月十五日卒す三五才なり。右京大夫となり名君たり。
一八六一	〃	二	田中	毛野	正胤ともいふ、赤太郎、行氏鶴堂とも号す。高崎の人にして平田篤胤に学びこの年正月『気吹舎先生伝』の著あり、僅か十九才である。『高崎藩神名帳』『同別記』等の著書も残る。明治六年十月三十日三十一才で歿す。
〃	〃	〃	〃	〃	下小堀に私塾を開く。
〃	〃	〃	〃	〃	藤塚・この年水車を利用し機械製糸を初めて考案し横濱に出て貿易も開き斯界の恩人なり。天保元年十一月十一日に生まる。明治四年には威徳寺内に鳥川利用の江戸通いの水運種問屋をはじむ。また米穀の定期売買所を設けている。明治廿七年十月九日死亡六五才なり。
〃	〃	〃	〃	〃	小八木の百姓、この時の持田は一八七畝〇五歩でその年貢十三俵三斗一升四合と纏二貫五七〇文を納めている。この当時の税の基準である。
〃	〃	〃	〃	〃	下和田村名主、南町に住む。この年六月十一日雨がなく雨乞いに羅漢町の獅子を榛名山で舞う計画をして城主に願ひ出る。
〃	〃	〃	〃	〃	高崎の代官、御米見梅沢辰之助、佐藤六兵衛と共に

一八六一	文久	一	磯右	衛門	に羅漢町の獅子舞を榛名山に代参させることをきめる。 南大類村名主、この年六月のひでりで雨乞いのため獅子を榛名山で代参舞つたが降雨がなく羅漢町の獅子の出勤をうながす。
〃	〃	〃	〃	〃	羅漢町名主、この年城主の希望もあり六月十一日榛名山に同町の獅子をつれて代参、このため雨大いに降る。獅子は栄助、松太郎、忠次郎、松之助、幾次郎、広吉、吉五郎等が舞つた。
一八六二	〃	二	弥	七	羅漢町年番組頭 右 同
〃	〃	〃	〃	〃	本町・この人の貸家からこの正月廿七日出火、高崎宿の過半数を焼失する。これを百足屋火事という。
〃	〃	〃	〃	〃	田町布袋屋呉服店の主人で、百足屋火事に際し罹災一戸につき二朱、各町へ三朱づゝを恵む。この店錦絵となり今に残る。
〃	〃	〃	〃	〃	田町・百足屋火事に際し一戸につき百足づゝを施した。
〃	〃	〃	〃	〃	下豊岡の人、製糸の従来の座繰を連結し製糸機械の如く水車よりツルベ仕掛で動力をとることを発明した。日本で最初のものであり、のちに沼賀茂一郎がこれに改善を加えて活用した。
〃	〃	〃	〃	〃	壬生浪士隊がこの年清川八郎によつて組織され勤王攘夷説を力説したのに参加した高崎浪人である。この時二十九才である。
〃	〃	〃	〃	〃	同上、藤塚村の産、十五才で一番組に加わつてゐる。
〃	〃	〃	〃	〃	九藏町・正法寺内に築瀨塾を開き、多くの子弟を教育、橋臥翁の孫なり。橋芳子にして歌をよくし長じて築瀨忠方の妻となる。
〃	〃	〃	〃	〃	高崎城代、吉田藩士松平八右衛門の子なり。この年正月高崎城北本町より失火、高崎半数を焼き死傷多いため、以来、義種茅屋改良し瓦葺を奨励断行した。書をよくす慶応元年八月十二日歿す。
〃	〃	〃	〃	〃	高崎藩頭取、この二月側役新家伝三郎等六名と共に武州柴又村帝釈に詣でんとし船手に不法法をなし幕府の密を受け一同押込の刑を受く。のち許されたが、高崎藩が西洋式兵学を用いたのに反対している。

井上平次郎	関口横左衛門	吉左衛門	橋本嘉兵衛	志村重兵衛	茂原常五郎	綿貫己之七	永井伝七	秋山清四郎	天田勝兵衛	松本彦兵	土屋善助	市川有孝	中沢儀兵衛	鎌塚九兵衛	関根作右衛門	広岡庫吉	金井春衛門	大橋順藏
-------	--------	------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	------	------	------	-------	-------	--------	------	-------	------

新町・間屋役人なり。新町に飯盛女を置いて火災による復興をはかったが入れられず御伝馬事件を起し重立総代となり箱訴をなし入牢させられる。川口屋と号した肥料魚類店で平次郎は藤岡の清水政七の長男、明治四五年四月三日歿す八〇才。その子が即ち保三郎なり。明治一二年町議に当選する。

右に同じ。入牢させられたのはこの年十月三十日茂左衛門ともいう。

右に同じ。吉左衛門はのちに田中となる。

右に同じ。

御伝馬事件の關係者、明治二年九月九日五十一才で歿す。

御伝馬事件に關係あり。小前総代、吟味中手錠腰繩で砂質町あすけとなる。

茂原に同じ。

右 同 模助ともいう。

右 同

御伝馬事件箱訴をした筆者であり、吟味中手錠腰繩で下横町あすけとなる。茂太郎ともいう。

右に同じ、浦三郎ともいう。

高崎藩備員、この年八月二日老公逝去により（四一才）平林寺に葬りその墓誌銘をつくる。

組頭、御伝馬事件に關係し連雀町組頭あすけとなる。

御伝馬事件のため連雀町組頭あすけとなる。

御伝馬事件の調停に入り中島福高と共に五百円を藩主に献納し、この利子一カ年五十円をこの宿の助成金として手打ち落着せしむ。中島は寄合町の絹問屋のち福高と改む。明治二十五年七月廿六日七六才で歿す。同家は明治天皇大正天皇の御行在所となり拝謁を賜わる。関根は市長をした作三郎の父なり。俳句をよくし星樹軒逸英と号す。中島と共に間屋年寄りなり。

下小島・訃書等の寺小屋を開く。

下小嶋・右 同

父は清水赤城なり、号を納庵と称し俳句をよくし

菅谷清允	小笠原甫三郎	津田明馨	長谷川子肇	大河内清典	一八六四 元治 一 堤 克寛	会田孫之進	浅井隼馬	深井八之丞	中村俊達	内藤儀八	大島順次郎
------	--------	------	-------	-------	----------------	-------	------	-------	------	------	-------

坂下門事件にも關係があつた。この年歿す。

高崎藩江戸留守居なり。この年三月神奈川に生麦の変起り、四月高崎藩市中取締を命ぜられ新徴組を説諭につとめて功あり。明治元年文武館総裁に任ぜらる。のち銚子港民政総裁、少参事となる。

岩鼻代官なり、この年七月任ぜらる。

高崎藩士、この年々未供小姓に抜擢され剣術教授をなす。寺田宗有の門人にして文学に長じ『慶元軍要録』を著わす。

高崎藩臣にしてこの年津田明馨と共に供小姓に抜擢さる。昆溪と号し最も詩に長す。文学教授となる。剣術は寺田宗有の門、軍学にも達す。

高崎藩家老なり。温厚和平にして弓馬に達す。この年五月歿す。

金之丞、高崎藩重臣なり。この年水戸脱藩の士武田、藤田等九百余人、馬二百巨砲八門をもつて下仁田を経て京にのぼらんとしたので高崎藩これを迎え討つも破る。克寛使番なるも槍をもつて陣頭に立ち指揮し狙撃されてカブトを打ちぬかれて戦死、四十二才。そのカブト今に残り堤克敏の先祖である。

高崎藩番頭、武田勢を下仁田に迎え討つ。第一番手兵百九人で梅沢峠で対陣。

同二番兵九十二人、大砲十二門をもつて出陣。南町奉行なり。同上第三番手兵百三十二人を率いて出陣したが、この軍は下仁田戦には間に合わず参加しなかつた。百五十石を食み英五の父にして景忠という。

山名の医師なり。下仁田戦争に高崎軍に従軍し救援につとめたが武田方に生捕られ敵陣中において切腹す。武道に秀で腕力能く碁盤をあげて煽ぎ火を消した。

高崎藩臣、下仁田戦争に加わる。真つ先に敵陣に斬込み槍班十二、大刀班一、鉄砲きず一を受けて戦死する。時に二十才。勝之ともいう。

高崎藩臣、下仁田戦争に参加、槍術に達し敵の伊

一八六四	元治一	国友辰三郎	本木祭之助	浅井新六	岩上主命	松下善八	反町利喜藏	山田寅二	深井助太郎	小泉小源治	渡辺源之助	近藤左平	吉田友七郎	寛 閏助	国友辰三郎	小泉又三郎
------	-----	-------	-------	------	------	------	-------	------	-------	-------	-------	------	-------	------	-------	-------

勢山下本陣に敵將小林幸八を追つて斬込み奮戦したが銃丸胸を貫き戦死二十九才。
 同、大島と共に敵本陣に斬込み銃丸に胸板を貫かれて戦死する。以上三名を先陣三勇士として今にその名残る。
 同、この時十五才働武者として従軍、高崎藩不利となり退陣に際し殿軍となり踏み留まり奮戦し追兵五人と打合つて戦死。
 同、引きあげの殿戦に際し敵の追撃をおさえ奮戦の上戦死。高崎藩使番にして貞如と称す。ときに四十八才。
 同右、大砲頭役にして従軍した。この時三十五才で戦死。
 同右、働武者、この戦で鉄砲班一、槍キズ二を受け戦死す。名忠直、六〇才なり。
 下仁田戦争に参加し鉄砲きず槍きず各一つを受け戦死、佐之、五一才。
 下仁田戦争に加わる。この時二十才。深手を負いながら勇を振つて遂に戦死する。
 景命なり。下仁田戦に奮戦したがこの時十八才。弓の達人なり。敵方の小松崎庄之介が眼と眉毛の間を射ぬき小松崎は再起不能とさとり切腹した。助太郎もまた戦死、八之巫の子なり。
 働武者、尙義、この戦で鉄砲班三つを受けて戦死す。時に四六才。
 働武者にして出陣、鉄砲で貫かれて戦死、時に三十九才。
 働武者にして鉄砲班、大刀班を受けて戦死、三十才なり。名を久成という。
 道寧、三九才なり。下仁田戦に加わり大砲キズを受け戦死。
 重愛、三十才、下仁田戦に参加し鉄砲班三、大刀班二つを受けて戦死。
 美国、二七才なり。下仁田戦で働き鉄砲きず四、槍きず一を受け戦死。
 高崎藩働武者、尙一という。下仁田戦に加わり鉄砲きず三を受け戦死す。僅かに十六才のうい陣である。

一八六四	元治一	二木千代之助	下条元理	高月鎗三郎	関根栄三郎	内山金之助	高橋栄七	竹内嘉平治	内藤勝之	本木勝從	齋藤鉄右衛門	山崎磯平	深田弥平治	落合伝助	河野岩之助	和田吉太郎	田上繁藏	亀 吉	二木助五郎	関口佐太七
------	-----	--------	------	-------	-------	-------	------	-------	------	------	--------	------	-------	------	-------	-------	------	-----	-------	-------

直忠、働武者として下仁田戦に鉄砲きず四、槍きず一つを受けて戦死、この時二十二才。
 藤原順信ともいう。高崎藩医師にして下仁田戦に従軍し大刀きずを受けた。三四才。
 高崎藩臣、昌房という。下仁田戦に加わり奮戦大刀きずを受けて生捕られたが敵陣中で死す。時に十九才。
 高崎藩徒士、春継という。十六才にして下仁田戦に加わり大刀きずを受ける。
 高崎藩徒士、久勝、下仁田戦に鉄砲きずを受ける二十八才。
 高崎藩徒士、温義という。五十七才で下仁田戦に鉄砲きず二カ所を受く。
 高崎藩徒士、下仁田戦で鉄砲、刀きずを受け生捕られた上死亡、時に五九才、勝包という。
 高崎藩働武者、下仁田戦争に加わり功あり、十有三人と共にのちに褒賞を受ける。戦死者は家搭三等を進め特に永世二口俵を受ける。
 同 右
 足軽目附なり。下仁田戦で鉄砲きず三カ所を受くる。朝直という五三才なり。
 足軽目附にしてこの戦いで鉄砲、刀きず各一つを受けて生捕られた上死す。この時四二才にして好勝という。
 足軽なり。この戦いに鉄砲きず二カ所を受けた。四五才。
 足軽、二九才なり。鉄砲きず三カ所を受けた。
 足軽、五二才にして出陣、鉄砲きず二カ所を受く。
 足軽、藤原清実ともいう、二四才。この戦で鉄砲きずを受けている。引あげ後放す。
 足軽、下仁田戦で鉄砲刀きずを受けて生捕られた上死す。五二才なり。
 中豊岡村・三五才、人夫として従軍している。
 高崎藩働武者にして下仁田戦に働き武田勢に生捕られた上斬らる、四八才。重直なり。
 高崎藩隠密なり。下仁田戦に武田勢に捕われた。田町の人で、この時四九才、生還す。

一八六四	元治一	小林 隣八	高崎宿で継業を営む。
〃	〃	楓庵 重樹	高崎の人、通称関根重兵衛、狂歌をよくす。この年五月五才で歿す。
〃	〃	寺田 宗武	高崎藩徒士頭、この年十月二十三日小船十三隻で那珂川(銚子領内)を渡り脱藩賊軍と戦い武勇を振う。
〃	〃	大西屋長右衛門	高崎宿・上竹、大鼓類を扱っていたこの頃の太鼓張替一分三朱で、この業明治時代は極めて隆盛で鎌倉町一帯がこの業を営んだ。(今の若松町)鎌倉町の太鼓並に竹皮ぞうり表はのちに関東の名物となる。
〃	〃	釜屋 五兵衛	江木新田・米穀を扱っていた。
〃	〃	中村 元良	山名の人、吾妻郡川原郡の産、同郡赤岩の湯本氏につき医学を修めた俊達を養子としている。元良も医師なり。俊達は下仁田戦に加わつて切腹している。
一八六五	慶応一	中山 誠一郎	岩鼻代官なり。この年十月任ぜらる。
〃	〃	木村 甲斐守	岩鼻代官となる。のち飛騨守となり関東郡代と改称さる。
〃	〃	平岡 越中守	この年十二月岩鼻代官となる。勘定奉行なり。
〃	〃	高井 大和守	旗本にして藤塚はその知行所なり。御用金の取立きびしく農民苦しむ。
〃	〃	沼賀 周次郎	藤塚村々吏にして門閥家として知らる。租税の高きに弟茂一郎と共に代官屋敷に陳情したためその用人伊藤利喜之進の悪計がばれ高井家の家政改革を行つたこと知らる。
〃	〃	大久保 俊斎	高崎の人、年二十八才、三殉士として知らる。
〃	〃	深井 資信	小頭武者なり。宮部等と共にこの年常野兩州の賊徒追討の功により銀二十枚時服三を賜わる。しかし明治元年士卒脱藩事件の責めで藩より謹慎を命ぜらる。この頃農民焼打事件各地に起る。
〃	〃	宮部 義虎	高崎藩士、深井に同じ常野戦の功を賞さる。のちに藩育英館を総括する。
〃	〃	高木 正国	

一八六五	慶応一	宮部 八三郎	高崎藩者頭 右に同じ。
〃	〃	島田 弥七郎	同
〃	〃	松井清左衛門	同
〃	〃	菅谷 叔清	留守居、同右、新兵式採用に際し反対し慶応二年十二月職を解かれ野火止に謹慎を命ぜらる。
〃	〃	津田 次幹	高崎藩武者奉行にしてこの年五月常野兩州の賊徒追討の功により幕府より銀五十枚時服三を賜わる。この頃にいたり高崎藩からも勤王をとなえて脱藩者続出す。高島流銃隊を組織されるに際し事を誤り三年七月役を免ぜられ謹慎を命ぜられる。
〃	〃	笠原 清吉	下大類・漢学習字の私塾を開く。
〃	〃	倉林 与一郎	下大類・読書習字の私塾を開く。
一八六六	慶応二	橋本 清七	赤坂町・塩問屋なり。この頃の塩問屋は高崎宿は四軒を限り許可され、大問屋は年三万俵以上を扱つた。
〃	〃	外山 半六	高崎藩、学校権大属、この頃藩校があり武道国学馬術遊泳鉄砲などを教ゆ。この時市川左近は大学寮一等教授兼履であつた。
〃	〃	内海 正夫	高崎藩学校大学寮一等教授なり。この頃教授は二十六人いた。
〃	〃	斎藤 小治郎	高崎藩小学寮二等教授で、天野昇治、築瀬官治等も二等教授であつた。
〃	〃	芦田 武彦	高崎藩学校軍務大属で武道関係を司る。武学大学寮一等教授に佐原十郎、大沢剣司がいた。
〃	〃	吉田 甚吉郎	高崎藩学校馬術教授、藤井国藏も同じ。
〃	〃	中野 蛻男	大沢亘と共に高崎藩学校兵学寮中教授、この頃の給与は年二十石から二十円前後である。
〃	〃	深尾 斧柄	山田勘三郎と共に高崎藩学校、軍務器械六井であつた。
〃	〃	高橋 九鱗	中紺屋町の人、俗称武平、書に妙なり。米門の高弟にしてこの年七月五九才で歿す。
〃	〃	左右 衛門	赤坂町・醸造家にしてその石高五〇〇石。

一八六六	慶応二	宗兵衛	九藏町・醸造家にしてその石高六七八石。
庄兵衛	相生町・同	五〇石。	
平吉	田町・同	三六九石。	
文吉	篠場・同	三六九石。	
藤藏	常盤町・同	三六〇石。外に嘉平治(下横町)	
	平八(九藏町)吉平(本町)七郎右衛門(九藏町)		
	又七(新町)四郎兵衛(田町)等がある。		
	上小島・この年私塾を開く。		
	上小嶋・右 同		
	犬類村南大類に読書、作法、武道の私塾を開く。		
	上並履・護国寺住職にして私塾を開く。		
	岩真村大字岩鼻に漢学、習字の私塾を開き明治初		
	年までつゞく。儒者にして能書家であった。		
	高崎藩在邑用人なり。この年浅井政和、津田弘な		
	どと高島流銃砲を伝習、これにより洋式銃砲の有		
	力なるを説く。		
	高崎藩臣にして高島流銃砲術を学び洋式訓練をは		
	じむ。明治二年五月二十三日議職(議長) 議郎を		
	置く。津田最高点で当選議職となる。のち戸長と		
	なり輪町に私学を起し針縫等子弟に教ゆ。		
	高崎藩砲術教授なり。砲術方調役兼銃術教授佐藤		
	鉄等と共に士卒に教授す。津田と共に議職補(副		
	議長)に当選する。遂に農兵を募る、これ強心隊		
	なり。のち浅井党に反対し対峙する。		
	高崎藩の洋式兵法に反対し士卒を煽動私党を結び		
	遂に数名と共に脱藩し江戸に向う。藩主より祿を		
	奪わる。江戸で同志と討議中同盟者長坂保三郎突		
	如狂いこれに斬らる。		
	江積と同盟者なり。東台山下に一味と集合中遂に		
	発狂し抜刀し江積並山田則明を負傷せしむ。この		
	ため脱藩者反省の上謝罪を乞う。		
	高崎藩医官なり。幕府陸軍三兵(歩、騎、砲)隊		
	の医員を命ぜらる。		
	高崎藩者頭兼徒士。この年六月秩父に暴徒起り千		
	二三百人野火止にも押しよす。内村兵一小隊をも		
	つて戦う。		
	高崎宿の元老なり。中島、関根等と共に御伝馬事		
	件の調停に入り名をあげる。		

上小嶋・この年私塾を開く。
北新波の満勝寺住職、宣信と共に私塾を開く。
高崎藩文学教授なり。文字校の創立を計画、この
年二月中邸に育英館を創建する。
高崎藩砲術方調役兼銃隊教授にして洋式訓練から
頭取となつたが既に齢古稀なり。
高崎藩臣、かつて昌平校舎長たりし人、育英館文
学教授となる。明治元年には桜井勝五郎等と脱藩
す。明治二年の議會制度に議郎(議員)に当選する
高崎藩留守居方物書、新兵法採用以求藩中の和せ
ざるを憂い出府の諸士を訪問し、和衷協同につと
める。
江積九十郎等軍政改革に際し党を結び家老貞順に
通す、これを人呼んで浅井党と称す。高崎藩同派
に別れて論争する。明治元年月番諸掛を解かれ謹
慎を命ぜらる。
高崎藩砲術方調役兼銃隊教授にして洋式訓練から
藩中不和を生ず。これを憂い同志と共に出府の上
諸士を訪問し和衷協同につとめたが、この事件で
吉田某等脱藩多し。
高崎藩士、高崎藩新兵式採用に反対し慶応二年十
二月家老田中正精と共に職を解かれ謹慎を命ぜら
れる。
高崎藩儒員にしてこの年文学校を中邸に創建され
たので文学助教になつた。喜十郎の長子なり。
高崎藩用人。この年文学校が出来たので、その総
括に任せられる。
右 同
高崎藩砲術方調役兼銃隊教授にして兵法改革の急
先鋒となり遂に浅井党を結成せしむ。
高崎の浪人、徳川幕府側の徴士で新徴組が結成さ
れ、その幹部となる。道中目附この時二十一才で
ある。のちに新徴組は勤王軍に投じた。
藤塚の人、新徴組に加わる。この時十五才。
小嶋村・邦泰といふ。劍持豫山の弟子となり。和
算を研究、同門人千余人のうち数回の試問に合格
した百三十名の内に入る。

一八六六	慶応二	山田 静澄	
一八六七	慶応三	長谷川子肇	
犬塚喜十郎		犬塚喜十郎	
大沼綱正		大沼綱正	
佐藤久敬		佐藤久敬	
浅井貞順		浅井貞順	
佐藤鉄		佐藤鉄	
内村宣之		内村宣之	
犬塚東次郎		犬塚東次郎	
堤精貴		堤精貴	
浅井政和		浅井政和	
深海三思郎		深海三思郎	
西恭助	慶応年間	西恭助	
佐々木三次郎		佐々木三次郎	
小島喜伝治		小島喜伝治	

上小嶋・この年私塾を開く。
北新波の満勝寺住職、宣信と共に私塾を開く。
高崎藩文学教授なり。文字校の創立を計画、この
年二月中邸に育英館を創建する。
高崎藩砲術方調役兼銃隊教授にして洋式訓練から
頭取となつたが既に齢古稀なり。
高崎藩臣、かつて昌平校舎長たりし人、育英館文
学教授となる。明治元年には桜井勝五郎等と脱藩
す。明治二年の議會制度に議郎(議員)に当選する
高崎藩留守居方物書、新兵法採用以求藩中の和せ
ざるを憂い出府の諸士を訪問し、和衷協同につと
める。
江積九十郎等軍政改革に際し党を結び家老貞順に
通す、これを人呼んで浅井党と称す。高崎藩同派
に別れて論争する。明治元年月番諸掛を解かれ謹
慎を命ぜらる。
高崎藩砲術方調役兼銃隊教授にして洋式訓練から
藩中不和を生ず。これを憂い同志と共に出府の上
諸士を訪問し和衷協同につとめたが、この事件で
吉田某等脱藩多し。
高崎藩士、高崎藩新兵式採用に反対し慶応二年十
二月家老田中正精と共に職を解かれ謹慎を命ぜら
れる。
高崎藩儒員にしてこの年文学校を中邸に創建され
たので文学助教になつた。喜十郎の長子なり。
高崎藩用人。この年文学校が出来たので、その総
括に任せられる。
右 同
高崎藩砲術方調役兼銃隊教授にして兵法改革の急
先鋒となり遂に浅井党を結成せしむ。
高崎の浪人、徳川幕府側の徴士で新徴組が結成さ
れ、その幹部となる。道中目附この時二十一才で
ある。のちに新徴組は勤王軍に投じた。
藤塚の人、新徴組に加わる。この時十五才。
小嶋村・邦泰といふ。劍持豫山の弟子となり。和
算を研究、同門人千余人のうち数回の試問に合格
した百三十名の内に入る。

一八六七	慶応 三	長井 寅吉	上大類・長井新四郎等と数名で講中をつくり、上大類の薬師牛塚に供養塔をたてた。
〃	〃	玉 阿 弥	慶存と共に九藏町大聖寺前に住む行者にして磬を打ち布施をもとめたので當時この付近を磬打町と称した。今は九藏町に併す。
一八六八	四	酒 井 氏 清水 元七	高崎藩主の夫人なり。この年球子をうむ。 本町・蠟燭屋なり。小栗上野介の家具を買った飛弾屋から味噌二樽を求めたところ、この中に巨額の二分判を発見した。これは上野介の所有していたものであると伝う。
〃	〃	岩崎 源太郎	本町三丁目の飛弾屋なり。小栗上野介の家より味噌數十樽を買取ったが、この中に無数の二分金が入っていたので巨利を得たと伝えられる。
〃	〃	小栗 上野介	忠順、徳川の臣、二千七百石をむ。横浜開港の恩人。政府に意見入れられず所領の群馬郡榎田村に仮居す。明治元年四月十五日高崎、吉井、安中三藩により烏川原にて斬らる四十二才なり。
〃	〃	小栗 忠道	小栗上野介の嗣子又一なり。この年高崎藩に捕われ鍛冶町の牢に投ぜられ、のち打首となる。
〃	〃	大野 八百之助	高崎藩郡奉行、小栗上野介忠順討伏のため三ノ倉に向いその兵器を引きとる。
〃	〃	山崎 四郎兵衛	高崎藩目附役、大野と同じ。
〃	〃	深井 順一郎	高崎藩臣、小栗忠順の嗣子又一忠道を護衛し高崎に引きあげる。景貞なり。
〃	〃	白井 伝藏	深井と同じ。
〃	〃	谷口 周道	高崎藩臣、又一を捕縛する。
〃	〃	堀江 藏太	又一縛されたまま斬られるに際し主命を受けたが、又一との真剣勝負ならば望むところなれど、縛り首を討つは武士の面目上なし得ないと主命を拒否する。
〃	〃	高島 弥正	この年春、岩鼻代官となる。
〃	〃	大首 龍太郎	名は厚竜、近紅国彦根藩の人にして京都で岩垣月州に学ぶ。小栗上野介主従六人を烏川河原で斬る岩鼻県最初の知事となり、この年岩鼻県庁を創設す。その嚴重県民を脅す。明治元年十二月七日官を罷ぜられ、大正元年東京で歿す六八。芝農を取締り斬首の刑に処したことで鬼代官の名残る。
〃	〃	藤田 栄親	高崎藩士、英学を修め、この年三年間横浜留学生

一八六八	慶応 四	浅井 貞祝	高崎藩番頭なり。この年將軍徳川慶喜政権奉還したので藩中混乱す。このためこの年十二月年寄を命ぜられ高崎ずめとなる。
〃	〃	根岸 忠藏	岩鼻・同代官につとめていた小若にして郡奉行猪狩茂右衛門の月番日誌の中に出て来る偽官軍がこの当時各所に横行し、これを処罪したもので軽いものは片髪を落して許している。

六、現 代

維新の大革は、徳川幕府が多年つちかつて来た勢力と制度とを根本よりくつがえし、王政復古調への道もまたけわしく混乱を示したが、年と共に政治も文化運動も軌道に乗せられて、新たな社会と常識とが生まれた。

門閥のみが社会の表面にあぐらをかいていたのが、氏もない土民も政治に参与出来る自由民権の開かれたとびらから、多くの偉材が生まれ高崎宿もやがて高崎市となり明るい文化が限らない力で進展した。矢島八郎、中島伊平、宮部翼、深井英五、須藤清七の如き偉人を始め、内村鑑三、村上鬼城の如き文化人も生んで商業都市はやがて工業への踏切りもつけたが、歴代の市政が極めて消極的であり過ぎたため後進都市に追い越される醜態を演じ人材もまたとほしきを憂いられたが、小島弘一、住谷啓三郎の如き積極性ある市長の出現に、封建の古い殻を破つて、より新しい文化が芽生えかけたのは喜ぶべきことである。それ故に高崎のより高い文化人の生まれるのは、今後に期待が持たれるわけである。

一八六八	明治 一	宮内 君浦	高崎藩臣にして銚子領に住す。この年高崎藩に藩政改革あり、文館総裁に挙げらる。和漢の学に通じ詩文をよくし子弟に教ゆ。明治三十三年七十五で歿す。銚子八幡神社境内にその頌徳碑残り。
〃	〃	牧野 再龍	鎮叟と号し越後国長岡城主牧野侯の遺胤刈羽郡中田村に生まれ吉祥寺学寮に入り学を修め高崎に來り龍広寺住職となる。のち箕輪の龍門寺に転ず。大首龍太郎はその教えを受く。のち前橋に出で塾を開く。明治二十二年十一月六日入寂。
〃	明治年間	深井 景員	高崎藩臣、直次郎という。十六才にして下仁田戦争に第二番手大砲方として従軍し父深井八之丞は第三番手の将、兄深井助太郎は第一番手勳武者にして十八才。この『下仁田戦争記』を明治四十三年十二月刊行している。明治二十三年高崎尋常小学

一八六八	明治一	桜井勝五郎	高崎藩の砲術教授なり。上村安邊等と共に四十二人仏式砲二門、銃若干を携えて脱藩、高崎隊と称し五月十五日上野の戦争に加わる。高勝隊とは即ちこれなり。砲術教授上村安邊もこれに加わる。のち逃れて謹慎を命ぜられる。
〃	〃	宮崎親通	高崎藩士、高崎隊に加わり上野寛永寺の戦いに慈眼堂の西、東台で戦死する。銃士なり。
〃	〃	串戸亀次郎	高崎藩銃手、高崎隊に加わつて上野で戦う。
〃	〃	加賀美為之助	右 同 吾妻橋上の戦いで負傷し高崎に逃る。
〃	〃	小室彰	岩鼻県知事、この年三月七日に就任し三年五月徳島藩大参事に転出したが、同村赤城神社を造営している。
〃	〃	須藤才次郎	大八木・花火師なり。江戸両国吉川町玉屋市郎兵衛の南京一流を伝え第八代目と称した。
〃	〃	小池和三郎	大八木・花火師なり。
〃	〃	湯浅駒太郎	下浜尻の人、伝法詞と称された親分的人物『浜尻和譜』を作つて和養の会をさかんにした。
〃	〃	高橋茂作	大八木・花火師なり。
〃	〃	田島儀平	大八木・花火師なり。
〃	〃	角田八左衛門	新町・問屋年寄であり、この頃も梶山、矢島、大谷等と共に伝馬役人として助郷に努力した。
〃	〃	設楽孫右衛門	田町の人、伝馬役人なり。
〃	〃	天田徹司	南大類・読書、習字の私塾を開く。
〃	〃	設楽七右衛門	上中居・漢学、語学を倉賀野義塾で授く。
〃	〃	新井三四郎	上大類・読書、習字の私塾を開く。
〃	〃	長井惣次郎	上大類・新井に同じ。
〃	〃	草名盛行	豊岡だるま、筆名形の創案者。
〃	〃	新井萬藏	宿大類・読書、習字の私塾を開く。
〃	〃	久保田五郎平	宿大類・読書、習字の私塾を開く。
〃	〃	梅山太喜哉	下小鳥・私塾を開く。明治十三年榛名山秣場戸長総代となる。
〃	〃	松平直克	前橋藩主、この年二月十六日 前橋近郷大久保村(現新里)より農民暴動起り遂に県下にひろがり農家を襲い家屋を破壊掠奪し、碓氷峠付近までひろがり、直克は上野全国の鎮撫を命ぜられ、高崎藩もこれに協力する。

一八六八	明治一	上原慶洲	上小鳩・同村大森院で私塾を開く。
〃	〃	西岡貢	乗附・家隆別当において読書、習字、珠算の私塾を開く。
〃	〃	山本得法	石原・清水寺で私塾を開く。
〃	〃	松田石淳	石原・明王寺で私塾を開く。
〃	〃	長尾義仙	寺尾・永福寺で私塾を開く。
〃	〃	湯浅善作	日高・漢学、習字の塾を開く。
〃	〃	高橋益雄	大八木・神楽寺において漢学、習字を教ゆ。
〃	〃	堤松碩	田町・玉の屋をもつて通号、筆道教授を業とし虚齊有雅と号す。明治初年に至る、小笠原礼法も教え和歌をよくす。
〃	〃	平松亮範	大八木・妙音寺において漢学、習字を教ゆ。
〃	〃	吉田吉平	小八木・子弟のため漢学、習字の私塾を開く。
〃	〃	榊原慈善	小八木・妙典寺において私塾をひらく。
〃	〃	福田周済	正観寺・私塾で教ゆ。
〃	〃	久保田心聴	正観寺・私塾を開いた。
〃	〃	おお谷	芸妓として初めて看板をあげる。お仲の長女である。高崎芸妓の第二号なり。
〃	〃	お清	お仲の次女で芸妓としてお米等と共に看板をあげる。
〃	〃	真塩克治	島田六平、林新作の三名で岩鼻川岸に船積問屋を慶応年中に新設して明治に入つても営業す。
〃	〃	土方景尉	高崎藩臣なり、郡奉行。榎本武陽軍艦八隻をもつて風災にあい高崎藩封内総州黒生浦に漂着したので脱藩と知らず救助し、幕府より罰せらる。しかし市川党二百名を降伏させる。
〃	〃	若原七郎兵衛	高崎藩目附、士卒脱藩事件の責任を負つて永蟄居を命ぜらる。
〃	〃	大河内清緝	高崎藩、人材登備により宮部八三郎等と共に大監察に昇進する。
〃	〃	浅井貞梨	高崎藩士、この年十一月廿五日奥州に転戦したが兵を率いて帰る。官軍に従い会津長岡を伐つ。明治十八年一月七日歿す。
〃	〃	岡登嘉藤治	高崎藩臣、会津合戦で他の三名と共に戦死する。豊岡に至り蘭医を開業する。オランダ語の原書を説み得。和漢の字にも通じ、のち国事を慨して自
〃	〃	原田英三	

一八六八	明治一	深井 仁子
一八六九	明治二	佐藤 三喜藏
〃	〃	小島 文治郎
〃	〃	高井 喜三郎
〃	〃	湯浅 己代吉
〃	〃	堀口 六左衛門
〃	〃	丸茂 元次郎
〃	〃	山田 勝弥
〃	〃	福田 子之七
〃	〃	小島 掃部次
〃	〃	大沢 富郎
〃	〃	関口 弥藏
〃	〃	木村 主馬吉
〃	〃	清水 徳次郎
〃	〃	秋山 孫四郎
〃	〃	馬場 安五郎
〃	〃	松田 作平
〃	〃	清水 元吉

刃する。
高崎藩臣、資治の三女、天保十二年二月二日生ま
る。長じて文を修め武を習う。勤王佐幕の論大い
に起るや仁子大義を唱う。この年国振学校を興し、
幼稚園も開く。三十有四年教育につとめ終身嫁せ
ず和歌を詠じ大正七年九月七七才で歿す。悪車夫
を田圃に投げ込んだ武勇伝あり。田島尋枝、尾高
々雅等に国学を学ぶ。
下中居・豊、高崎領の租税が官領より高率であるた
めこれが減税運動に乗り出し、村民大率して高崎
城に押しよせて訴えた五万石騒動の立役者にして
捕われて斬らる。大力をもつて近郷になる。この
時明治三年二月四日五二才。
上小橋・豊、五万石騒動で三喜藏と共に主催者と
なり捕われて明治三年九月七日死刑となる。
柴崎・豊、五万石騒動に活躍し江戸に直訴の途中
捕われて処刑を受ける。四十二才。三喜藏と共に
無縁堂で斬られた。
倉賀野宿小総代、五万石農民一きに加わつて捕わ
れ半死した。
下正六小総代、五万石騒動に加わつて八丈島に流
罪となつたが、明治十三年同島で死亡。
上中居の小総代、五万石騒動の一方の頭となり徒
罪十年。
上小橋・豊、小総代同右、徒罪十年。服役中病死五
十一才。幼名を秀成と称し山田幡鷹守の分家なり
正観寺 豊、小総代同右、徒罪三年。
中尾 豊、小総代同右、徒罪三年。
中泉 豊、小総代同右、〃 三年。
上佐野 豊、小総代同右、〃 二年六ヵ月。
下中居 豊、小総代同右、〃 二年六ヵ月。
上中居 豊、小総代同右、〃 二年六ヵ月。服役
中死亡す。
柴崎 豊、小総代同右、〃 二年。
和田多中豊、小総代同右、〃 二年。
佐野窪 豊、小総代同右、〃 二年。
上中居 豊、小総代五万石騒動に加わり捕えられ
て服役二年。

一八六九	明治二	堤 三郎
〃	〃	堤 清右衛門
〃	〃	小平 国太郎
〃	〃	菊地 笹太郎
〃	〃	武井 馬吉
〃	〃	笠原 清吉
〃	〃	長坂 八郎
〃	〃	服部 光権
〃	〃	大陽寺 順叔
〃	〃	長坂 弘訓
〃	〃	深井 八助
〃	〃	内田 諭
〃	〃	片柳 篤
〃	〃	永井 英順

上中居 豊、五万石騒動で服役二年。
上中居 豊、小総代同右、〃 二年。
飯塚 豊、小総代同右、〃 二年。
新波 豊、五万石騒動で服役二年。
楽間 豊、小総代同右、〃 二年。
下大類・慶応頃より漢文、習字の私塾を開く。明
治六年には学制頒布と共に下大類には井野川学校
が出来た。
文武学校の少参事、高崎藩の革新派にして時弊數
十カ条を挙げ藩知事に諍争し入れられず宮部襄と
共に去る。明治十二年有信社なる政治団体を起し
国会開設の請願書を出す。廿三年上毛之自由なる
新聞を発行す。廿五年十二月歿す。
高崎藩政務参謀にしてこの年執政の末席に列す。
のち権と称し深井助教の三子にして文政五年九月
生まる。諱は光権、字は巽行、夢水又雪鳥と号す。
五年戸長となり十六年すべてを捨てて彩管を弄し
自ら楽しむ。明治二十三年松下双鯉の図を画き皇
女常宮殿下に献す。二十八年一月九日七四才で卒
す。長谷川雪貫の門人にして維新後は群馬県五大
区長、西群馬片岡郡書記等をつとめた。詩は枳椇
窓に学び雪鳥と号した。
静岡藩士にして高崎藩参政格国益総裁となり月五
百両を賜わる。国益局を石上寺に置き、横浜に商
銀を開いて貿易を始めたが数万両を消費し雇を解
かる。
この年七月高崎藩在京執政として服部権等と共に
藩政改革、職制改新を議す。のち大参事となる。
士族なり。父藤弥の遺志により藩公に五千両を献
ず。曾祖父資尙以来節約を旨とし巨万を貯蓄した
のち幕府開成所の大学南校に外国語研究を命ぜら
る。
静岡藩士なり。この年高崎藩蘭式陸軍を仏式に改
めたのでその教官となる。
この年十一月石巻県権少属に任せられ翌年登米県
少属となつたが、のち本官を免ぜられる。
高崎藩はこの年五月二十三日議會制度とも見るべ
き議職(議長)議職補(副議長)議郎(議員)制

一八六九	明治二	大島 忠藏	をもうけ小姓以上をもつて投票させる。永井は議員に当選、議職は津田氏。
〃	〃	同 義郎に当選する。	
〃	〃	右 同	この時の議員当選者は十名なり。
〃	〃	右 同	
〃	〃	右 同	
〃	〃	長 秀則	高崎藩臣にしてのち張と改名。この年藩の医学校督学に任ぜられ、のち陸軍軍医となつた。この頃の医員は上中下の三等にわけた。
〃	〃	矢島 群芳	寛政十年に生まる。通称直記、諱は行善、字は仲恭、又煙壺百華、烏汀漁人等の号あり。南画を学び椿山の門に入る。寺尾に生まれ世々里正なり。本姓は一之井氏、大西奎齋に師事のち脱藩し四方に周遊す。明治二年七月十三日七十一才で歿す高崎藩臣にして文武に達す。
〃	〃	築瀬 忠方	藩の世臣忠固の二子なり、啓次、長じて官次で信齋と号す。漢学を修め橋芳子をめとる。勤王にくみし明治元年三月東山道総督府属となる。岩鼻県に出仕のち漢学塾福来社を興す。三十七年十二月十四日六九才で歿し長子藏六家をつぐ。
〃	〃	齋藤 義一	天保十三年江戸藩邸に生まる。若山宗吉、安井息軒に学び、この年藩文館起るや教授となる。明治六年五大区学校事務取締り、三十七年七月連合戸長、市制執行により助役、三十七年七月歿す六三。
〃	〃	吉田 和藏	根小屋・駒井真陰に協力、新田開墾して水田をつくる。
〃	〃	清水 定七	根小屋・この年水田開墾のため和藏と協力し、これより二十九年に至る長い間苦闘する。
〃	〃	長坂 六郎	高崎藩の年寄家老、城代、年寄の名称略されて何れも士族となる。このとき七百十九人なり。大参事となり、第一等正六位。
〃	〃	堤 赫雄	高崎藩大参事にして市政、民政、武学校を担当、第一等正六位なり。
〃	〃	長坂 鉄之助	高崎藩少参事、刑法、断獄を担当す。
〃	〃	遊佐六郎左衛門	同 権少参事、刑法、断獄を担当。
〃	〃	上村 乾	同 権少参事、軍務掛、第三等正七位。
〃	〃	深井繁之助	同 権少参事、文武督学を担当。
〃	〃	大島 享	同 権少参事、市政、民政を担当、第四等従七位

一八六九	明治二	小林 彦八	この年高崎藩議會開かれ選挙によつて議員(議員)に当選。
〃	〃	那須源一郎	通町・消防の制度設けられたのでこの仕事をする。即ちこの年十二月廿七日非常の時の仕事師世話役である。
〃	〃	橋本 庄平	鍛冶町・小林に同じ。
〃	〃	秤師 九一郎	九藏町・小林に同じ。この町では明和三年正月には初めて洋式ポンプを購入している。
〃	〃	井田 要七	この年産業資金と称し高崎藩が商人から献金させたが、百円を納めている。
〃	〃	嘉兵衛	右 同
〃	〃	須藤 権三	相生町・外六人と共同して一千円を献納している。
〃	〃	円定 和尙	高崎宿の総代、この時の総代は真下重平、川端三郎、矢島八郎、大谷五三治、関根作三郎の六名であつた。高崎藩主に対しこれ等が御用金を才覚して貸していた。明治五年陸運会社が生まれたので間屋年寄をやめる。
〃	〃	福田子之七	小八木・妙典寺住職、絵をよくかき子弟のために教ゆ。
〃	〃	箱田 儀四郎	正観寺・百姓、この時減税運動を起し総代となる。雄弁家にして高崎藩に捕われて徒罪、これが五万石騒動の口火となる。
〃	〃	八右衛門	浜尻・百姓、福田に協力減税運動を起す。
〃	〃	羽鳥 権平	宿大類・百姓、高崎藩に対し百姓を代表し減税の陳情を出した。福田、箱田等と行動を共にする。
〃	〃	久保田房次郎	宿大類・五万石騒動が起るや青年を代表して立ち民部省に出頭し農民の苦悩を訴える。弘化四年に生まれこの時二才。
〃	〃	伊賀我 何人	宿大類の青年、羽鳥と行動を共にする。この時二才。

宮部義虎の弟で家老の子として生まれ辰之丞の養子となる。自由黨員として活躍した新人。のち『群馬新誌』の記者となつた。この新聞界下のトップを切つて発刊されたもの。明治十二年には高崎で有信社を結成自由民権運動に乗り出し十七年の陣

一八七〇	明治三	井野喜源太	場力原騒動にも加わる。長野・名主なり、この時白川に水害あり栗間に百有余の囚徒を取容し工事を起しその監督となる。安中賦士族、この年家祿十三石をつぐ。明治十九年十二月八日中豊岡外二カ村の戸長となり、二十二年町村制実施で退く。伊勢崎の生糸商小暮久兵衛の番頭であるが、高崎へ生糸取引に各市に出張し、当時その荷を倉賀野から船で横浜へ送っている。
〃	〃	清水信吉	この年高崎駅御伝馬所に通商司三会社頭取開拓使御用達を願出る。倉賀野まで高崎宿から馬一匹二貫式百五十文である。
〃	〃	林源次郎	吉村と同様なり。
〃	〃	吉村甚兵衛	高崎士族にして高崎東京間速達郵便の馬車会社を計企出願した。これが機で郵便馬車会社中牛馬会社が設立され明治十七年まで続く。
〃	〃	西村仁三郎	俳人、櫻州庵半海は可布庵逸淵に学び各地を遊学したが高崎の駅に居を定む。のち伊勢崎に移つたが『ゆくとし集』はその追悼俳句集で明治十八年五月刊行された。
〃	〃	小林伊麻里	高崎藩臣、守衛の子なり。江積九十郎と相はかり浅井党の闘士なり。藩のいかりにふれ祿を奪われ永く謹慎を命ぜられる。
〃	〃	羽島半海	高崎藩士族にして脱藩者なり。横浜への進出をはかり、高崎との商人の間に入り利益をはかつたが損失、その責任を問われ服部権と共に四十有人蟄居或は謹慎を命ぜられる。
〃	〃	谷口忠之助	静岡藩士であつたが、この年八月高崎藩に招かれ英学教員となり、槍物町に出来た仮英学校に士族五十人を集めた。内村鑑三もその教えを受けた。
〃	〃	松田順時	高崎藩士族、英学大助教に任ぜられ藩費をもつて横浜に遊学研究した。のち銚子に私塾勤敬舎を開く。
〃	〃	作楽戸痴鶯	高崎藩家扶に過ぎなかつたが門閥登備の因襲を破つてこの年政務権大属試験に任ぜられる。明治二年義郎(議員)に当選する。
〃	〃	藤田栄親	大監察なり。天野と同じく政務権大属試験に栄進
〃	〃	天野猪十郎	高崎藩第二等従六位権大参事なり。
〃	〃	吉田肇	
〃	〃	大野千楯	

一八七〇	明治三	宮部襄	高崎藩士族、この年十二月長坂忠厚、原田種、山崎精一等と藩政改革輝剛をして藩知事にせんと出府運動して捕われ石上寺に幽閉さる。通称八太郎学を安井息軒に受く。文武館総裁兼大監察となる下仁田戦にも功あり。維新後は前橋警察署長となつたが政治を好み明治十二年有信社を結成して社長となり、国会開設運動に乗り出し自由党に入る。明治廿三年『上毛の自由』という新聞発行。不平分子松井田分署を襲う事件あり、この黒幕と見られて投獄されたことあり。念願の代議士となつたが後半沈黙大正十二年九月九日七七才で歿す。宮部の父は忍、妻は卓爾の自家の娘はつで、入獄中紡績女工をして働いた。
〃	〃	菅谷団次郎	高崎藩、この年第二等権大参事なり。
〃	〃	長尾潜	同 第三等正七位少参事なり。
〃	〃	谷口守衛	長尾に同じ。
〃	〃	深井小一郎	高崎藩士、北越領内にあり権総裁として任ぜらる高崎藩臣、宮部襄等五人と共に藩政の革新を叫び今回の行政は大参事等の独断にして藩主の意に反すと参議副島種臣に訴える。捕えられて石上寺に閉居されたが御家事件として知らる。
〃	〃	長坂忠厚	祖先は安藤氏に仕えた、唐沢年貢で有名。所右衛門は測量家にしてこの年五月五日歿す。
〃	〃	唐沢所右衛門	高崎藩権少参事、この年の藩改革により市政局を廃し民政局となり民政総務となる。毎月十日十二日に二の丸公廠において願訴訟事件を取扱つた。正郎は明治二年の議会制度に際し議員(議員)に当選している。
〃	〃	長坂正郎	この年民政大属となる。
〃	〃	島崎儀平	この年民政権大属となる。
〃	〃	榎原軍藏	権原に同じ。
〃	〃	白井左右平	民政権少属となる。権少属以下は町方の訴えを取扱つた。
〃	〃	富田又五郎	右 同
〃	〃	片柳善哉	第四等従七位大属となり東京詰となる。
〃	〃	横浜恕	大属となり北越詰となる。
〃	〃	三上真一郎	大属となり東京詰となる。
〃	〃	松本一純	大属となり銚子詰となる。
〃	〃	菅谷甲子雄	

一八七〇	明治三	神保謙	第四等大属となる。
〃	〃	中沢一錫	右 同
〃	〃	中島錫胤	岩鼻県知事にこの年八月二日任ぜられ四年一月十日に免ぜらる。
〃	〃	反町慎哉	柳川町・金貸業、この年区長制度なり高崎は三十区に分ち選挙する。反町は第一区長なり。明治三十三年最初の市議戦に当選三期続いて当選、また商業会議所の副会頭にもなる。
〃	〃	木戸又三郎	第二区長なり。この時の区長にして今に子孫残るは第六区西沢安兵衛、第七区山田栄五郎、第八区巖山政右衛門、第十六区落合庄平、第廿五区平野彦八等なり。
〃	〃	梅山太平	下小島・名主、五万石騒動の調停に入り時局の収拾に乗り出す。各村の名主によびかける。この家に今高崎城の乾櫓が残る。
〃	〃	須藤善二郎	下仁田戦争の生残りの勇士、この年大八木妙典寺前に現われた熊狩りに出動、大熊に顔面を突き裂かれる。熊は村民が退治したが、ここに『先玉尊靈』の熊の墓残り。
〃	〃	馬場南山 藤守喜太郎	諱は昇、若水の男なり。詩書をよくす。田町の人、興行に興味をもち庶民的な仕事をしてゐる。この年二月人力車二輛を購入し営業を始める。またこの年五月大八車（今の荷車）営業を始め高崎倉賀野間を往復していた。明治十三年には藤守座を建設のち新紺屋に移った。（今の松竹座なり）また徒刑人を民間事業に人足として貸与するのでその業をなし日々百文を人夫賃として出した。
一八七二	四	大谷五三次	高崎田町の人、年寄三右衛門の子にして問屋場がこの年改められ相對繼所となり、本町梶山、新町矢島、田町大谷の三カ町となる。田町の発展に寄与した。
〃	〃	青山貞	この年一月十五日岩鼻県知事に任ぜらる。十一月には権令尋進令となり、五年十一月免ぜらる。
〃	〃	安岡良亮	高崎県この年置かれたが、知事の任命なく大参事安岡が執務す。この年十月権参事に改めらる従六

一八七二	明治四	楫取素彦	この年十月岩鼻、前橋、高崎、沼田、安中、伊勢崎、小幡、七日市の八県を廢し群馬県を置く。初代県令となり、明治十七年元老院議員に榮転、同四十五年八月八十四才で歿す。長州藩毛利侯の家臣なり。
〃	〃	藤巻喜平	本町・高崎藩御用達にして呉服商人なり。明治四年には大阪で造幣廠が出来て、金銀貨等を製造し藩札と交換したので、その仕事を手伝った。
〃	〃	小沢宗平	九藏町・業種商にして、明治二十八年には商業会議所開設の運動を起し農商大臣榎本武揚に陳情した。当時高崎での資産家として知らる。
〃	〃	久保村徳次郎	連雀町・明治二十五年頃には洋服裁縫業の看板をかかげ当時の新職業でありこの頃から洋服が一部に用いられた。
〃	〃	吉田莊八	田町・和泉屋油ろうそく店主、初代莊八の子なりこの年山本亀吉、五十嵐儀平、滝川喜平、桜井伊太郎、中島伊平等と出資して烏川に常橋を架橋する。のちの君が代橋なり。
〃	〃	藤田栄親	高崎藩が作楽戸痴鶯の任を解いたあと大助教に任ぜられ、横浜で英人につき英学を習得す。のち銚子に私塾を開き明治六、七年頃廃校となる。
〃	〃	長谷川栄助	鞆町・魚商であつたが、明治十五年頃より牛肉業をはじめたが、高崎では最初である。
〃	〃	小沢吉平	田町・染絹卸商、高崎絹をあつかつた問屋であるその男吉平は大正六年市会議員、会議所常議員となつた実業家。
〃	〃	島村二兵衛	高崎の飛脚問屋島屋と京屋とがこの年四月合併して明治五年には陸運元会社となる。内国通運会社の前身なり。
〃	〃	東屋定七郎	五万石騒動に際し丸茂、山田等に軍資金を用立てたので処罪さる。
〃	〃	豊島	高崎藩士族、藩卒郎に芸妓がしきりに出入りするので掛捨無忌と芸妓の出入を禁止されていたが、この年幼女に三枝を弄させたと譴責される。この年女髮結の卒郎に出入の禁止令を出す。

一八七二	五	中村 尙武	尾崎 行正	森 弥
〃	〃	前島 密	清水 寅	田中 祭八
〃	〃	安間 吉晴	尾崎 行雄	連川 儀平次
〃	〃	西岡 半九郎	島屋 吉三郎	根岸 紋吉
〃	〃	清水 重礼	内村 鑑三	

一八七二 五 中村 尙武 尾崎 行正 森 弥
五万石騒動に第二陣の人々に軍資金を貸して処罪される。

尾崎行雄の父なり。この年十一月群馬県十等出仕となり高崎にあり。行雄も高崎で初等教育をうけ憲政の父として知らる。

歩兵少佐にして信州上田より第九大隊を高崎城内に移し隊長となる。これが高崎十五連隊の始めなり。この年六月一日なり。

男爵、東京から高崎まで郵便馬車の開通を計画、日本の道中馬車の元祖で高崎町民からこの時感謝状を受く。高崎東京間二日間を要し両三分、熊谷宿で昼食がついていた。

本町二丁目裏へ東京から芸妓を雇入れ、芸妓屋の看板を初めてかかげる。

柳川町を開発し、初めこのところは茅原で柳があつたので柳町とよんで白首屋この頃から始まる。高崎郵便役所取扱いをこの年三月に新町の同家方に開始。土族でこの時年手当米十口、筆墨料一円を下賜されていた。

この時十四才、高崎の学校で学びこの時一緒に大河内輝剛や宮部襄、内村鑑三もいた。

高崎宿の第五大区戸長なり。群馬県庁が前橋に移されたので、この年役人総代としてこれが奮選の歎願書を出して運動したため県庁は高崎に移る。

田町の人、藤守喜太郎と協力し、この年九月沼貫川岸の下流に倉賀野川岸出張を設け旧大築寺建家を買取り東京船積渡世をはじむ。明治七年には高崎駅に積穀会社を設け米穀の定期をはじむ。

大類村柴崎に漢文習字の私塾を開く。高崎宿に五軒あつた飛脚屋からこの年三月権利を譲り受け、日々脚夫を県庁に出し各町村へ公文書の配達する業を始めた。

郵便役所が高崎に初めて置かれ、新町七八安間方に役所が設けられたが、初代所長となる。

文久元年三月二十三日江戸に生まる。父は謹之丞で高崎藩の家老、この年十二才で英学塾に入りのち東京外国語学校で学ぶ。札幌農学校時代にキリスト教徒となり抜群の成績で卒業。二十四才でア

一八七三	明治 六	峰岸 四郎	吉井 兵藏	柄沢 大吉	入沢 恭平	加藤 義質	山崎 多三郎	久下 元次郎	青木 半平	沼賀 茂平	国峯 松五郎	広瀬 和太郎	桜井 伝造	柴田 源藏	林弥五左衛門	外処 清一郎	木暮 兵内	島方 宗十	中村 五平	藤井 輪藏	高木 源太郎	梅若 啓太郎
------	------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	--------	-------	-------	--------	--------	-------	-------	--------	--------	-------	-------	-------	-------	--------	--------

一八七三 明治 六 峰岸 四郎 吉井 兵藏 柄沢 大吉 入沢 恭平 加藤 義質 山崎 多三郎 久下 元次郎 青木 半平 沼賀 茂平 国峯 松五郎 広瀬 和太郎 桜井 伝造 柴田 源藏 林弥五左衛門 外処 清一郎 木暮 兵内 島方 宗十 中村 五平 藤井 輪藏 高木 源太郎 梅若 啓太郎
メリカのアマスト大学に入る。帰京後『後世への最大遺物』その他を著す。特に日露戦争前に『戦争停止論』を出して問題となり、革命的叛逆者として知らる。萬朝報記者、第一高等学校囑託、昭和五年三月廿八日七〇才で歿す。

中豊岡・農、名主、この年小區長となる。下豊岡・農、名主。

八幡・農、名主。医官なり。この年五月新潟第八大隊が高崎に移転と共に赴任、高崎衛戍病院長となる。旧城主の邸内にあつた。

旧文武館に学校を開設し一三〇人を收容した。のち大信寺に移り教育者として知らる。檜物町の人、この人が寄留人となり越後屋源平に十四才になる娘を奉公せしめた証文が残されているが、三九年奉公して給金が金四両であつた。

劍崎・農、名主。右に同じ。

藤塚・農、名主。鼻高・右同 下大島・右同 町屋・右同 金井淵・右同 若田・右同

上豊岡・農、維新前より引続き組頭、名主にしてこの年烏川架橋の賃金毎年三百余円あがるのを基として小学校を創立した。明治廿一年三月五八才で死去。

中豊岡・戸長、小学校建設に清一郎に協力する。明治十五年九月六十六才で歿す。

下豊岡・戸長、小学校建設に協力する。明治十五年九月十六才で死亡。

日高・日高小学校をたてる。

中尾・中尾小学校をたてる。

下小島・小島小学校をたてる。

宝生流の謡曲家、矢島八郎に招かれて高崎に稽古所を作り指導。山名八幡、清水寺、安国寺等に舞台を設け謡曲大会を奉納した。高崎一六会はその

一八七三	明治六	相川 定七	本町二丁目裏に清水貢についで芸妓屋を出し小春、小染、小せい、信吉、おかるなどの芸妓とともにこの宿にも四十名に増えた。
〃	〃	岡田 孫六	本町の住人、当時九一才、新町と新田町との界に寿橋をかける。
一八七四	七	深井 卓爾	明治十五年自由堂創立以来長坂等と活躍、法にふれ入獄十余年。高崎藩臣で自由民権論者として知られ、深井寛八の弟。明治三十六年七月二日死亡。この頃自由民権運動が極めてさかんとなり、高崎藩臣が中心となつて注目される。
〃	〃	新井 政七	中島伊平西岡半九郎等町役人と共に明治八年十月四日北第五大区長を通じ、裁判所並本県支庁設置陳情を出し却下される。
〃	〃	八木 八平	上小埜・埜小学校をたてる。
〃	〃	山泉 栄吉	中豊岡・村戸長なり。明治十一年三月退く。四十一年三月六十七才で死亡。
〃	〃	松村 九平	この年第三小区副戸長となる。
〃	〃	高橋 利太郎	太政官布告により明治五年学制令が発せられ乗附小学校が設けられ初代校長となる。この時の生徒男三五、女一二。
〃	〃	桜井 重次郎	石原小学校長となる。男四二、女六八。
〃	〃	堀米 菅四郎	衣沢小学校校長、寺尾にあり。男三一、女五。
〃	〃	塚越 源八	飯塚小学校長。男四九、女七。
〃	〃	吉井 権八	中居小学校長で上中居にあり。男四六、女二。
〃	〃	高木 源太郎	小鳥小学校、下小鳥にあり。男五〇、女は居なかつた。
明治年間		峰岸 文茂	小鳥・震新流柔道の師にして真下松五郎文信の弟子なり。文茂幼名弥三郎と称す。侠勇あり諸国を遊歴し修業、門弟四百人に達す。晩年明を失いその術を養子孫三郎文郷に伝う。
〃	〃	小林 頼	この年豊岡小学校が第一大学区三十四番小学校として創立、教師となる。生徒八十人毎月十二匁五厘の授業料をとつた。
〃	〃	鈴木 泰造	大橋町・米穀商、小栗上野介の崇拜者にしてその歿後供養をしている。
〃	〃	川合 寧寿	陳斎の子にして書をよくしこの年歿す。

一八七四	明治七	石田 兵吉	本町三丁目・乾魚商旋屋なり。田町に居たが飛弾屋が小栗上野介遺品を買つて致落したので法華宗を信仰し、小栗上野介が夢枕にたち、以来その靈を祭つた。
〃	〃	根岸 知義	高崎藩の囚獄から刑務署となつたのは明治六年十二月でこの人、最初の署長なり。
〃	〃	中村 尙武	歩兵中佐、歩兵十五連隊は旧高崎城内に明治五年第三連隊分営としてマターし、初代の連隊長となる。明治十一年三月病気で退職。
〃	〃	中原 幹也	田中殿郎、中村正富と共に高崎から熊谷町の暢発学校に入校し業を卒え、県下有数の初等教育者となる。
〃	〃	小泉 敬夫	嘉多町・覚法寺に寺小屋を開き一〇〇人を収容。九年十月玉田寺に移る。有信社の発起人。
〃	〃	山崎 覚太	四ッ屋町・この年五月旧山崎藝に私塾を開き百余人に教ゆ。
〃	〃	三浦 寛常	下横町・向雲寺内に私塾を開く。
〃	〃	原 信事	九藏町大雲寺に私塾を開き百人を収容。
〃	〃	吉田 肇	赤坂町・長松寺に私塾を開く。
〃	〃	新井 洪興	下大類・福田寺の住職なり。私塾を開く。
〃	〃	おちやら	この頃の高崎の芸者で辰巳張りであり、素足で冬は友仙のねんねこを羽織つて料亭へ出入りした。
〃	〃	おたに 春	同右、この頃高崎の芸妓四十名となる。
〃	〃	小林 俊太郎	こく屋の芸妓で沢次という妹と半玉時代から共に稼いだ。酒のくだり二合が料亭で四匁であつた。
一八七五	八	山内 良平	田町・中山堂文房具店主で、文房具店を出したトツプである。
〃	〃	大橋 文治	この年倉賀野七等郵便取扱いを申しつけられた。区制が実施され服部権が第五大区戸長となつたとき助けて副戸長となる。
〃	〃	田島 元七	大橋に同じ。
〃	〃	佐藤 友濟	この年十月乗附村字蛇場見、官有地三千坪を借受けて石炭開坑をはじめなり。高崎亜炭の祖なり。石炭を燃したのもはじめなり。乗附の戸長なり。
〃	〃	山本 京兵衛	この年十二月十三日寺尾村字岩の下民有地七百五十坪と館左近屋敷五〇〇坪を借りて田島同様亜炭の発掘をはじめなり。明治初年に私塾も開く。この年第三小区戸長となる。

一八七八	明治二一	岡田 定五郎	諱を冠道、嘉永二年六月九日長野村に生まる。安中藩の荒木流根岸松齡の門に入り更に北辰一刀流千葉道三郎の門に学ぶ。英隆館を開く。この頃撃剣芝居が流行し正田嘉七郎、大友武八郎等と一団を組織し各地を興行した。明治二十八年四月十六日四七で歿す。
〃	〃	天野 宗忠	昇次、父は康基、その二子。弘化二年五月廿四日三の丸藩邸に生まる。百石をつぎ、群書をあさりよむ。算数を得意とし、のち政治経済を修む。慶応三年藩の大事に宮部と行動を共にす。この年初めて町会開かれて議長に推される。県会議員にも当選、二十三年議長、二十五年には町長となり、明治三十三年市会議長ともなる。大正六年五月十六日七三才で死亡。
一八七九	〃	住谷 明宣	高崎の歌人、この年『類題芳風集』二冊を輯す。尾高高雅が撰をする。
〃	〃	飯野 桂三	上豊岡外二カ村の戸長、祖先は高崎城主より三人扶持を貰っていた。四十二年九月五十五才で歿す。
〃	〃	黒石 磯吉	柴崎・黒石学校で漢文習字を授く。周寿の親類か。この年四月初めて県会開かれ、片岡郡から選ばれて県議員に当選する。二十年には鍛冶町に英語専修学校をたて、男女九〇人に教ゆ。
〃	〃	那須 禎太郎	この年初めて町会開かれ四十二人の町会議員が選ばれたとき本町から当選。ろうそく問屋、のち市会議員に当選している。
〃	〃	桜井 仙次郎	中紺屋町・地主、町会議員に当選。
〃	〃	木戸 又三郎	元紺屋町・味噌製造業、同右。この家、旧家にして今にその子孫のこる。即ちこうじやなり。
〃	〃	飯島 藤平	この年元紺屋町に濯米舎を起し漢学を教ゆ。二カ年修業で特に農村青年が多く通つた。大正八年十二月には学制変更をしている。
〃	〃	築瀬 藏六	片岡郡寺尾より那須と共に最初の県議員に当選する。この時の有権者は地租五円以上おさめ二十五才であつた。堀米はかの露娼運動に加わり建議書に署名している。
〃	〃	堀米 管四郎	

一八七九	明治二二	沼賀 佐一郎	碓氷郡から出馬して県議員になる。
〃	〃	木呂子 退藏	この年四月宮部を社長として有信社を結成し新井と共に幹部となる。清水永三郎等十四郡、有志八、九八〇人を代表し『国会の開設を願望し奉るの書』を提出している。
〃	〃	新井 毫齋	片岡郡から出て県議員となる。
〃	〃	松本 左伝治	新高尾・この年県議員となる。
〃	〃	津久井 玉一郎	乗附から当選している県議員。この年露娼運動が起り県会にその請願書を出している。露娼運動の先駆である。
一八八〇	一三	山田 米太郎	榛名山東南中腹にある中野秣場の権利につき従来この八十二カ村が二分して争つた。札下六十三カ村が同盟し松之沢組と争つたとき活躍者として秣場総代となる。菊地の農民なり。
〃	〃	藤巻 倉次郎	下小碓・秣場戸長総代。
〃	〃	根岸 惣平	岩鼻・県議会制度なり県議に当選す。農業。
〃	〃	五十嵐 勘衛	中尾・秣場戸長総代なり。
〃	〃	高橋 信吉	浜尻・同
〃	〃	箱田 四郎	警察業務は明治五年六月より始められたが高崎警察署と改められたのはこの年で最初の署長なり。
〃	〃	斎 藤 学	九藏町出身、文政十年生まる。父惣七の長男で幼名惣次郎、大黒屋の主なり。既に横浜にあり茂木銀行を起し彌取引所を設け沼賀茂一郎とも交わりあり、外人と取引をはじめた。学校設立、生糸貿易、海防等に貢献したので二〇年黄綬褒章を授与されている。二十七年八月六九で歿す。
〃	〃	茂木 惣兵衛	岩鼻の人、吉井藩に仕えて藩医なり。のち東京に出で浅草に開業、鏡川堂と称した。名は一貞、字知郷、この年『虎烈刺病征討論』を著わす。嗣子小田耕作が出版したもので、その歿後である。
〃	〃	小田 東壑	この年十月二日役所を二カ所に置き南郡戸長となり二十一年三月退いている。役場は安国寺に置く。北部は成田山。有信社の発起人でもある。
一八八一	一四	原 田 種	文久二年一月五日高崎に生まる。青年時代横浜の野沢屋において生糸販売業を研究、前橋・竹内勝藏氏の入婿となり才川町に製糸竜典社を起す。明治十九年十月十七日八十二才で歿す。
〃	明治年間	竹内 清次郎	

一八八一	明治一四	松本勘十郎	倉賀野の人、天保二年生まる。十三才にして三井呉服店に入り三井銀行に移り、この年倉賀野駅戸長となる。三十一年歿するまでつゞく。
〃	明治年間	土屋老平	石文とも称す。武居世平の次子にして名は甫三郎土屋をつぐ。橋本直香を慕い和歌文章を学び郷土史研究家なり。『高崎旧事記』片岡郡誌倉賀野誌の著あり。二十年十月十九日歿す四七才。
〃	〃	鎌原軍藏	この年二月、正式に群馬県庁は前橋に移す布告出さる。七月廿九日をトップに伊賀我何人等と共に高崎返還の願書を出す。
〃	〃	豊島貞造	竜見町・県庁奪還運動に町民三千人をかり出し先達となりさわぐ。
〃	〃	大沢安次郎	宮元町・この事件に加わる。尙、中島福高はこの運動資金、一千円を寄附した。
〃	〃	深井寛八	柳川町・この運動に加わる。三三年六月には高崎の助役となり三十九年六月退職している。諱は貞昌、資教の長男、嘉永四年四月生まる。高崎藩家老の家柄。明治六年租税寮より富岡製糸場に伝習生申付けらる。(父は二十五石を領す) 昭和十五年二月歿す九〇才。
〃	明治一四	深井卓治	藩臣寛八の弟なり。寛八と共に県庁奪還運動に加わる。十五年には自由党創立以来政治に尽瘁し宮部等と共に法にふれ入獄すること十有年、三十六年七月二日卒す。
〃	〃	竹貫登代多	柳川町にこの年六月精理学塾を起し数学を教える。
〃	〃	池田章政	東京府華族なり。この年六月日本鉄道会社を創立し東京高崎間の鉄道敷設を計画、十七年五月工事終る。開通当時の社長は曾我祐準なり。我が国私設鉄道の始めにして即ち今の国鉄なり。
一八八二	明治一五	飯野吉三郎	上豊岡・安政五年九月一日生まる。この年十一月中豊岡外二カ村連合村会議員となり四度議員となる。二十九年には碓氷郡会議員に当選四十年にも再選される。
〃	〃	大河内輝耕	高崎藩主大河内輝声の子なり。この年父の死により家督相続し子爵を授けられ貴族院議員に直選せ

一八八二	明治一五	岡田謙吾	られ従三位勲三等に叙せらる。明治十三年十一月生まる。東大法科を出で大蔵省に入り東京地方専売局長となる。夫人国子は徳川公の令嬢なり。大正十三年貴族院議員となる。
〃	〃	榑島周爾	県議会半数の改選により片岡郡から出馬して当選以来五回県議となる。なお二十二年には二級から出て高崎の議員、市制施行後も三十三年三十六年と市議に当選、三十六年には議長となつた。安政元年六月十六日生まる。實名海雲に学ぶ。高崎水道建設につくし市税務課長ともなつた。昭和五年一月七六で歿す。
一八八三	〃	荒木茂里	前橋藩士なり。この年十一月官選により中豊岡外二カ村連合戸長を命ぜられ十九年十二月退く。
〃	〃	小見今五郎	この年六月宮元町に明治義塾を開き漢学、数学を教ゆ。
〃	〃	清水元造	下小島・永七の長男、孝心深く明治七年祖母中風症となり孝養につとめこの年孝子として知事表彰。
〃	〃	桂野安次郎	柳川町にこの年十月猶興学館をおこし英語、漢学を教ゆ。
〃	〃	佐藤善一郎	本県警部にして高崎署勤務中、この年十月下秩父郡に暴徒蜂起しこれを鎮圧にゆき五十余名と戦つて死す。山口県人なり。
〃	〃	森田一作	この年県会議員六六名の改選に西群馬郡より出馬して当選、片岡郡から山田米太郎当選。
〃	〃	島田音七	〃
〃	〃	中里金八	〃
〃	〃	青籟	〃
〃	〃	岡田源兵衛	羅漢町の人、山田町・堀川氏の養子となり画人となる。松本凌波の教えを受く。のち南町桜井三左衛門の養子ともなり、この年歿す。
〃	〃	反町覚弥	日本鉄道会社の軌道が高崎まで開通に際し矢島八郎、井上平次郎、田中喜平司、志村藤平、小熊善吉等と協力し中山道から駅までの道路を寄付した。今の矢島町なり。岡田は新町の人、料理店主。今の岡源の先祖なり。
〃	明治年間	反町覚弥	製糸業、この頃組合製糸を起し高崎田町にその事務所を置いて活躍している。当時はまだ座くり製糸であつた。明治十三年共立製糸会社を経営。そ

一八八四	明治一七	深井小五郎	の年上毛爾系改良会社創立に調印し、井上参議、大隅大藏卿に陳情、成立と共に取締役となる。西群馬郡より県会議員に当選する。
〃	〃	曾我祐準	教育者なり。この年堤辰二、小林岳二等と共に西群馬郡片岡教育会を創立する。のちに群馬郡教育会となる。明治三十九年十二月高崎市と分離したもの。
〃	〃	山田大衛	日本鉄道会社々長なり。この年五月高崎東京間鉄道敷設工事を終り、六月廿五日開通し明治天皇高崎まで乗車する。
一八八五	一八	広瀬元一郎	中島福高の辞任後戸長となり、更に郡書記もし地方自治に参与した。三十六年には市議、二十七年には高崎消防組頭となりこの年発足、二十八年四月には十五連隊内で初演習した。
〃	〃	高橋鉄五郎	藤塚の藤井造酒丸の長男にして広瀬嘉一郎の養子となる。温厚にして孝心深く養祖父金藏中風症となるやよく看護し汚物の洗濯までし、この年七月知事より孝子として表彰さる。
〃	〃	大橋花	本町・この年三月群馬明進学校を設け簿記学を教ゆ。七カ月卒業なり。
〃	〃	江積々善	柳川町にこの年十二月英語学校を設ける。
〃	〃	中山惣平	源四郎、学習堂と号す。藩の儒臣であつた。本姓は黒田氏、幼より学を好む。刻苦勉勵夜枕につかざること七年、経史に通ず。藩校遊芸館の教職にあること三十五年間にして明治二十八年七月十二日八十二才で卒す。高崎神社にその碑あり。天保六年に学習館を開き千人の子女を教ゆ。
〃	〃	古川氏潔	住吉町・田村屋という紅染紺屋なり。この年三月一日同家より出火二七五戸を焼失。熊野神社(高崎神社)もこの時焼けこれを田村屋火事という。
一八八六	一九	長谷川長愛	この年六月第三大隊分隊が歩兵十五連隊となり最初の連隊長となる。歩兵中佐、九月末に仙台鎮台衛戍司令官で転出。
〃	〃	滝田資利	竜見町・この年三月寒香義塾をおこす。皇漢学、詩文を授く。久保田房次郎も通町にこの年高崎法学校をたて三カ年修行により法律学を教ゆ。この年八月豊岡村に三省舎をたて皇漢学を授く。

一八八六	明治一九	堤きよ	門人五十人なり。四カ年で修業。この年十二月西群馬高崎第一尋常小学校内に幼稚園が設けられ初代主任となつた。
一八八七	二〇	西岡勘五郎	安政五年一月二十三日生まる。田町の生絹商なり。この年私設電話を設置した先覚者。のち明治三十三年市議にも当選四期をつとむ。昭和三年七十才で歿す。
〃	〃	松下政右衛門	浜川・弘化二年十二月二十日生まる。養蚕指導者なり。この年西群馬片岡蚕糸業組合事務所の招きで同郡下百八十九村四十二戸長役場で養蚕指導講演を行つてゐる。明治四十二年九月十八日六十五才で歿す。
〃	〃	山口亀太郎	石原・農、農商務省の依頼によりこの年蚕桑業の損益調査をなす。上中下蚕三七貫を得て同家では十一円の益であつた。十八年に西群馬郡片岡蚕糸商組合を設けた。
一八八八	二二	橋爪清太郎	柳川町の人、『新撰養蚕秘録』を著わす。この原書は信州塚田氏の『養蚕秘書』なり。
〃	〃	駒井真蔭	根小屋の人、通称源七、嘉吉の二子、文政六年生まる。高崎侯の師加藤新平に習字、山名の中村元良に漢籍を学ぶ。橋本直香の門に入り歌道を修め明治三十六年八一才で歿す。
〃	〃	横尾鎮雄	歩兵少佐、この年五月高崎連隊区司令部設立するや初代司令官となる。三十一年十月中佐となり麻布連隊区司令官に転出する。
〃	〃	松本亦太郎	旧高崎藩士、飯野翁の次男として慶応元年九月生まる。倉賀野の豪農松本家を嗣ぎ帝大文科を出て文学博士となる。京大教授となりその著書多し。
〃	〃	須藤清七	九藏町・樺荘と号し幼名松太郎、鼻高の出なり。明治元年高崎藩用達、二十三年五月昇明社高崎町専製蚕糸等を興す。大正八年八月三日八五才で歿す。この年四月町制発布により高崎駅が高崎町に改められて最初の町議選に二級より当選、明治十二年の町議にも当選した。廿六年高崎水力電気会社を興し社長となり、高崎伊香保間電車を四十二年八月敷設を行う。大正五年その功により黄綬褒章を受く。
〃	〃	大谷三右衛門	田町の旧家なり。一級議員として町議に当選。

一八八八	明治二一	住谷喜三郎 落合庄平	田町の旧家なり。一級議員として町議に当選。大沢五資、桜井伊兵衛、関根作三郎、西岡半九郎、大熊清太郎等同志と共に町議に当選する。九藏町・染色業、商業会議所議員にもなり、明治二十九年五月死亡。
一八八九	二二	相川鍋次郎 島田音七 吉田吉兵衛	柳川町・この年四月町議に当選。明治三十二年には多額納税者となる。 この年九月県会改選で西群馬郡より天野宗忠、岡田謹吾、矢島八郎と共に当選。 小八木・名主をした旧家。村内に火事連続してあり、この年菲員戸に秋葉神社を建てて祀つたので火事なくなる。
一八九〇	二三	清水騰太郎 熊井甚七 赤石英一郎 羽鳥権平 木村兵作 田村市三郎 塚越源八 金井道太郎 白石唯七 片山与惣治 矢島利兵衛 桜井伊兵衛	正観寺の人、中川村最初の村長としてこの年五月就任。二十六年五月退職、三十六年には県会議員にも当選した。篤農家なり、大地主にして嘉永元年生まる。明治十一年四大区十小区の立会人に任命される。青年会機関誌『楽園』の会長なり。 八幡村・初代村長なり。 佐野村・初代村長なり。 大類村・初代村長なり。二十六年五月退く。 倉賀野・初代町長にして二十三年二月退く。 新寺尾村・初代村長なり。二十六年三月退く。 塚沢村・初代村長なり。二十六年五月退く。 岩鼻村・初代村長なり。二十七年五月退く。 長野村・初代村長なり。四十二年六月退く。 片岡村・初代村長なり。二十二年八月退職。 薄庵光門と号し六樹園の社中、高崎水魚連社中なり。武井世平と交わる。この年三月五十八才で歿す。一説に八十一才ともいふ、狂歌師なり。 本町・呉服商、この年国会が開設され衆議院議員の選挙が行われ、高崎の矢島八郎は落選したが、貴族院議員に多額納税者を代表して当選する。この時の県下の資格者十五名、伊兵衛は第二位の納税者、一位は勢多の星野長太郎で三、三八〇円、伊兵衛は高崎の元老にして政友会の旗頭。富香と号し俳句狂歌もよくした風流人。文化人にして高崎の政治のトップクラムとして知らる。安政三年三

一八九〇	明治年間	千船庵一湊	月生まる。幼名勝太郎、明治二十九年十月四三才で歿す。 連雀町の商家、通称百輔、遠州流押花の師匠となり茶道と共に多くの子弟に教ゆ。明治二十八年四月酒井光二等子弟により道光寺にその碑建てられる。
一八九一	二四	蓮田文翁 田島尋枝	岩鼻村・農、県議員となる。 新高尾・農、右同 片岡・農、選ばれて県議員となる。 中豊岡の農、父勝二郎に十才の時死なれ貧困のうちには祖父及び母に孝養をつくし、この年三月知事より孝子として表彰される。 武州忍の人、天保九年より明治初年に至るまで高崎に住し学徒を集めて教ゆ。その碑神武彦拜所(上和田町)にあり。明治元年高崎藩大助教授にして通称与兵衛、富田氏、文化七年七月一日忍に生まる。この年十月二十九日八十一才で卒す。佐坂眉山、昌平校に学び高崎藩に任え高崎藩大助教授となる。
一八九二	二五	一椿齋芳輝 大沢安次郎 中溝利一郎 大沢弥三郎	この年二月私立倉賀野幼稚園を西群馬郡倉賀野町にたてる。三年以上六年まで六〇人を収容した。 守村の門に学ぶ。名は和雄、幼字仙吉、長じて広吉と改む。橘園の号あり。連雀町に住み饅店を業とす清香庵なり。和漢の学を好み最も和歌に長じ諸芸に達す。この年十一月四十六才で歿したが、『萬葉集長歌批點』二巻を始め『隨筆秋野のあそび』『橘園家集』『文集橘の香』その他の著あり。花道に通じこの時代を代表する文化人にして文人との交遊あり。 新町・田中氏の養子となり関芳の門に入り北年という。江戸の生まれなり。画家にしてこの年一月十九日八十四才で卒す。その絵馬観音山清水寺その他に残る。新町のすみよし屋旅館に入むことなり。浮世絵師として知らる。 この年六月宮元町に積小学館をつくり数学を教ゆ。この年十月宮元町に数学舎を起し数学を教ゆ。 矢中の農、この年外十五名と埼玉県児玉町の竟進社より教員を招き養蚕に専念す。この年八王子に

一八九二	明治二五	真下 弥吉	開かれる共進会出品のためなり。 矢中・農、この年緑野の高山社より教師を招き養蚕を営む。 この年二月十五日第二回衆議院議員選挙あり改進黨より出馬したが五三三票で次点、この時は六三四票で矢島八郎が当選している。第四区である。 (西群馬郡、片岡郡、吾妻郡) 上毛薬品試験場を創立、真名子元之丞、相沢吉平、滝川喜平、井上一之等と協力しのお法律十号により薬剤師会と改む。本町で薬屋を業とし明治三十五年商業会議所常議員となる。 親民の父、高崎藩臣にして大属なり。台湾事変には高崎藩一五〇名を引率出征した。この年十月五才で歿す。その石碑大雲寺に存す。明治二年の藩義郎(議員)となる。 江田村・諏訪神社祭典に神保田中村火術大成流連中として煙火を寄進した。煙火師なり。 小鳥村の煙火師、火術大成流にして湯浅と共に煙火を寄進した。 下小鳥村・火術大成流煙火師にして諏訪神社に寄進。 浜尻村・火術宝成流煙火師にして諏訪神社の大祭に煙火を寄進したが同家今に煙火師として残る。 六郷の人、弥作はその子なり。真神道流を極め柔道場を開き門弟多し。 この年二月第二回代議士選挙に当選(六三四票)。 幼名熊次郎、諱を宗敏、八郎右衛門歿して元治一年家名八郎右衛門と改む。問屋年寄役見習を命ぜらる。明治二年県会議員に当選、廿一年町長から三三年市制執行と共に初代市長となる。四十五年、大正四年に共に代議士となり政治に寄与。大正十年歿す七二才。鉄道開通、産業開発にも尽力高崎の恩人なり。今その銅像観音山頂にあり。 田町の人にして、書籍商で高崎では古い。この年乗附公園を開き樹木を植え休み所を設ける。明治三十五年五月大正天皇が皇太子のおり登山、松をお手植された。 高崎十五連隊長、この年の秋明治天皇近衛師団機
一八九三	明治二六	柴田 量平	
河野 通好			
湯浅 儀十郎			
相川 輪三郎			
峯岸 弥作			
湯浅 初三郎			
峯岸 弥三郎			
矢島 八郎			

一八九三	明治二六	太田 うゑ	動演習に高崎地方に來り高崎連隊内で觀兵式が行われたのでこれが記念として松を植えられた。即ち飛竜松なり。この時天皇は中島伊兵方に宿泊。河野は日清戦争に出征し二九年九月転出。 この年十一月太田裁縫学校をもうけ裁縫指導を行つた。佐藤技芸学校より十三年早い。 高崎前橋間に初めて日清乗合馬車を起す。浜尻の人でヤゴ馬車と云つた。片道の馬車賃十一匁であつた。 この頃日清馬車と前後して高崎岩鼻間に乗合馬車を經營した。浜尻の人である。 大八木の人、この年八月堤カ岡中泉医光寺に半鐘を納めた。 大八木の農、右同じ。 俳句をよくし観音山頂に芭蕉の句碑をこの年たてる。(草いろく各花の午からなる) 柳川町質屋、この年高崎町会で市制執行の準備委員を設けた際町議にして中島伊兵衛、岡田謹吾、関根作三郎、反町慎哉等と共に委員となる。三十三年には市議に当選、三十六年三十九年にも当選し四期当選、市参事会員となる。 本町砂糖問屋、廿八年五月商業會議所開設の陳情をなす。三十六年には会頭となる。代議士に当選した弥七の父なり。明治三十年一月死亡。 田町紙商、二十八年には商業會議所設立發起人。 九藏町・塩魚荒物商、右同。 田町・呉服大物商、右同。 田町・大物商、右同。 鞆町・銃砲彈藥商、右同。銃砲業として関東でもトップクラスとして知られる。 旧藩臣なり。歌道に通じ安道流挿花をよくす。晩年菓子屋を開く。群馬日報、坂東日報に参与、日清日露役には軍資恤兵事務所を設け寄与し、三十七年十一月五才で歿す。 この年三月柳川町に私立高崎婦女学院を開き裁縫家政を教えた。通う女子八〇人。 この年七月県会改選に岡田謹吾等と当選、三十三年の最初の市議に当選、三十六年にも当選する。
一八九四	二七	関 弥五郎	
新井 景藏			
高橋 桑次郎			
須藤 九藏			
鈴木 仙橋			
松 山 省			
明治年間			
明治二七			
杉浦 鷺太郎			
三井田 与八			
国峰 彦次郎			
吉井 熊作			
吉沢 正則			
酒井 芳野			
鈴木 義一			
清水 吉平			

一八九四	明治二七	新井清兵衛 岡本英三郎	この年県議員に当選、田町の紙商。中紺屋町・呉服太物商。この年商業会議所開設發起人となる。明治二十八年十一月九日第一回の商業会議所議員選挙が行われ当選、この時は三十名にして会頭は、中島伊平、副会頭は須藤清七であった。
〃	〃	清水新次郎	この年三月第三回衆議院議員選挙に出馬、八七七票で木暮武大夫が当選し矢島と共に落選。またその年九月に解散して第四回目を行つたが木暮が当選した。新次郎は二十一年町議に当選市政参与、明治十七年には清水吉平と共に藤名養魚会社を設け鱒を榛名湖に放流した。漁業の父なり。
一八九五	二八	古市市次郎	通町運送馬車挽業、この年四月廿六日同家より出火六六三戸を焼失。この火災で中島伊平より二千元を集め一戸二円をわかち、天皇より五百円の御下賜金あり、十五連隊より白米五斗寄付す。なおこの年五月には創価があり町民は豆腐穀を常食とし連隊の残飯をあさり買う。
〃	〃	藤巻喜兵衛	本町・呉服太物商、この年福田、山崎、新水、反町等と新設された商業会議所常議委員となる。農商務大臣榎本武揚に運動している。喜平の子なり。この頃結成された同業組合は、三十三組合であった。
〃	〃	金子修治	新町・写真業、この年開業、新しい事業で嘉多町にも小幡写真館ありこの道の開祖なり。のち区長等をなす。
〃	〃	松尾好国	この年茂木銀行支店が九藏町に設置されて支店長となり、高崎金融界につくす。
〃	〃	堀江不可止	宮元町・歩兵大佐、明治二十七年日清戦争起り高崎連隊は出征し、この部隊にあり。この年戦死す。高崎関係の戦死者は四名であった。
〃	〃	山中啓一	高崎の人、『近世上毛興産家伝』を編す。天保以来の上毛人中約八十の実業家の伝記を編述したものである。
一八九六	二九	池田筆吉	陸軍憲兵大尉、この年一月高崎憲兵分隊創立され最初の分隊長なり。三十一年十二月退職する。
〃	〃	瀧川喜平	赤坂町・大津屋なり。この人等の努力でこの年高

一八九六	明治二九	生沢一太郎	崎に電話が初めて開通した。電話数三〇で一番は市役所であった。商工会議所議員、大正九年には市議となり商工方面に寄与した。
〃	〃	梅山金太郎	この年一月二十二日高崎町長となり三十三年満期退職した。三十九年は二代目市長となる。
〃	〃	松田栄治	佐野・この年片岡・佐野区から選ばれて群馬郡々会議員となる。
〃	〃	原吉五郎	六郷、長野地区から群馬郡々会議員に当選、三十年には県議に当選。
〃	〃	松本柳三郎	塚沢、新高尾区から郡会議員となる。
〃	〃	静伊重郎	大類地区からこの年補欠で群馬郡会議員に当選する。
〃	〃	根岸曙太郎	中川、堤カ岡 右同、大八木の人なり。
〃	〃	茂木保平	この年大類、瀧川区から郡会議員となる。のち大類町長、明治三十年には県議員、四十五年には代議士となる。政友会の重鎮にして大正四年にも再選し八十才の長寿を保つ。万延元年九月生まる。
〃	〃	中島伊平	泰次郎、名古屋の豪商滝定助の二男、茂木惣兵衛の養子となり二代保平をつぐ。この年茂木商店を改称し新たに茂木銀行を設く。九藏町に大黒屋呉服店、並榎町に旭社(茂木製糸所)、前橋に龍興社などの製糸所をつくり高崎工業の基をなす。大正元年十月四一才で歿す。
〃	〃	田村朝次郎	慶応元年九月七日生まる。幼名米次郎、寄合町・中島福高の孫に当る。五代伊平は二十三年所沢の油屋小平家から養子に迎えられた人で、芳野金陵の門に学び二十四年四月家をつぎ、群馬県大織生絹同業組合頭取からこの年商業会議所を起し初代会頭となり高崎商工業振興につくす。大正天皇が同家に宿泊したので拜謁を賜わる。全国長者番附の上位にのり昭和十四年高崎市へ十万円を寄付。これにより県立工業学校が建設された。昭和十五年十二月二日七十六才で東京邸で卒す。

住吉町・この年高崎に電話初めて開設、三十番な

一八九七	明治三〇	吉田 房吉	小八木の人、葦貝戸に製糸工場、碓氷社中川組合を設立し初代組合長となる。この頃生糸の製造さかんなり。
〃	〃	松田 重衛	群馬郡より出馬して県議に当選。
〃	〃	眼草庵 狐登	檜物町に寺小屋をなし門弟多く、俳句をよくしこの年歿す。本姓永井なり。三十二年には上小鳥の小ノ一庵に移りここで歿す江戸の浪人なり。
〃	〃	山本 義雄	中川村小学校が三十一年五月落成した時初代校長となつた。
〃	〃	梁瀬 鷲三	豊岡村助役に二十五年就任、この年碓氷郡会議員に当選、二十八年には村長にもなる。
〃	〃	清水 元七	田町・呉服商で広く知らる。この年商業会議所議員とつたが三十一年八月歿す。
〃	〃	峯岸 米造	上和田町・県立高崎中学校長なり。三十一年には高等師範学校に転出、高崎中学校はこの年四月群馬県尋常中学校群馬分校として赤坂町長松寺に仮校舎を置き発足した。
〃	〃	桜井 美賀郎	剣崎村・農、桃の栽培につくし天津種の新種を植えて改良し、今日の桃の名産地の基をなす。
一八九八	三一	福田 儀兵衛	鞆町・貸金業、明治三十一年高崎商業会議所の副会頭となる。大正五年市議に当選以来四期、高崎銀行の専務でもあつた。昭和五年六八で歿す。
〃	〃	根本 静	中央小学校(高崎尋常小学校)初代校長にして三十四年退職している。
〃	〃	今井 退藏	県立高崎女学校初代校長なり。本町の春鶯館(今の中央公民館)を仮校舎としたがのち末広町に新築移転。
一八九九	三二	小林 石華	大雲寺・祖海禪師なり。書をよくしこの年七月入寂する。越後の産なり、同寺既堂和尚に師事し法嗣となる。その書ける招牌多し。

一八九九	明治三二	江原 又八	上佐野・長野堰水利工事等四十一年間灌漑につとめ、この年知事より木杯を贈られ表彰さる。
〃	〃	福田 彦次郎	佐野より選ばれて郡会議員となる。
〃	〃	根岸 満都多	下大類・染色業、大類より選ばれて郡会議員となり、同村長もつとむ。明治四十二年四月十六日四七才で歿す。
〃	〃	塚越 藤三郎	明治三年十一月生まる。日清役に出征している。塚沢地区より出馬し郡会議員に当選、明治三十四年より村長を二期経て、高崎への合併につくし高崎市議となり副議長に当選、貫名海雲に学ぶ。
〃	〃	相川 弁之助	六郷村より郡会議員に当選、農を業とする。
〃	〃	岡田 又八	長野村より郡会議員に当選副議長となる。三十六年には県会議員に当選以後三期当選。土木業に關係し政友会の重鎮なり。明治元年一月生まる。岡田定五郎の門に入り剣道に達し学心館をたてる。明治四十五年高中の教師、昭和十三年十二月二十一日七十二才で歿す。
一九〇〇	三三	片山 慶作	片岡より郡会議員となり高崎に合併後市会議員となる。農を業とする。
〃	〃	山口 亀太郎	農・片岡より郡会議員となる。
〃	〃	岡田 儀平	長野・同 上
〃	〃	峯岸 弥作	六郷・同 上
〃	〃	飯野 三太郎	この年初めて市制執行され矢島八郎が初代市長、深井寛八が助役となつて、三太郎は収入役に任命さる。七月十八日のことで、三十四年八月三日には辞職。
〃	〃	岸 亀吉	市制がしかれて初の市会議員に当選、九藏町豊表業、のち市会議長、市参事会員、商業会議所議員となる。岸浩の父なり。昭和十四年十月七七才で歿す。
〃	〃	山田 彦衛	常盤町・この年市会議員に当選。
〃	〃	小保方 元吉	本町・金物商なり。この年市会議員に当選。以来四期の長い間勤務、市参事会員にもなり、商業会議所議員にもなつて商業振興につくした。
〃	〃	横山 文四郎	本町・紙商、市会議員に当選、大正五年まで五期という長い間市議にして市参事会員にもなつて市政に寄与する。熱心な歴史研究者である。

明治四十二年から大正四年まで商業会議所の常議



一九〇〇	明治三三	中島 藤三郎	この年高崎で立身流弘武館を開いて多くの子弟に剣道を教ゆ。
〃	〃	青木 勘之助	田町・糸洋物商、明治三十一年から大正二年まで商業会議所議員として重きをなし、大正四年九月死亡。
〃	〃	矢島 孫三郎	旭町・駅弁当屋を業とす。この年市議に当選以来二期当選。慶応三年八月二十五日生まる。群馬師範を出ている。大正四年失明、同十三年六月にも市議に当選、天来庵という俳号で俳句をよくす。
〃	〃	平井 八太郎	弁護士、この年市議となり以来五期の長きにわたり市政につくし四十四年議長となる。高崎市教育会長、弁護士会長等市政に尽力した。松江藩の和算の大家の家に生まる。同地の師範学校を出て更に明治法律学校を出ている。昭和四年十二月六日で歿す。
〃	〃	井上 保三郎	八島町・井上工業会社社長、この年市議に当選、以来五期市議をつとむ。高崎板紙会社を大正三年創立（現高崎製紙）したのを始め高崎工業界につくし商業会議所会頭、銀行重役、各会社重役等商工業発達に寄与、昭和十一年観音山に白衣大観音像を独力で建設して観光にも寄与す。今その銅像観音山頂に残る。明治元年十一月二十日平次郎の二男として生まれ、昭和十三年十一月七十一才で歿す。
〃	〃	金山 鉄吉郎	龍見町・この年市議に当選して以来三期をつとめ昭和五年高崎市長となつたが僅かに二カ月で退職。旧高崎藩士、文久二年九月十五日生まる。電力事業に関係をもち、俳句をよくし梅軒と号す。長谷川長溪に学ぶ。昭和十年七十四才で歿す。
〃	〃	相沢 吉平	田町・薬剤師、この年市議、大正十五年議長となり、元治元年七月七日倉賀野に生まる。昭和二年県議員に当選するまで殆ど毎期市議となり議長ともなる。憲政会系の政治家として知らる。商業会議所議員、薬剤師会長、会社重役をなす。
〃	〃	関根 作三郎	安政四年四月十三日生まる。父作右衛門は年寄役触れ頭及御納戸御用達役をつとむ。連雀町の名家なり。この年市議に当選更に三十六年九月の県会

一九〇〇	明治三三	落合 福三	この年市議会議員となる。続いて前後三回当選、三十九年には参事会員になる。
〃	〃	小泉 六郎次	右に同じ、三十五年一月辞任。
〃	〃	落合 又吉	右に同じ、明治三十三年七月死亡。
〃	〃	西沢 安兵衛	赤坂町・材木商、この年市議に当選続いて二期、市政に尽力した。同家は文化前より塩問屋をしていた。
〃	明治年間	山崎 金四郎	高崎藩士、山下氏の次男として文久元年二月廿六日生まる。桐生の山崎氏に養わる。三十七年吾妻郡長となり四十一年十二月高崎市助役となる。更に大正三年内田市長時代再び助役となる。
〃	〃	小島 弥平	歌川町・小島鉄工所社長なり。この年市議に当選以来市政に参与。商業会議所会頭となつて財界に大きな勢力をはり茶話会を結成する。また高崎水力電気会社の創立に寄与し高崎に電灯をつけたのはこれから間もない。大正十年その社長となる。昭和六年七八才で歿す。
一九〇一	明治三四	高橋 源兵衛	本町・銀杏屋旅館なり。この年市議となり以来三期連続当選する。
〃	〃	真 監 寛	この年四月この人の撰により下小島に首塚権寛旌表之碑を建立する。これは元和三年正月四日藩主松平丹波守の家臣が米の検査のことから農民に襲われたのを恨み、この村の農民子女まで処罰を受けた事件の追悼碑である。
一九〇二	三五	大河内 輝 剛	高崎藩主の輝聴の妾腹の子として安政元年十一月生まる。慶応義塾を出てその教師となる。この年八月大選挙区制による衆議院議員選挙に出馬、旧家臣の宮部義と争つて当選（二八二票）、宮部（一九九票）早くから実業方面に活躍し帝国劇場、歌舞伎座等の重役となつていた。また三十六年の改選にも再選、明治四二年九月九日五六才で卒す。
〃	〃	小林 茂	この年北小学校初代校長となる。のち四十年には中央小学校に転任、高崎教育界に重きをなした。

一九〇二	明治年間	峰岸 文信	當時伊藤允美中学校長との筆か事件で退職。 小島霞新流柔道師範にして文郷の長男、幼名弥作 接骨を研究し接骨師開業、その弟子二千人に達し 村議二十二年、消防組頭十三年、大正五年十一月 十三日五七才で歿す。
〃	〃	津田 精十郎	南小学校訓導兼校長となり四五年病のため死亡。 興禪寺住職、この年八月寺内に高崎育兒院を設け 不幸な幼児童を收容したが、これがこの種社会事 業のトップ。
〃	〃	田辺 鉄定	佐野の人、この年七月三十一日公共事務功勞者として 昇知事より木杯を授与さる。
〃	〃	江原 又八	日高・この年漢学算術国語等を教える。日新義塾 をたてる。
〃	〃	津久井 玉二郎	連雀町にあり。坂東日報の主幹となる。大島不染 が社長であり西川玉壺が主筆。三十八年には廢刊 となり更に上野日々新聞を創刊す。のち前橋に移 り大正三年『上毛及上毛人』を發行、昭和初年ま で続いた。史家として知らる。
〃	〃	豊国 学堂	豊秋村字石原の人、この年高崎連雀町で發行した 坂東日報社に入社、文芸に執筆二一才。江見水蔭 の門弟、若くして歿す。通称清一郎。
〃	〃	大島 不染	新高尾・この年郡会議員に當選。
〃	〃	西川 玉壺	右 同
一九〇三	〃	山口 寒水	中川・右 同
〃	〃	關口 作三	塚沢・右 同
〃	〃	田村 市三郎	大類・右 同 議長となる。
〃	〃	引田 鍋五郎	東京角力にしてこの頃關臨まで昇進すること二回 下豊岡の出身にして姓吉井なり。名力士として知 らる。
〃	〃	植原 重三郎	連雀町に居住し同所よりこの年十一月二十日日刊 の上野新聞を發行し社長となる。間もなく廢刊の ち吾妻より出馬して県議員となり大芝知事攻撃 で名をなし、明治四十一年憲政会より代議士職に 出馬し落ちたが昭和二年代議士となり以来民政党 の闘士として活躍、明治元年八月四日生まる。
〃	〃	高井 亮太郎	高崎衛戍病院の軍医なり。水道の必要を伝染病患 者の發生より説き、矢島市長に施設方を陳情す。 このため四十年十一月に至り高崎水道起工式を行 はる。
〃	〃	稲垣 介次郎	木檜 三四郎

一九〇三	明治三六	山端 息耕	つて四十三年十月完工した。
〃	〃	岡田 作三郎	赤坂町・長松寺住職、この年寺内に子守児童十二 名集め私立樹徳子守学校を創立、のち北小学校に 移る。日の丸幼稚園を現に運営して健在なり。社 会事業に寄与すること多く大正十三年御紋付銀盃 と二百円を下賜された。昭和三年にも大臣賞牌を 受く。また修養会を明治四十一年創立、昭和初年 まで數百回に及ぶ講話を行いその功極めて多し。 明治十二年三月廿四日生まれの高齡。
〃	〃	細谷 忠男	この年三月衆議院議員の改選に出馬したが大河内 輝剛が當選、宮部と共に落選す。
〃	〃	飯島 力藏	矢中・農、改良桑苗早芽ホテイチクをつくつた。
〃	〃	中村 五平	新保田中・この年七月十八日篤行者として群馬県 知事より木杯贈らる。小学校の運動会に十有五年 間後援した。
一九〇四	〃	大熊 仲次郎	高崎十五連隊の小隊長にして中尉、日露戦争に出 征する。のち大正十年より十四年まで高崎市収入 役となる。
〃	〃	梁瀬 忠方	藩の世臣忠国の二子、天保八年十月十日生まる。 幼名啓次長じて官次、信齋と号し和漢の学を教ゆ るため濯来社を起す。のち梁瀬学校となり、この 年十二月十四日六九才で歿す。明治元年三月東山 道総督府付屬となる。長子藏六なり。
〃	〃	酒井 芳野	旧高崎藩臣なり。歌道に通じ宏道流插花の師とな り勤王家として活躍した。群馬日報、坂東日報を たすけ曹洞宗吉祥講を起す。この年十一月五十五 才で歿す。
〃	〃	中島 兵馬	新町・特務曹長なり。この年日露戦争起り出征し て戦死する。この戦で高崎で戦死したもの三十一 名なり。(新市部を含まず)
〃	〃	橋 七三郎	柳川町・歩兵大佐にして日清、日露役に出征功あ り。功四級の金鷲勲章を受けている。四四年在郷 軍人分会が設置されるや初代分会長となつた。
〃	〃	千田 貞幹	歩兵中佐、第六代十五連隊長としてこの年日露戦 争に出征、高崎山戦闘、南山戦で勇名を轟かす。

一九〇四	明治三七	中原 涉	陸軍少将にすみ昭和十四年一月東京で歿す。八七才。
〃	〃	大久保 直通	歩兵大佐、千田連隊長戦死するや十五連隊長となつたが、この年二〇三高地の戦いで戦死する。
〃	〃	細谷 ゆき	この年十月二十日十五連隊長となる。
〃	〃	善如寺忠二郎	この年三月檜物町に高崎裁縫学校を起し七十人を収容した。
〃	〃	河野 伝吉	佐野・日露戦争に出征戦死、功五級従五位勲六等を賜る。中尉なり。
〃	〃	倉林 香三	右 同 勲六等、特務曹長なり。
〃	〃	等々力 森藏	柴崎・日露役に出征戦死、功五級従五位勲三等を賜る。一等軍医なり。
一九〇五	三八	戸枝 百十彦	十五連隊長大尉、長野県出身、妙義山に行軍し旭岳に這い上り部下を前に逆立をした。八五メートル頂上でその裏面に驚き以来この岩をトドロキ岩と称す。二中隊長として出征し二〇三高地の戦いに負傷した。のち中将となり十四師団長となつた。
〃	〃	堀江 不可止	歩兵中佐、三十七年十二月十五連隊長となつたがこの年三月一日日露役に出征中、三台子戦場で戦死する。日露役で高崎市関係の(新市部を含まず)病死二人であつた。
〃	〃	船田 嘉門治	高崎市出身、歩兵大佐、広島連隊長として日露役に出征して戦死す。
〃	〃	乃木 保典	歩兵少尉、嘉多町・この年三月八日三台子の戦で戦死する。
〃	〃	吉岡 銀一郎	少尉、乃木將軍の次男にして十五連隊に属し、出征戦死する。
〃	〃	外所 輝造	歩兵少佐、この年三月十日奉天の大会戦で戦死する。相生町出身なり。
〃	〃	関口 忠三	上豊岡・この年村長となる。
一九〇六	三九	大滝 金次郎	田町・安政六年十一月二十一日生まる。慶長以来の旧家で十五代目高崎絹仲買。明治十四年県庁奉還運動で認められ、四十一年の水道不正工事事件で市民大会を開いている。商業会議所議員。
〃	〃	小池 又一郎	この年市会議員の改選あり、三十六年度に引続いて当選する。またこの年市長に牛沢一太郎が当選している。
			岩鼻・蚕種製造業なり。

一九〇六	明治三九	井上 豊次郎	大類・蚕種製造業なり。
〃	〃	湯浅 久三郎	中川・右 同
〃	〃	武井 伝吉	右 同
〃	〃	倉林 滝藏	新高尾・右 同
〃	〃	金井 菊治郎	右 同
〃	〃	金井 高藏	右 同
〃	〃	境原 芳五郎	八幡・右 同
〃	〃	樋口 鶴吉	南八幡・右 同
〃	〃	綿貫 伝吉	右 同
〃	〃	樋口 徳藏	右 同
〃	〃	木暮 弥平	右 同
〃	〃	山中 嘉四郎	田町・こまものこぐれで有名なり。三十六年に引続いて市議に当選したが、四十一年に失格している。大正七年高崎尚歯会を創立会長となる。
〃	〃	住谷 喜平	赤坂町・庶民階級を代表して立候補しよく当選、四十二年の改選にも当選し水道事件には活躍している。
〃	〃	吉田 庸橘	田町・荒物問屋、この年市議に当選、続いて三期当選して市政のために尽す。市長住谷啓三郎の父なり。
〃	〃	上和田 喜助	嘉多町・医師なり。この年市議に当選、大正五年にも当選して市政に参与議長ともなる。のち高崎消防団長となる。明治四四年に医師会長となり大正八年にも再選されている。安政元年七月十九日生まる。
〃	〃	武井 当五郎	嘉多町・三十六年の改選とこの年の改選に市議に当選、中島伊平(福高)はこの上和田家より中島家へ養子となつたものである。
〃	〃	佐藤 タネ	中川村・蚕種製造業で、このころこのところに湯浅久三郎、武井仙吉、箱田良作等の同業者があり蚕種製造がさかんであつた。
			柳川町・この年四月佐藤裁縫学校を始める。生徒僅か十数人に過ぎなかつたが年と共に隆盛千名を数えるに至り大橋町に移転す。(現佐藤技芸高等学校)その兄は高崎高女校長佐藤穂三郎なり。碓氷郡坂本町に生まれ静岡岡田方郡立高等女学校教授が振り出し教育界に入る。明治八年三月八日に生まる。

一九〇六	明治三九	石川 轅次郎	この年六月二十七日高崎市助役となり四十一年十月七日辞職す。
一九〇七	四〇	内山 房吉	枝務技師、初代高崎営林署長なり。この年赴任し來り四三年八月転出する。
〃	〃	橋本 求	この年群馬高崎畜産組合結成され組合長となる。
〃	〃	吉井 稲藏	この年群馬郡々会議員の改選あり佐野より当選。
〃	〃	塚越 鍋次郎	同 大類。
〃	〃	田村 市三郎	新高尾・同 四十四年にも引続き当選。
〃	〃	静 伊重郎	中川・同
〃	〃	井田 作次郎	塚 沢・同
〃	〃	中島 弥之吉	六 郷・同
〃	〃	大山 浅次郎	長 野・同
〃	〃	茂木 角次郎	片岡・同
〃	〃	萩原 勝三郎	上豊岡・この年村長となる。日清日露に出征、勲七等に叙され瑞宝章をうける。
〃	〃	根岸 慶三郎	新町・この年一月高崎新聞雑誌会社を創立社長となり、日刊新聞を一手に引き受けて発売。新聞界の功労者にして明治二十一年早くも諸新聞の取次をしている。埼玉県本庄町に生まる。
一九〇八	四一	内田 信保	第三次高崎市長としてこの年十一月五日当選、以來大正七年十一月四日まで市政に尽す。官僚政治家なり。
〃	〃	鈴木 久五郎	この年五月の代議士選に出馬して当選(三二九票)成金として知られ、輸入候補のはじめ、このため宮部、木檜等落選す。群馬郡では根岸晴太郎当選する。
〃	〃	金井 モト	新高尾・この年百二才となり、皇太子高崎兵營に來場し高齢者として牽拜を許さる。
〃	〃	高橋 ノブ	片岡・百一才 同
〃	〃	山県 保三郎	この年砲兵中佐になり第十六師団兵器検査官になる。上豊岡出身なり。
〃	〃	吉田 吉太郎	中紺屋町に吉田裁縫学校をこの年十二月創立。
〃	〃	松村 明敏	この年五月高崎市立甲種商業学校(現県立高崎商業高等学校)が宮元町に創立されて校長となる。
一九〇九	四二	木暮 竹次郎	本町二丁目・麵類製造業、安政二年から引続く。この年市会議員に当選、市政につくす。この頃の市議は一級五票、二級一〇票、三級一〇〇票で当選した。大正七年五月七日六五才で歿す。

一九〇九	明治四二	友松 喜平	相生町・えびす屋製麵及製綿老舗の主人、明治八年八月廿一日生まる。この年市会議員に当選、以來引続いて数期当選。三十八年以來商業会議所議員、高崎信用組合(現信用金庫)の理事長にして財政界に重きをなす。昭和二年六月歿す。
〃	〃	太田 嘉之助	南部から明治九年五月南部表の製造を伝授され更に鎌倉町(今の若松町)部落改善に産業奨励のため下駄表大量製造を始め。竹の皮を利用したもので昭和十年頃には製造関係者三〇〇戸、年産十五万足に及び高崎の大きな産業となつた。
一九一〇	四三	早川 愚次郎	田町・呉服商、この年市会の改選あり当選、四十五年の改選にも当選している。
〃	〃	清水 元七	宮元町・史家、この年十二月『高崎案内』を発行する。『小栗上野介』などもかく。
〃	〃	は ま 子	千代玉寫の芸妓、名妓として知らる。
〃	〃	千代 つ 平	花岡家の芸妓なり、この頃の玉代は一本廿五匁、祝儀一円。
〃	〃	は じ め	立花家の芸妓、この頃東京に名妓萬竜あり、はじめは田舎萬竜と称せらる。
一九一一	四四	芥川 辰次郎	この年九月県会議員選挙で当選し、十一代県会議長となる。三十六年の高崎市会から続いて三期当選、昭和二年市会議長となる。宮元町・弁護士、伊賀上野に慶応二年八月五日生まる。和弘法律学校を卒業、明治二十六年文官並弁護士試験に合格している。各種の公職をもつ。
〃	〃	羽鳥 友太郎	宿大類・農、この年県会議員に群馬郡から長野の岡田又八と共に当選。
〃	〃	清水 柳東	桑藏、諱を通史、柳東は俳号なり。明治元年川越に生まる。幼より学を好み十六才で教員となる。この年下横町に移り下駄商をはじむ。区長等をなす。昭和四年九月六二才で歿す。
〃	〃	湯浅 又五郎	中川・群馬郡会議員に当選。
〃	〃	善如寺保太郎	佐野・右 同
〃	〃	長井 寅吉	大類・右 同
〃	〃	金井 柳平	六郷・右 同
〃	〃	紋谷 幸三郎	長野・右 同
〃	〃	堀米 民部	片岡・右 同
一九二二	四五	村上 蛸魚	赤坂町・本名成之、明治四十一年高崎中学校(現

一九一五	明治四五	高橋 幾五郎	高崎(高校)に教師とし赴任し来り村上鬼城と知り紫苑会を起す。俳人として知らる。 弓町・この年市議に当選、柴崎村の出身、明治十八年自由党に入り民権運動を起す。政友会高崎支部総務、高崎署管内一市二十四カ町村仲介業組合長、明治元年九月十九日生まる。当時ひろめやと称する広告便利業なども始めた。
一九一三	大正二	茂木 惣兵衛	九藏町・茂木呉服店の祖、保平の長男、幼名良太郎、この年姉マツの家督をつぐ。第八高を出で七十四銀行、横浜貯蓄銀行の頭取、茂木財閥の総帥であつたが、大正九年のバニックに七十四銀行とりつけとなり没落、滯英十数年、昭和十年四三才で歿す。
〃	〃	吉井 梅次郎	田町・呉服商、文久三年八月佐野町に生まる。この年柳川町に電気館を新築、株式会社なり。映画専門館のトップ。大正五年以来市會議員、商工会議所議員として財政界に寄与。
〃	〃	篠崎 作次郎	住吉町・高崎蚕種冷蔵庫をつくり氷室により一万六千枚の蚕種を保存した。
〃	大正年間	原山 一晴	田町の人、名忠七、二世鶴松庵なり。家元三世星松庵直門にして華道をよくす。大正五年十月十五日七九才で歿す。清水新次郎はその孫なり。小田福太郎、長井丑五郎等が成田山に建碑。
〃	大正二	浅井 継世	旧高崎藩臣、北小学校長として子女教育に名あり退職後、大河内家に老職としてつとめる。この年及大正七年に文部省より教育功労者として表彰を受く。
〃	〃	金子 源治	煙草専売支局が設けられ初代局長となる。副参事官、三年十一月転出。
〃	〃	山内 謙介	向雲寺住職、曹洞宗の寺院、住職により吉祥講を結成その奉仕として徒弟学校を始め校長となる。二カ年修業にして同寺に四十名を集む。大正九年廃校となる。
一九一五	四	吉井 宇佐八	佐野・群馬郡會議員に当選。
〃	〃	根岸 森太郎	大類・右 同
〃	〃	金井 福太郎	新高尾・右 同
〃	〃	吉田 元次郎	中川・右 同
〃	〃	井田 文作	塚沢・右 同

一九一五	大正四	中島 伊太郎	六郷・群馬郡會議員に当選。
〃	〃	中沢 藤松	長野・右 同
〃	〃	中島 仙助	中紺屋町・生絹太織問屋、この年大正天皇御即位式が行われ、紅日絹二疋を献納している。豊岡に食用蛙を飼育。
〃	〃	吉田 庄八	田町・和泉屋莊八の三代目、独力で同町の花車をつくる。大正九年三月十五日六七才で歿す。
〃	〃	伊藤 清平	紅鳥という。寄合町・土谷全次医師の書生なり。文学を好みこの年六月十日街上詩社を結成、『街上』を発行。萩原朔太郎、土屋英二等執筆す。これは本県における文学雑誌の最初で、北原放二等の『きつねの巢』より早い。
〃	〃	安藤 卯平次	鞆町・元名主の家柄、慶長中箕輪より移つたもので研町といつたが、ここに鐘樓あり、人足八人で以来今日まで風夜交代で火を見、時の鐘をついていた。この年改正により補助金が貰えないので廃止の運命になつて存知方を陳情、副は清水元七。東小学校の校長にして七年に北小学校長に転す。野球の校長として少年野球を奨励しち都新聞社に入つた。大東亜戦争中死亡。
〃	〃	保坂 元哉	並榎町・常仙寺住職、山内等と協力して徒弟学校を始め、この年二月校長となる。また大正十一年には私立聾啞学校を創立校長となる。明治十五年十二月二十五日神保原町に生まる。
〃	〃	長井 兼作	上大類・農、この年九月県議の改選あり群馬郡区域から当選、高崎市からは平井八太郎、芥川辰次郎が当選、代議士選もあり矢島、木楡、根岸等が当選。
一九一六	〃	桜井 幹	碓氷区域から県會議員に当選。
〃	〃	中田 邦	田町・この年五月看護婦会を創立し会長となる。この頃の看護料金は一日金二円であつた。
〃	大正年間	武居 梅堤	渡辺梅堤、梅坡の門なり。のち梅坡の長女仲子と結婚、花鳥画の大家として知らる。のち改めて秋錦と号す。その遺作また多し。昭和二十年八月七日高齡で歿す。
〃	〃	松井 親民	柳川町・弁護士、この年市會議員に当選、市會議長となる。以来一人一党をもつて任じ毎回市会に当選して議場を賑やかしその市政攻撃は特に秀で

一九一六	大正五	成田八百藏	文章漢詩たくみなり。旧高崎藩士、慶応元年七月二十日生まる。宮部襄、長坂八郎等に兄事し自由民権を唱えて気骨あり。二十三年判事となり退職後弁護士となる。昭和六年十一月六七才で歿す。旧高崎藩士、明治十三年六月二十一日生まる。東京専門学校英語政治科を出で、この年市会議員に当選、大地主にして多額納税者なり。
一九一七	大正六	六郷新三郎	高崎の人、長唄音楽師として知らる。六郷流第四代なり。音楽学校邦楽調査係五代目六合新三郎が大正六年五月二日成田山に建碑。
〃	〃	清水留三郎	この年高崎で日刊上野新聞を発行、のち前橋に移り政治家となり代議士に数回当選する。
〃	〃	土谷全次	秋田県出身、寄合町・医師、政友会より代議士戦に出馬して前二回同志会の八島に破れたが、この年四月当選、憲政会の八島次点となる。土谷は明治三十九年以来市議に当選三期、大正十年九月一日には遂に高崎市長となり、十四年八月三十一日満期退職したが、その間塚沢、片岡を合併して大高崎の基をなす。昭和十年四月八十一才で歿す。生まれたのは安政二年五月。
一九一八	七	桜井伊兵衛	四世伊兵衛(富香)の長子として明治二十年十一月二日本町に生まる。この年六月十日貴族院議員の改選あり十五票全票で父子二代の貴族院議員に当選、政友会支部長なり。大正十五年六月には市教育会長、県副会長となり教育方面に転じ、地方文化に寄与、スキークラブ、卓球クラブ会長、体協、造形文化協会顧問等各種団体の要職にあり、その功により昭和十一年藍綬褒章を授与さる。
〃	〃	青海秀孝	寺尾・永福寺十八世住職、この年三度びの火災で寺院焼失、十四年再興した。片岡農業組合理事長その他公職あり。明治三十年二月二十六日板鼻町に生まる。
一九一九	八	山口大重郎	佐野・この年群馬郡々会議員に当選。
〃	〃	高井伝次郎	大類・右 同
〃	〃	岡田徳次郎	新高尾・右 同
〃	〃	箱田良作	中川・右同蚕種製造業なり。
〃	〃	都丸仲藏	塚沢・右 同
〃	〃	静野虎吉	六郷・右 同

一九一九	大正八	岡田淳	長野・右 同
〃	〃	江積稠次	片岡・右 同
大正年間	〃	松村琴莊	元治元年江戸に生まる。宮元町・書家にして漢詩人なり。名は芳、字は不朽、琴莊は号なり。文を島田篁村、詩を大沼秋山、書を神波即山に学ぶ。坂東吟社を起し社長となる。その作極めて多く、昭和十二年支那に旅して以来行方不明となる。
〃	大正八	林 曄礼	柳川町の人、医師、高崎に初めて高崎病院を開き院長となる。この年知事の認可を得て勅令第四二九号で高崎医師会を設立し会長となる。医師団体は明治十八年に生まれ、その数十八名に過ぎなかつた。
〃	〃	小沢宗平	田町・大正四年九月資本金五十万円で創立した上毛貯蓄銀行が、この年高崎銀行と合併して上州銀行となり頭取となる。市会議員、商業会議所議員に当選、高崎実業界の先覚者として知らる。明治十四年八月五日生まる。幼名房次郎、銀行家として才能を認められる。昭和三十一年二月九日歿す。明治二十二年一月十一日堤カ岡村に生まる。文才あり長じて新聞界に入り、この年上野新聞社を経営社長となる。高崎に初めて日刊新聞として運営をなしとげ昭和十三年上毛新聞に合併するまで続ける。蛙城と号す。
〃	〃	岡田佐市郎	連雀町・中島と共に新聞界に活動、大正三年坂東新聞発行、のち選ばれて高崎市会議員となり、初代読売新聞支局長なり。
〃	〃	齋藤福次	この年三月七日高崎市助役となり、翌九年六月退職。
〃	〃	小林竹藏	相生町・明治二年十二月三日生まる。高崎絹の改良をはじめ農閑期に農家で、いざりばたで副業につくつたものを機業化し、この年力織機二十台を据付け製作をはじめた。
〃	〃	井出源次郎	片岡の人、この年清水観音の夢枕により清水鉱泉を発見し旅館をはじめむ。
大正年間	〃	綿貫巍乎	嘉多町・綿貫外科病院院長、書画を好み武居梅堤を後援する。高崎医師会長たりしこともあり、医師会の重鎮たり。同病院庭に銅像残る。
大正八	〃	古木秀太郎	この年二月三日の改選に高崎市長に当選、高崎連

一九一九	大正	八	岩井 弥平
〃	〃	〃	蠟山 政次郎
一九二〇	〃	九	渡辺 与喜松
〃	〃	〃	関 吉晴
〃	〃	〃	松井 鉄夫
〃	〃	〃	小林 竹次郎
〃	〃	〃	平野 四郎

隊区司令官、大正二年十五連隊長等を経た軍人なり。十年七月二十二日には退陣している。大正七年待命により陸軍少将となる。

この年県議員の改選に政友会より当選、弓町・甘楽郡の出身にして大正五年市議に当選、大正十三年十一月には市会議長ともなる。昭和年代に入り関東日日新聞を始め社長となる。明治十六年九月三日北甘楽郡高田村に生まる。

この年県議員に憲政会より当選、歌川町蠟山酒造会社の社長なり。明治三十九年市議に当選、以来市政に参与、大正十三年六月市会議長となる。明治五年八月十日新潟県刈羽郡大淵村に生まる。二十六年父政右衛門と共に高崎に來り酒造業をはじめむ。四十四年には会議所議員となつて有力メンバーとなり、更に高崎信用組合（現信用金庫）の組合長、政財界に参与している。蠟山政道、山田勝次郎等の父なり。昭和八年三月十四日歿す。

相生町・米穀肥料商、安政四年五月三日生まる。明治四十五年以來市議当選、この年商業会議所常議員となる。昭和二年六月一日歿す七十一才。

幼名茂助、吾妻郡名久田村大字平に明治十四年三月二日生まる。明治三十六年警視庁巡查を振り出して大正七年新潟警察署長となり、この年七月招かれて高崎市助役となる。昭和二年九月の県議員改選に当選す。詩並びに書をよくす。

この年衆議員改選に第二区（高崎）から出馬当選、憲政会の輸入候補なり。この選挙で土谷次点となる。新聞社を経営し、当時皇居移転論者として知らる。

早大卒、上和田町・この年市議員に当選、高中野球部後援会長、のちに高崎市収入役となる。

宮元町・医師、この時市議に当選、引続いて市政に参与、旧高崎藩士平野五郎の四男、明治元年八月十五日生まる。二十七年軍医となり三等軍医に任じ仙台衛戍病院つきとなる。日清日露役に参加功四級金鵄勲章を受く。四十四年久留米衛戍病院長を退き開業。高崎医師会長、高崎連合軍人分会会長等になり、大正十五年、昭和七年陸軍大臣から

一九二〇	大正	九	小林 春造
〃	〃	〃	熊井 常三郎
〃	〃	〃	新井 清兵衛
〃	〃	〃	浅井 新九郎
〃	〃	〃	住谷 常次郎
一九二一	〃	一〇	高橋 勘太郎
〃	〃	〃	落合 辰太郎
〃	〃	〃	小野里百五郎
〃	〃	〃	山田 昌吉

表彰される。

羅漢町・明治五年一月一日長野県に生まる。眼科医、この年市議に当選、以來数期に亘り当選。その雄弁をもつて市政に参与。長野県人、のち高崎市教育会長となり烏川に大正十年水泳場を開いた。冠山と号し俳句をよくす。

田町・呉服店、うろころの主人。この年市議員となり以來数期に亘り市議並びに商業会議所議員となる。慶応元年十二月嘉多町に生まる。十三才店員よりたきあげた人格円満の紳商にしてクリスマチャン。各会社にも関係し高崎商店街振興に参与している。昭和十六年五月三十日歿す。

九藏町・大和屋という紙文房具店主。明治十一年九月十五日先代清兵衛の長子に生まる。大正五年に引続きこの年も再選して市議となる。十年には商業会議所議員、上州銀行その他の重役なり。

八島町・旧高崎藩老職浅井貞光の次男、明治五年九月生まる。継世の弟なり。独逸学協会学校を卒業。信永運輸株式会社の重役となり、この年市議に当選、以來市政につくす。

田町・染糸商、福田屋なり。明治五年一月十九日生まる。この年市議員に当選、以來政友会の副会長として政治に活躍、三十八年商業会議所議員以來上州銀行、高崎信用組合等財界に重役としてつくした。昭和七年十一月歿す。

八島町・高崎冷蔵株式会社水庫による風穴蚕種の貯蔵を行った。

中紺屋町・玉田寺境内の鐘樓の鐘つき。この年二年時間をつげる鐘をうち生活改善同盟会より表彰される。この鐘名物であつたが大東亜戦で供出。請地町・小野里織物工場をこの年創立、農家で製作した高崎絹を工業化し製織機五十台を設置、新高尾工場に十七台、堤カ岡分場に六台、年産三万疋を製造する。明治十八年十一月六日生まる。

常盤町・明治九年一月十六日旧高崎藩士山田永五郎の長男として生まる。茂木銀行に入り重要され大正九年財界の大混乱に茂木銀行が七十四銀行として再出発するに際し支店長となり、この年遂に

一九二二	大正一〇	岩崎 吉
〃	〃	岩崎 半之助
〃	〃	根岸 毒二
一九二二	一一	設楽 常五郎
〃	〃	三輪 武平
〃	〃	川崎 金次郎
〃	〃	木島 勝五郎
〃	〃	植原 兵吉
〃	〃	五十嵐 照弥
〃	〃	松田 吉兵衛
〃	〃	三輪 角太郎

高崎商業会議所会頭となる。公会堂の一隅にあつた会議所を現在の所に新築、更に上野鉄道の社長となり電化、上信電気鉄道会社と改めた。佛銀行会社の重役となつて高崎政財界の重鎮となり、茶話会のリーダーであつた。市議にも当選している。昭和十九年五月十八日六十九才で歿す。

高崎前橋間のバス営業をはじめ。初め大正九年頃飯田某が計画したが、時期尚早で失敗したため幾人か引きついで失敗。吉は弟半之助と協力し上毛中央自動車会社を組織して遂に成功した。

上和田町・群馬中央バス会社々長。明治二十六年三月三十一日生まる。高崎前橋間バスの草分けなり。

明治廿五年一月三十一日下大類に生まる。雨小路毒二とも号し本名省三。この年群馬県最初の美術展覧会を公会堂（現中央公民館）で開き、以来美術教育に寄与。文学雑誌『郷土』等をこの頃出版、俳句、短歌、詩を発表。新聞記者より市役所入りをし、厚生課長等をつとめた。『佐野源左衛門』その他の著あり。

十四師団より同一父母により四人以上現役軍人となつた男子をもつ家族として表彰されたが、妻ニミ、長男島三郎、倉吉、鶴吉、平八（佐野村）石原・妻ケイとの間に生まれた、国光、弘治、栄吉、陸一の四男が軍人となる。右同。

石原・妻ヨシとの間に生まれた、直次郎、寿太郎兼吉、辰次 右に同じ。

下小島・妻キンとの間の運八、房吉、藤作、四郎 右同。

飯塚・妻センとの間の徳三郎、彦太郎、金三郎、政雄 右同。

中里・妻ラクとの間に奥馬、稲雄、三郎、卯四郎 五夫 右同。

下佐野・妻ヘナとの間に金三郎、角太郎、明治、権六、八郎治。右同。

片岡・一家から五人の軍人を出した。角太郎、国光、弘治、栄吉、陸一。なお中川の清水騰太郎も五人の軍人を出した。右同。

一九二二	大正一一	森 銑三
〃	〃	三浦 興泰
〃	〃	中西 紫雲
〃	大正一一	星野 九平
〃	〃	金子 薫藏
一九二三	一二	大島 惣十郎
〃	〃	田村 栄太郎
〃	〃	三好 徳次
〃	〃	梅沢 佐藏
〃	〃	佐藤 清
大正年間		篠原 美和賀

三河の産、南小学校代用教員『小さな星』という子供雑誌を発行、教育界にセンセイションを起したが、この年退職し上京、日本の歴史家となり、『井原西鶴』他その著書極めて多し。昭和十七年『橋保己一』を出す。早稲田大学講師なり。

羅漢町・法輪寺住職、この年寺内に私立盲学校を創立、学監となる。のち市会議員となり市政にも参予。

新太郎、その男は東京電燈高崎出張所長中西善七なり。上和田町に住み史家として知られ、俳句もよくした。のち浦和に移る。

上和田町・高崎市助役なり。この年八月通町に市営高崎市職業紹介所が出来て代表者となる。失業者救済事業の始めなり。明治六年五月十五日埼玉県に生まる。日清日露役に加わり金鶏勲章を賜わる、歩兵少尉なり。大正十三年市助役となり幸衛と改む。昭和三十二年十二月二十六日死亡。

この年三月八島町に高崎日用品販売市場をはじめた。昭和七年軍人勅諭御下賜五十年記念で荒木陸相より軍事功労者として表彰さる。

倉賀野の人、史家なり。

嘉多町・人力車宿及び履物商、群馬青年共産党事件でこの年の暮れに検挙された。この時三十三才。のち上京し史家となり『郷土史研究の手引』『一揆雲助傳徒』等著書極めて多し。殊に『国民一揆録』は有名なり。藤茂左衛門が世に出たのもこれによる。日本風俗史にも『八州廻り』をかいている。

椿町・印刷職工、田村と共に検挙される。三十三才治安維持法が出来たため思想取締が厳重となる。田町・製本職工、この事件で藤田悟、高津渡等と共に検挙さる。二十五才。

明治十八年八月一日生まる。佐藤有信の長男、家世々館の出張りとして知らる。佐藤婦人科病院院長なり。京都府立医学専門学校を出る。この年高陽倶楽部のため野球場を建設ノンプロ球団として名あり。園芸に興味あり。廿七年六月二十二日歿す。柳川町・琴の師匠なり。上毛新聞社篠原村長の姉。弟子極めて多し。この頃より高崎の西洋音楽盛ん

一九二四	大正年間	伊藤 允美	となる。初め盛隆社印刷業の主人なり。県立高崎中学校長にして中等教育に寄与し、のち関西に転出する。県下中学校長としても傑出していた。
〃	〃	佐藤 穂三郎	高崎高等女学校長、佐藤タネの兄にして兄妹して女子教育に寄与する。高女の校長期間が長く多くの子女が教えられる。
〃	大正一二	小林 綱吉	若松町・この年大震災が起り、これと前後して水戸社運動が起る。部落民解放で活動す。区長等をなす。明治二十八年七月一日若松町に生まる。
〃	〃	小林 弥七	この年五月衆議院議員に当選、実業同志会より推される。明治二十一年十二月二十二日生まる。砂糖問屋百足屋商店で知られる。天野為之博士の教えを受く。
一九二四	〃 二三	小沢 福太郎	九藏町・明治二十三年十月十四日生まる。菜種洋酒商を営む。小林弥七をして代議士に当選せしめた影の力。この年六月市議員に当選、市政に寄与、商工会議所議員にもなり、のちカメラ商に転向。音楽絵画に興味をもち地方文化に寄与、造形文化協会幹部なり。
〃	〃	大塚 善造	明治二十五年二月二十八日日本町二丁目・酒類商の家に生まる。高崎商業を出で、この年市議員に当選、調停懇話会長、その他の公職あり、人となり、温雅にして文学音曲を好む。
〃	〃	落合 兵三郎	九藏町・だるま紺屋で徳川時代より知られた旧工場、この年市議員に当選、以来市政に寄与、明治九年二月十八日生まる。初代庄兵衛以来紺屋にして九代目なり。高崎染色の発展の祖なり。昭和二十二年九月二十一日歿す。
〃	〃	寺田 永四郎	この年市議員に当選し以来数期市政に寄与、赤坂町・万延元年十一月生まる。家具商なり。商工会議所議員、商工組合連合会理事、高崎神社境内に美保神社を招祭し恵比寿講祭を發起する。昭和十年四月十八日歿す。
〃	〃	高橋 藤三郎	中紺屋町・明治十六年十月十五日生まる。初名良太郎、父の名をつぐ。正木屋という呉服問屋なり。この年市議員に当選、商工組合連合会長ともなり、昭和二十二年十一月歿す。

一九二四	大正二三	大谷 金之助	新町・みやげ屋菓子店主。この年市議員に当選、大正二年以来商業会議所議員にして明治元年八月二十六日東京に生まれ、未だ健在なり。『鉢木』の菓子で有名にして市、商工業界に活躍した元老なり。
〃	〃	土肥 勝次郎	この年九月下和田町に関東自動車学校を創立、県下における運転手教授の初めなり。
〃	〃	湯浅 ツネ	成田町に湯浅裁縫女学校をこの年譜地町に創立。
〃	〃	岡田 与市	明治十年九月十三日勢多郡敷島村に生まる。群馬師範を卒業して教員生活に入り、この年四月高崎実践女学校（現高崎市立女子高校）が宮元町に創立されるや校長となる。のち高崎図書館長に転出昭和廿九年九月九日死亡。
〃	〃	近藤 和作	八島町・金庫商なり。市議員、商業会議所議員にして、この年高崎常設競馬倶楽部を和田多中に結成理事長となり、これが常設競馬の基となる。明治五年九月三十日岡山県に生まれ憲兵出身なり。新高尾村長、この年小学校教育に寄与して文部大臣の表彰を受く。
〃	〃	反町 角三	この年市議員に当選、以来数期市政につくす。
〃	〃	桜井 誠一	本町一丁目・仙次郎の長男、明治二十七年六月二十四日生まる。輜重兵少尉にして乗合自動車も運営した。終戦後若くして死亡した。
〃	〃	天田 清治	明治二十年四月八日群馬郡灌川村に生まる。高崎中央小学校訓導から十二年土谷市長に招かれて高崎市教務課長となり、久保田市長時代助役、収入役をつとめる。戦後退職し昭和二十六年の県議選に群馬郡から当選。
〃	〃	桜井 忠三郎	本町・染絹卸商、南柯と号し俳句をなす。酒豪にして反山田派として知らる。明治四十四年からこの年まで会議所議員、昭和十三年二月歿す。書画の鑑定に通ず。
一九二五	〃 一四	高井 東一	明治七年七月十七日生まる。末広町・材木商、大正六年商業会議所議員、この年市議に当選、以来市政に参与、厩舎は初段二十四年四月一日歿す。高崎神社宮司なり。同社昇格を記念し境内に記念碑をたてた。郷土史研究家なり。昭和十五年三月八日歿す。

一九二五	大正一四	米倉新吉
〃	〃	角田政之助
一九二六	一五	中村孝也
〃	〃	青木道
〃	〃	安間喜太郎
〃	〃	村上鬼城
〃	〃	石坂実
〃	〃	野口俊太郎

明治三十五年七月十六日常盤町・国吉の二男として生まる。荒物商を営んでいたが、この年渡伯、プロミッソンに農園を開き現在はバラマンサーに十二アルケール一万八千の珈琲園をいとなみ昭和十二年歿す。

龍見町・陸軍少将、この年宮元町に第二十八旅団司令部置かれ初代旅団長となる。

明治十八年一月二日高崎に生まる。静波と号す。群馬師範、東京高等師範を出て帝大文科史学を修む。一高講師、この年『元祿享保時代における経済思想の研究』により文学博士となり、著書極めて多く帝大教授となる。

高崎専売局長から、この年高崎市長に当選、栃木県出身、東京帝大を出て財務官、若槻礼次郎に従い英国へ出張している。明治十四年五月二十一日生まる。昭和五年一月まで市長として市政につくす。

江木・静岡県出身、高崎警察署長、群馬郡及び佐波郡長を経て、この年高崎市収入役となる。明治五年七月三十日生まる。昭和二十年十月八日歿す。

名荘太郎、慶応元年七月二十日東京に生まる。高崎村上源兵衛の養子となる。フランス語を修め、耳を病み高崎区裁判所の代書人となる。俳匠春秋庵幹雄により句作の道ひらき紫苑会を起す。大正五年『鬼城句集』を出版、芭蕉、蕪村とならび賞さる。ホト、ギヌ派の重鎮、昭和十三年九月十七日七四才で歿す。

長野県の出身、明治二十五年一月十五日生まる。菓子製造を行い大正三年八月創業以来遂に本町一丁目到店舗をもつ。高崎商工会議所議員、実業組合連合会幹部、昭和十九年には群馬県商工経済会高崎支部長として商業界に重きをなす。

明治十年三月二十日福岡県に生まる。大正十二年三等軍医正に進み高崎衛戍病院長となり、この年退職、のち請地町に野口外科医院を開業。高崎医師会長、高崎郷友会長、高崎野球連盟会長、体育協会、在郷軍人関係を始め多くの公職あり、大東亜戦争に出征して功績多し。

一九二六	大正年間	岩田雨工
〃	〃	松井簡治
〃	大正一五	羽鳥仲藏
〃	〃	岡田米造
〃	〃	丹下鎮象
〃	〃	落合栄次郎
〃	〃	草島吉次郎
〃	大正年間	田部井巳之八
〃	〃	田中富貴寿
〃	〃	藤井勘一郎
〃	〃	三橋ひろ

宮元町・眼科医、名は禎司、角田竹冷に俳句を学び秋声会同人、尾崎紅葉、泉鏡花と共に新傾向の俳句を作り、お堀端句会を中心に文壇に活躍した。萩原井泉水の門下、昭和六年一月一日五五才で歿す。

文学博士『国語大辞典』により知られる。矢島八郎銅像の銘文を選びし人にして旧高崎藩臣、東京文理大学の教授、高崎領銜子に、宮内君浦の二男に生まれ松井家をつく。

九藏町・料理店、魚仲の主人、この年甲種料理店組合長となる。明治十六年七月二十三日に生まれ花柳界のためにつくし、市議、商業会議所議員たり。昭和三十年高崎菊花会々長となる。

明治三十三年六月三日山梨県甲府市に生まる。音楽学校を出て作曲家を志す。一年志願兵で歩兵少尉、高崎の岡源・岡田源三郎の養子となり、この年遺業をついだが若くして歿す。

高崎の史家、大正十四年『群馬郡誌』を編纂している。

田町・大正十五年運動具の専門店を出す。高崎では最初なり。野球連盟、審判協会等の常任理事としてその発展につくした。明治二十七年六月六日生まる。この頃より高崎のスポーツ盛んとなる。北海道に生まる。毒舌筆を振り大正十年地方文化を發行、十三年には新経済と改号す。の高崎市会議員に当選、酒豪で知られ日支事変中死亡す。連雀町・歯科医、明治十四年十月十九日新田郡沢野村に生まる。同家は歯科としては草分け、県医師会を結成会長となる。朝顔作りの大家なり。明治十二年六月三十日生まる。大正二年渡米し二年半勉強、高崎駅前高崎館を運営する。観音山開発に手をそむ。

長野県に明治五年十二月一日生まる。四十二年柳川町にある乙種料理店組合長となり、更に大正九年市会議員に当選以来続いて市議、昭和二十九年二月十六日歿す。

宮元町・旧高崎藩臣の重鎮であつた服部権の四女、明治六年八月廿五日生まる。佐倉藩の三橋氏に嫁す。

一九二六	大正年間	小松 二郎
〃	〃	清水 浜吉
〃	〃	秋山 萬吉
〃	〃	神保 竹次郎
〃	〃	中村 喜四郎
〃	〃	武井 重雄
一九二七	昭和 二	松本 喜太郎
〃	〃	片山 藤次郎
〃	〃	藤巻 菊藏

したが教育に志し、四十二年から高崎幼稚園長となる。
 長野県に明治三十一年生まる。大生十年五月東町に丸萬製糸工場をたてる。七百三釜。
 明治十三年三月四日生まる。日英堂パン店主、大正三年高崎生菓子商組合長、十二年高陽信用組合を興し組合長となる。のち信用金庫に併合。
 本町三丁目・雑穀乾物商、明治六年一月一日生まる。大正六年商業会議所議員となり市議にも当選。趣味は囲碁、将棋、昭和十七年十月十七日歿。
 鞆町・家具商小野屋の主人なり。文久元年五月五日北甘楽郡小野村に生まる。大正十四年商業会議所議員、市会議員にも当選、市商工業発達につくす。昭和十三年十月二十五日歿す。
 柳川町・明治十五年八月八日邑楽郡長柄村に生まる。群馬県属から大正十一年三月上毛貯蓄銀行高崎支店長となる。画を田崎草雲門下の逸足竹雲に学び竹郎の号あり。俳句もよくし殊に俳画は天下第一品なり。『山一重』『下藤三吟』の句集あり。洋画家中村節也の父、昭和二十年三月廿七日歿す。六七才なり。
 明治十六年三月十二日生まる。日露役に奉天で戦いシベリヤ戦に出征金鵝勲章をもつ。歩兵中尉なり。新田町にあり大正十二年和洋製菓間屋清光堂を開業、民生委員、調停委員、遺族会長、若葉保育園長、社会福祉協会副会長等社会事業に寄与。
 石原・明治十三年十一月生まる。片岡村の高崎合併につくし、塚沢と共にこの年四月目的達す。同村助役、この年の市議補充選挙に当選、のち小祝神社の宮司となる。また芥川議長のととき市会副議長ともなつた。
 石原・豊、明治三年十月二十一日生まる。大正十五年県消防協会から勤続二十八年の消防組頭として表彰さる。村会議員、この年高崎合併後土木委員となり、のち市議にも当選、この地方の旧家なり。
 寺尾・豊、文久三年九月十五日生まる。小祝神社の神職にして片岡村議、同村収入役、この年市会議員に当選。

一九二七	昭和 二	堀越 重太郎
〃	〃	高野 仙次郎
〃	〃	信沢 初太郎
〃	〃	白田 柳吉
〃	〃	徳川 未明
〃	〃	松田 菊弥
〃	〃	高橋 加津二
〃	〃	山内 留弥
〃	〃	金山 保
〃	〃	竹中 和雄
〃	〃	斎藤 平治郎

江木・豊、明治十一年五月八日生まる。塚沢村収入役に三十六年就任、四十四年群馬郡会議員、同村議会議長、この年高崎合併により市議に当選、昭和七年六月市会議長となる。
 沼沢・豊、明治十年六月二十二日生まる。塚沢村議等公職多く、この年高崎合併により市農会総代となり、のち市議に当選、現に民生委員。
 下大類・明治十八年二月二十四日生まる。農業を営んでいたが旭町に移り染色業を営み、この年区長に選任せられ、のち市会議員に当選、材木商を始め。のち信沢工業株式会社を起し社長、請負業に入る。昭和三十一年歿す。
 本町・魚間屋、明治三年四月十二日長野県南佐久郡田口村に生まる。十一才より辛酸を嘗め巨万の富を蓄え、高崎商業会議所議員、製氷冷蔵株式会社社長、この年九月卅日京都で客死す。五八才。
 高崎神社に石の大燈炬を寄進している。
 柳川町・高崎電気館の弁士、本名中村紫郎、この年『五十年後の高崎映画界』を出版、これによる高崎連隊がなくなり同所が映画街の他、大野球場、テニスコート、遊園地の他、教育資料館、郷土館などが出来ると書いてあるのが面白い。そして映画館も七つになると予言している。この頃の映画弁士に市川雀村、梅沢薫、加藤柳水、中村鶴三などがある。
 佐野村々長、この年塚沢、片岡両村高崎へ合併したので同村も合併を策したが村民の反対で目的が達せられなかった。
 新高尾村青年、この年『潮』を主宰し発行。
 史家『高崎市史』上下巻を編纂す。高崎市が発行したもので、この種のものとしては最初なり。
 高崎市長をした梅軒金山鉄吉郎の男、数年苦心してこの年『浅間查考』を出版す。
 高崎商業学校の教師、鬼城門下生にして四ッ屋に住む。田島武夫、中曾根白史等と鬼城庵再興の鬼城揮毫会の発起者、鬼城庵は自家火で焼失した。高崎の人、この年四月卅日武田耕雲齋等の水戸義士を祀つた松原神社に贊文を呈し祭資料を贈つた。

一九二七	昭和二	沢田 謙
一九二八	三	内田 毅
〃	〃	久下 正治
〃	〃	桜井 稲麿
〃	〃	浦野 極作
〃	〃	川島 治助
〃	〃	深井 貞藏
一九三〇	五	紋谷 正太
〃	〃	井田 左内
〃	〃	児玉 安藏
〃	〃	最上 政三

この年二月二十日第十六回衆議院議員選挙に高崎より出馬、新人が推したが最上政三等と共に破る。東京・評論文筆家なり。『労働内閣まで』『ムツンリニ伝』等あり。

上信電鉄会社の庶務課長、文人として知られ三太郎の名で川柳を発表、この年市会議員に当選。剣崎・桃の栽培につくし、この年八幡村丸八青果市場をつくり組合長となる。

八幡・八幡宮社司にして県郷社同志会代表であり、この年県五十三社（県社十一、郷社四二）に対し補助金を下賜されたいと県へ陳情した。

高崎の青年、この年四月二十二日桐生市帝國座における関東雄弁論大会に高崎を代表し『天国と地獄』につき雄弁を振う。

石原・多年衛生思想の進歩発達に力をつくした功により大森知事より銀杯を授与さる。

旧高崎藩士、岩鼻小学校長から市学務課長となり更に上野新聞主筆を経て高崎商業会議所の書記となつたが、この年六月五才で歿す。

多野郡新町に生まる。本町・印刷業、この年詩集『愛の肖像』を出す。丘夢夫はベンネーム。詩集『塔』も出し大沢雅休が序をかいている。若くして死亡。

長野村々長として一生を村政に貢献し藍綬褒章を受け、この年水戸で行われた大演習に召され褒章を賜わつた。篤農家として知らる。

群馬郡国府村に生まる。歌人にして『第一歌集』をこの年出す。昭和二年新群馬日報社長となり新聞界にも活躍したが大東亜戦争中若くして死亡。

明治三十五年十一月十三日生まる。工業歴史の最も古い小島鉄工所をこの年合資会社に改組しその主権者となりのち社長となる。続いて高崎製糸工場を起し社長となつた。市商工会議所議員、高崎市顧問等財政工業界に寄与、昭和三十二年度所得一、三〇〇余万円で県下のトップとなる。

この年第十七回衆議院議員選挙に第二区より出馬し一三、四五四の最高点で当選（民政）以来代議士になること数回、昭和三十年の市長選挙には任

一九三〇	昭和五	今泉 訓夫
一九三一	六	安達 成之
〃	〃	牛塚 虎太郎
〃	〃	矢島 麟一郎
〃	〃	羽鳥 源四郎
〃	〃	池田 義一
〃	〃	清水 新一郎

谷啓三郎に破れている。萬朝報記者、石原に住む。参議院議員英子はその妻なり。明治二十四年八月二十一日生まる。

高崎の人、明治三十五年生まる。この年東北帝大法科を出て出版業の雄鳳館書房を創立社長となり出版界につくすところ多し。高崎の名家中島伊平の次女貞子はその妻にして書藏家として知らる。現各社長。

この年群馬県師範学校長事務取扱を命ぜられ沼田中学校長を経て高崎市学務課長となる。植物学の大家にして退職後ドレヌメーカ学院、みどり幼稚園長、埼玉県吹上に住み、明治二十一年九月十六日生まる。

群馬県知事、東京市長となる。明治三十八年帝大卒、岩手、群馬、宮城の知事、この年親任待遇となる。その夫人は高崎市に關係ある服部時計王の二女なり。

連雀町・電気ラジオ商の草分け、大正十三年に公會堂でラジオを聴く会を催しセンセイションを起す。この時は放送局はなかつた。昭和五年市議に当選、商工会議所議員にもなり、昭和二十七年一月歿す。

新紺屋町・魚屋、この年九月二十一日に強震ありこの家の土藏を始め十三戸全壊し、南町島林芳之助方から出火した。相沢製糸その他からも出火した。

鞆町・明治二十八年三月二十一日生まる。弁護士、この年九月の県議選に当選、続いて次期も当選、弁護士県議池田光之丞の男、帝大法科を出る。市議たりしこともあり、昭和十三年十一月歿す四四才。高崎野球連盟会長でもあつた。スポーツに理解をもつ。

歌川町・この年県會議員に当選、穀新で知られた先代新次郎の男、明治十四年五月十三日生まる。慶応大学を出て大正三年高崎板紙会社（現高崎製紙）の監査役に入り専務となる。明治四十三年以来商工会議所議員、大正九年以来市會議員、昭和三年六月議長ともなる。消防組頭となり自動車ボ

一九三二	昭和年間	壽々丸女	高崎花柳・田村家の老妓にして名あり。梅富士の芸妓にして立方として知られ、のち花柳芳寿賀となり多くの子女に教ゆ。
〃	〃	小僧	分玉寫の名妓、立方として知られ、花柳芳寿賀となり多くの子弟を指導す。
〃	〃	照香	照の家の若手芸妓なり。
〃	〃	桃太郎	高陽花柳の若手芸妓にして名妓と称せられる。殊に姉三人とも高崎の名妓で四人で働いている点異色がある。
〃	昭和六	中曾根松五郎	末広町・中曾根材木会社社長、この年商工会議所を現在のところへ新築、山田会頭に協力す。廿七年副会頭となる。のち上信電鉄株式会社社長、代議士中曾根康弘の父なり。明治二十二年一月二十日生まる。
一九三二	〃	七篠原義政	第二区より出馬、この年二月衆議院議員に当選する。この時、木槍三四郎、畑桃作、木暮武太夫等が当選、最上政三は次点、義政は碓氷郡出身、十一年及び十二年の改選にも最上と共に当選している。東大法科を大正六年卒、弁護士となり『日本はどうなる』等の著書あり。早くして死亡。
〃	昭和年間	梁瀬長太郎	豊岡出身、梁瀬自動車社長として東京財界に重きをなす。
〃	昭和七	山浦市三	長野県出身、高崎警察署長よりこの年高崎市長に当選する。退職後郷里長野県に帰り昭和二十三年死亡する。
〃	〃	浦野平六	下和田町・農、大正十三年市議に当選以来引つゞき当選、この年副議長となり山浦市長をつくりあげる。更に市会議長にもなる。総合運動場開設につとむ。明治二十三年六月四日に生まる。
〃	〃	根岸富士吉	下小橋・農、明治二十六年区長、草津街道改修に力をつくし、更に昭和八年には唐崎用水をおこし長野堰から水を入れた。昭和二十四年三月八十二才で歿す。昭和三十四年その顕彰碑立つ。
〃	昭和年間	岡田怡三雄	中大類町に明治二十年六月二十五日生まる。県立博物館員、小学校教員より県立高崎女学校教授となる。この頃高崎教育研究会を結成教育の新らし

一九三二	昭和七	小池常作	いめぶきを始めアインスタインの研究も行ってその著あり。戦後県教委に勤務社会教育につとむ。
〃	〃	加部英司	九・二二事件に関係し検挙される。高崎の人にしてこの時二三才。
〃	〃	井草伊勢松	豊岡の人、九・二二事件で起訴される。この時二四才。
〃	〃	須藤平三郎	新高尾の人、二三才、九・二二事件に関係す。
〃	〃	渡辺忠一郎	請地町・海軍少佐なり。方面委員功労者としてこの年金沢知事より表彰される。明治十八年十月三十日赤坂町西沢安兵衛の次男として生まる。
〃	〃	田中信男	山名・一等機関兵、この年三月一日上海事変に出征し重黒軍と戦い武功をたて戦死、勲八等功六級金鷲勲章を賜わり、県民により県庁前にその銅像が建てられた。(大東亜戦で供出し今はない)
一九三三	〃	八山田徳藏	高崎十五連隊大隊長中佐、この年甘粕連隊長と共に日支事変に出征し、上海、北滿洲で活躍、馬占山軍と対戦した。功により関東軍司令官本庄繁より感状を受ける。
〃	〃	佐藤賢	田町・呉服商、高崎航空普及会をこの年創、立委員長となる。観音山に自力で洞窟観音を建設観光につとむ。明治十八年五月廿七日新潟県柏崎に生まる。
〃	〃	上田善吉	宮元町・医師、山田徳藏等と協力、高崎航空普及会を結成幹部となり遂に乘附練兵場脇に格納庫を設置、私下飛行機二機を購入高崎号と名をつけて飛行した。明治二十一年六月二日に生まる。
〃	〃	一梁久亀和尙	飛行士、高崎号操縦のため高崎航空普及会に入社サルムソン式二百三十馬力の高崎号に会員を乗せて上空を飛行した。
〃	〃	相良孝太郎	寄合町・武井庄左衛門の孫、大雲寺徒弟となり下総佐倉・正胤寺三十七世となる。この年正月九三才で入寂、書をよくす。
〃	〃	近藤毅藏	真町・陸軍少佐、方面事業の功労者としてこの年知事より表彰される。明治十九年三月十八日生まる。檜物町・学校教員、南小学校教員をはじめ小学校校長をへて長い間小学校教育につとむ。この年『高崎人物志稿』を出版す。史家なり。昭和三十三年七月三日七十一才で歿す。

一九三三	昭和八岸	浩	昭和三年助役に推薦さる。昭和廿四年には会議所副会頭となる。明治二十九年二月十二日岸亀吉の長男に生まる。慶大卒、高崎水力電気、上州絹糸紡績等で課長、大東亜戦争後は各会社の社長重役となる。謡曲、撞球の趣味あり。昭和三十年一月十五日歿した。
〃	〃	ブルーン・タウト	独逸の建築技師、ナチスのヒットラーに追われ、日本に來り少林山に住む。県芸芸指導の囑託となつてこの地方の竹細工等を指導、二年三月に於てインドに渡り死亡する。少林山の山荘は洗心亭として県文化財の指定を受く。著書多し。
一九三四	〃	中村重藏	四ツ屋町・明治十七年十二月一日生まる。家祥と号し書をよくす。先代はたばこ製造で名あり。この年中株式店を開き、書画に興味あり。
〃	〃	九松沢隼人	明治三十七年一月廿六日長野県川辺村に生まる。キリスト教徒として早くから信仰の道に入り社会事業希望館を建設、養老院をつくるなどして市社会福祉協議会長、全国中小企業振興会長、高崎商工金庫理事長の公職、この年市会議員に当選。
〃	〃	中曾根たき	この年十一月特別大演習が県を中心として行われ九十才以上の高齢者として御紋菓を伝達さる。
〃	〃	植原梅吉	右 同 この時乗附練兵場で天皇を迎え大観兵式が行われた。
〃	〃	飯塚ツネ	右 同
〃	〃	山口トメ	右 同
〃	〃	反町アキ	右 同
〃	〃	大越米吉	右 同
〃	〃	佐々木き勢	右 同
〃	〃	山本ミセ	右 同
一九三五	昭和年間	長井一枝	春草庵一枝にして明治三年上大類に生まれ華道茶道に専心し田町に出で鳥肉店をはじむ。のち山田町に移る。昭和九年の特別大演習には大本營に伺候し華道奉仕をなし、群馬、栃木、埼玉の華道連盟を創立し会長となる。昭和十八年五月その功により顕徳碑を成田山に於てる。戦時中死亡。
〃	昭和一〇	長坂敬太郎	東京豊島区池袋郵便局長、高崎の人、先祖は長坂血槍九郎なり。幼時堤塾に漢学を修む。興農工銀行にも勤務していた。

一九三五	昭和一〇	長谷川徳巖	通町・大信寺住職、二十五才の頃から貧困児童のため託児所を設置したが、これが幼稚園の前身、この年その功により知事より表彰される。明治二十七年一月四日生まる。昭和二十一年八月大東亜戦に大信寺焼失したがのち再興する。
〃	〃	役山久義	少将となり歩兵二十四旅団長となる。のち退役高崎市に建立された護国神社の宮司となる。昭和二十七年二月二十日歿す。
〃	〃	石井彦三郎	山名の人、字山神谷からこの年応安銘のある板碑を発掘する。応安銘の板碑は緑泥片岩全長二尺七寸五分、全像長八寸五分、蓮座と共に立像の全長一尺、厚さ一寸、応安五年壬子七月十一日と刻まる。
〃	〃	清水糸藏	下横町・前年市会議員に当選、歴史家なり。この年『大行満願海』を著わし大行満願海宣揚会を結成主幹となる。高崎造形文化協会常任理事で文化運動につくす。明治三十年四月六日生まる。
〃	〃	服部まん	日本の時計王服部金太郎の妻、高崎藩士山本兼太郎の長女、文久三年生まる。山本家は連雀町で綿商を営んでいた。深井仁子の教えを受く。この年歿す。
〃	〃	富沢ミエ	旭町・父のなきあと幼くして母に孝養し孝子として表彰され『孝女ミエ』という映画になる。製作は関東日日新聞社長岩井弥平にして、この映画金古町に上映中焼失し多数の死傷者を出す。
一九三六	〃	久保田宗太郎	この年高崎市長に当選し二十一年十一月十五日まで三期にわたり市政につくす。慶応大学卒、九藏町に大黒屋呉服店を経営し、昭和九年助役となつた。大東亜戦争中困難な市民生活を指導した。特に総合運動場を新設したのは大きくかわれている。
〃	〃	山田勝次郎	明治三十四年十月二十四日九藏町に生まる。歌川町・明治三十年十月七日蠟山政次郎の子として生まる。マルクス主義者として名あり。この年『マルクス資本論』を世におくつたのを初め多数の著書ある学者なり。一高、帝大エースを出た英才にして山田昌吉の養子となり、高崎倉庫会社々長、共産党の幹部にして、蠟山政道はその兄なり。
一九三八	〃	信沢清三郎	明治二十五年に下大類に生まる。矢方崎部隊の大隊長として支那事変に出征し抗州灣敵前上陸に加

一九三八	昭和一三	本多篤行	わりこの年戦死す。殊勲甲として功三級勲三等旭日章を授与され歩兵中佐となる。
一九三九	一四	阿部与一郎	柳川町・高崎市技師、市の都市計画をたて下水道工事を行い、この年三月第二期工事を完成する。工事は昭和四年開始。
〃	〃	黒沢成実	新町・明治廿五年八月八日生まる。建築技師、この年県議員に当選、市議員等公職あり。市政につくす。二十七年には市教育委員に当選。
〃	〃	発地英一郎	新町・薬劑師、この年県議選に破れたが昭和二十六年当選、市議、高崎衛生組合長、昭和九年市会議長等公職多し。
一九四〇	一五	平野かつ	岩鼻・この年県議員に当選、岩鼻村長もする。明治十五年十一月二十日生まる。高齡なり。
〃	〃	遠藤平一	宮元町・軍医平野四郎の妻、この年十一月十日宮城外苑で行われた紀元二千六百年式典に県下婦人団体を代表して参列を賜わる。国防婦人会高崎支部長。明治十七年四月十七日生まる。
〃	〃	籠島トク	赤坂町・支那事変に遠藤部隊長として十五連隊將士を引率出征し戦死す。この年十月連隊内で大慰靈祭が行われた。
〃	〃	粕川膽納	紀元二六〇〇年の佳節に当り節婦として国より表彰される。八島町の人。
〃	〃	中島村平	飯塚・長泉寺住職にして愛隣保育園長なり。この年二六〇〇年の佳節に社会事業功労者として表彰を受ける。明治二十五年九月十八日生まる。昭和三十四年に戦災で焼失した寺院を再興。
〃	〃	甘田五彩	六郷の人、米穀生産功労者として農林大臣より木杯を賜わる。
〃	〃	岩田辰三郎	誠三郎、五彩は俳号なり。寄合町甘田源助の男、甘田筑後守義教を家祖とし大類の旧家、祖先が灌漑用水として掘つたのが甘田堀である。味の素本舗大阪支店長。
一九四一	一六	小野里房治	柳川町・売薬商、この年七月自刃する。大日本生産党高崎支部幹部で愛国運動家であり、二戰会を結成し会長であつた。
〃	〃	築瀬政吉	新高尾村長公選に当選する。
〃	〃	矢島浅次郎	この年豊岡村長に当選する。

一九四一	昭和一六	相川六平	同村出身相川良藏が三千円を寄進し残り村民負担、この年五月四日完工。明治二十年五月十一日生まる。
〃	〃	本多理一	上小島区長、右 同。民生委員。
〃	〃	小林春吉	上和田町・無間洞夏彦と号す。この年高崎地方文化史協会を結成理事長となる。第二銀行、興信銀行等に勤務、史家にして昭和十五年『赤藩小史』を出す。『近世高崎叢話』等あり。群馬県文化財保存委員であり、俳句、短歌、詩をよくし文化人なり。明治二十一年六月二十日生まる。
〃	〃	佐藤登	成田町の人、妻ヤスとの間に男五人女五人あり。明治節に際し子宝家庭として厚生大臣より表彰される。
〃	〃	竹内サク	若松町・医師、佐藤病院副院長、高陽クラブ野球部のメンバーとして都市対抗戦にも出場、総合運動場建設に寄与、高崎野球審判協会初代会長、高崎高等学校の後援会長、昭和二十二年七月十九日歿す。
〃	〃	山田弥十郎	下和田町の人、男六人女四人をうみ育て、子宝家庭として厚生大臣より表彰さる。
〃	〃	尾崎マサ	乗附の人、男一人女九人の父として育て、右 同 鶴見町の人、男六人女五人を生みそだて、右 同 名一、請地町・上州新聞高崎支局長、十五年新聞は統一されて県下は上毛新聞だけとなり、同社の編集長となる。この年九月歿す。『上毛文化』を出版し、『高崎新調』を作詩、『高崎大観』その他の著あり。
〃	〃	白石矢水	この年一月高崎劇場における第六回郷土座の素人演劇に出演、沼田の出身で高崎県女を大正初年に卒、新劇女優となり、のち大阪劇団の名女優として知られ、現にNHKのドラマに出演している。
〃	〃	毛利菊枝	八島町・井上保三郎の男、フランスに八年間留学昭和五年帰朝ミラテス社を創し、新しいデザインを工業に吹きこむ。この年十二月大東亜戦争始まり新組織の高崎市壮年団長となる。のち群馬フイルハーモニーを結成団長となる。文化人にして美術教育に意をそそぎ、高崎音楽センター建設に努力す。明治三十一年五月十三日生まる。
〃	〃	井上房一郎	

一九四一	昭和一六	深井英五
一九四二	一七	福島藏之助
〃	〃	蠟山政道
一九四三	一八	中島秀弘
〃	〃	大沢文雄
〃	〃	吉野藤一郎
〃	〃	小田一賀
一九四四	一九	住谷天来

高崎藩士深井景忠の五男、深井景員の弟として明治四年十一月生まる。国民新聞社に入り徳富蘇峰と外遊、のち日銀に入りこの年日銀総裁となる。大正八年パリ講和会議、同十年ワシントンの軍縮会議、同十一年メノアの国際会議に全権委員として出席、昭和八年ロンドン国際経済会議には全権として参列。貴族院議員に勅選され更に枢密顧問官となる。『通貨調節論』『金本位離脱後の通貨政策』の著あり。昭和十九年十月歿す七四才なり。連雀町・この年蚕種は一手買入れ一手売渡しの統制に入り、群馬共同統制会社を設立してこの年取扱つた種は六〇七、〇〇〇枚。

近衛文麿内閣となり、この年翼賛会推薦で代議士に最上、木暮等と当選。明治二十八年十一月二十一日歌川町に政次郎の男として生まる。お茶の水女子大学々長となり、『日本における近代政治学の発達』その他の著あり。評論家として知らる。大正九年帝大を出て法学部教授となり、学者としても有名なり。

明治十四年三月長野村に生まる。岡田又八、中山範士に師事、剣道を学び大正六年高崎中学教師・教士となり、のち錬士となる。この年五月十八日六十二才で卒す。

柴崎・佐門次の三男にして海軍上等機関兵曹として支那事変に引きつゞき潜水艦乗組として勲功をたて戦死、功五級旭七を賜わる。

新町・吉野藤商店社長、商工会議所が群馬県商工業協会に改正され初の高崎支部長となる。高崎商業学校、南小学校に講堂を寄付。海外視察し『世界一巡紀行』の著あり。二十七年十月四日没す。四ッ屋町・遠州古流華道の師範として多くの子女を指導していた。高崎造形文化協会華道部長となり、華道展にその作品を発表。昭和二十九年四月歿す。その養女よね一賀と襲名する。大正十二年二月十七日生まれなり。市民展華道審査員なり。国府村に明治二年二月六日生まる。幸徳秋水等と共に平民新聞の執筆者となり、マルクスの流れと別にキリスト教社会主義者であり、内村鑑三に親

一九四四	昭和年間	吉村郡之助
〃	〃	小島伝作
〃	昭和一九	長井 豊
一九四五	二〇	松原 清
一九四六	二一	野本品吉
〃	〃	武藤運十郎
〃	〃	小峯 柳多
〃	〃	滝沢 浜吉
〃	〃	小柏 朝光

しく、晩年高崎の堀田屋（昭和町）に寄寓し、この年一月二十七日歿す。

龍見町・大東亜戦争に文一郎、福次郎、忠、敬助の四人の子供を失い、兄吉村秀雄も戦死、五柱を失っている。郡之助は明治二十七年四月十六日生まる。

上小幡町・大東亜戦争にその子英策、桂太郎、文雄、菊好の四柱を失っている。明治二十年十月十日生まる。

昭和町・高崎中学より海軍兵学校に入る。この年十月台湾沖航空戦に参加指揮官機として敵の空母に体当り戦死、大尉。その勲功、天皇陛下の上聞に達した。

八幡村々長なり。この年三月防空壕を掘らんとして観音塚古墳を掘り当て出土品多数を発見す。高崎市合併につくし昭和三十年合併の目的を達す。獅子保存会長。明治四十一年一月四日生まる。

この年四月衆議院議員の改選あり。選挙区は原全区となつて無所属、多野郡群馬郡を中心として出馬最高点で当選。新田郡宝泉村に生まれ群馬師範卒小学校長をつとめる。三十三年には参院の法務委員長となる。

弁護士・法学博士、この年社会党から出馬して代議士となり以来昭和三十三年の改選に破れるまで連続当選、社会党左派で衆議院不当財産調査特別委員長ともなり重きをなしたが、昭和三十三年の改選に落ち社会党を脱す。下大島出身、明治三十五年一日六日生まる三十四年の参議院選にも落つ。高崎商業学校出身、この年自由党から出馬して当選政務次官となる。明治四十一年九月三日生まる。多野郡出身、この年高崎、群馬、多野郡を根城として代議士戦に出馬、自由党代議士となる。八島町の群馬蚕糸製造会社々長なり。明治二十三年九月十七日生まる。

請地町・この年十月高崎商工会議所会頭となり廿四年にも再選、北甘楽郡に生まれ、高崎板紙会社（現製紙）に技師長として入社、以来同社の発達につくし遂に社長となる。その銅像高崎駅東口に

一九四七	昭和二二	石田 想吉
〃	〃	桜井 義一
〃	〃	河野 一之
〃	昭和年間	須藤 定八
〃	昭和二二	中曾根 康弘
〃	〃	最上 英子
〃	〃	竹腰 徳藏
〃	〃	梅津 錦一
〃	〃	茂木 清吉

あり。明治二十三年二月十七日生まる。龍見町・この年七月商工会議所副会長になる。石田建材会社社長、ゴルフと知れ、公職多し。明治三十五年三月十六日生まる。柴崎・大正九年専修大学を卒業、長野、岩鼻小学校長を経てこの年大類村長に当選。高崎への合併に尽力す。開基に強し。明治二十一年四月廿五日生まる。明治四年八月二日佐野に生まる。前大蔵事務官、住宅公団副総裁、愛知探などに交わり重きをなした。一高、帝大を経て昭和五年大蔵省に入る。主計局長となる。九藏町・金融業、高崎市議員となり。昭和十一年六月市議会議長に当選、戦争中市政に参与。昭和二十一年一月から二十二年四月まで再び議長となる。昭和三十年七月十一日八十余の高齢で歿した。名家清七の一族なり。大正七年五月末広町に生まる。東大を出て内務省に入り東京警視庁警視となり、この年終戦最初の衆議院議員選挙に民主党より出馬最高点(六五、四八四票)で当選、以来現在まで引続き当選する。石原・最上政三の妻なり。新憲法により婦人も参政権が得られ、この年民主党より出馬代議士に当選、続いて昭和二十八年の参議院選挙に改進黨で出馬当選現在に至る。郵政参与官なり。明治三十五年十二月十九日生まる。箕輪町・高崎ハム会社の産みの親、この年参議院議員に当選したが、公職追放により失格した。県会議員で多年県政につくし、三十一年の県知事戦に出馬したが選挙中死亡する。酒釀家なり。片岡小学校教員、宮元町・前橋市出身なり。新憲法により参議院議員制設けられ、この年四月第一回の選挙に教員組合より推されて出馬当選する。社会党にして県教職員組合長なり。のち前橋に移り建築材料工場を起す。九藏町・群馬貨物自動車会社社長、この年県会議員選挙行われ自由党から出馬最高点で当選、昭和三十二年死亡。

一九四七	昭和二二	小野里 仙平
〃	〃	山口 吾八
〃	〃	桂川 久次郎
〃	〃	三浦 虎太郎
〃	〃	関口 市吉
〃	〃	岸 芳男
〃	〃	小池 正司
〃	〃	松浦 福三郎
〃	〃	松本 太一郎
〃	〃	斎藤 長五郎

石原・市会議員、農民運動を行つたことあり。この年県議に社会党より出馬して当選、以来引続き当選、明治二十八年四月十六日生まる。県農務副委員長。石原・高崎工業学校教師よりこの年県議選に無所属で出馬当選、また、県教育委員にも当選している。PTA会長その他公職多く書によし。明治三十三年十一月三十日生まる。佐野・農、市会議員、この年県議選に民主党より出馬して惜敗したが、二十六年には当選する。農地委員その他の公職あり。明治三十二年一月二十八日生まる。若松町・酒商、この年新憲法下の初の市会議員選挙に当選、議長となる。戦前も市議、商工会議所議員。明治二十三年六月廿五日に生まる。実業界に参与す。下和田町・この年市議となり、教育委員長、体育協会長、社教会長等の公職あり、現在も引続いて市議。明治三十五年六月十三日生まる。中紺屋町・医師、この年市議に当選、戦前も市議更に教育委員に推薦されて委員長となる。明治三十年十一月二十五日群馬町中里に生まる。九藏町・魚問屋、この年市議に当選、昭和二十四年五月議長となる。昭和二十六年にも再選、昭和二十四年十月商工会議所副会長。明治三十九年十二月十四日生まる。檜物町・松浦パンの社長、この年市議に当選、昭和二十六年五月市議議長となる。クリスチャンにして卓球連盟会長、商工会議所議員。明治三十三年十一月十一日生まる。消防団長、消防長など公職多し。二十九年には渡米している。この年市議に当選、並根町・会社社長、副議長となり昭和三十年の県議選に出馬している。明治三十二年十二月十日生まる。江木町・高崎工業高等学校教諭『上州名物の解説』の著あり。上州の空つ風、屋根の石、娘天下につき研究し、これに関する著書あり。明治四十一年二月十一日生まる。

一九四七	昭和二二	神保カネ
〃	〃	小島弘一
〃	〃	小林儀緑
〃	〃	狩野久良
〃	〃	松田繁次郎
〃	〃	塚谷欽二郎
〃	〃	新井もる
一九四八	二三	竹腰俊藏
一九四九	二四	安田徳次郎
〃	〃	沼賀欽司

請地町・神保家政女学校長、この年の衆議院議員改選に無所属で出馬して落ちる。明治三十七年九月二十六日生まる。

弓町・明治四十五年一月一日生まる。小島機械製作所社長、この年市長公選となり出馬当選、以来二期連続市長、子供博覧会による観音山公園の開発、市庁舎新築、新制中学校各校舎新築等多くの事業を行つている。小島弥平の孫にして市長在任中渡米している。

佐野村長、高崎へ合併に努力、群馬觀光自動車会社社長、佐野源左衛門の鉢の木宣揚につとめ、自由党高崎支部長にして重きをなす。明治廿九年六月廿八日生まる。

宮元町・新しく婦人会が結成されて高崎の会長になり、日赤奉仕団高崎支部長、民生委員、区長等公職多し。明治二十一年十月六日生まる。

龍見町・医師、海軍少佐なり。在郷軍人に功勞あり、バラ会々長。明治十八年五月八日生まる。

江木町・理研合成樹脂会社取締役生産部長なり。PTA会長、選挙管理委員長、野球審判協会々長、県野球連盟副会長、商工会議所参事。明治三十年六月六日生まる。ロータリークラブ会長その他公職多し。

連雀町・万屋呉服店主、戦時中高崎婦人会の副会長として活躍し、この年市議戦にも立候補したが病を得て昭和二十六年四月歿す。商工会議所議員にもなつた。

本町一丁目・この年県教育委員公選に当選、箕輪町に生まれ山田郡毛里田国民学校校長を最後に教員生活を終り高崎に住む。昭和三十一年の知事選に兄徳藏が立候補中死亡し、身替り候補としてこれを引つぎ当選。

高崎中出身、高崎市助役となり市政につくし二十六年に退職、のち高崎製紙会社に入社し重役となる。明治三十七年九月一日箕輪町東明屋に生まる。藤塚出身、この年十一月日本特殊鋼株式会社取締役経理部長となる。多くの会社重役なり。明治二十七年十月七日生まれ、高崎商業学校を出ている。

一九四九	昭和二四	芥川治
〃	〃	小島嘉六
〃	〃	中曾根広
〃	〃	田島武夫
〃	〃	吉田信重
〃	〃	大沢雅休
〃	〃	大沢勇
〃	〃	岡田刀水士
〃	〃	吉野秀雄

県会議長であつた辰次郎の二男として明治三十七年二月宮元町に生まる。東京帝大を経て鉄道省に入り、この年参議院参事総務部長、二十八年に事務総長となる。

龍見町・スポーツマンとして早くから知らる。高陽クラブ野球部のメンバー、のちに高崎野球審判協会会長を始め公職多く、昭和二十八年三月十八日惜しくも早死した。富士製鋼会社々長、小島弥平の六男なり。

白史と号す。昭和十二年歌集『落葉集』を群馬歌話会から出版、水麴の同人にして昭和十七年には高崎濠端歌会から『十人歌集』も出している。鬼城門下の俳人でもあり、高崎市教育委員会の社会教育課長、歌誌『水脈』も編集した。本名広、明治三十六年十二月一日碓氷郡里見村に生まる。緑泉と号す。小八木村の出身、高崎南小学校教員から小幡小学校長、桐生広沢小学校長等をして退職、歌人にして橋田東声の門下なり。

宮元町・明治三十二年八月十九日生まる。中央小学校校長から高崎図書館長となり史家として知られている。一面歌人でもあり、歌誌『あづま』を編集し、あらゝぎ派の村上成之等と交わる。鬼城門下の俳人で鬼城とも交わり深かつた。『鬼城会』主幹、三〇年に中川村誌を編集。

大類に生まる。小学校教員より歌人となり橋田東声等と交わる。歌誌『野菊』を編集、昭和初年北海道にわたり、のち東京に出で書家として一派をなし文展の審査員になり、昭和二十八年死亡。

雅休の弟なり。歌人にしてかな書きの大家となり昭和三十一年死亡。

昭和町・小学校教員、詩人として早くから知らる。与市の長男なり。明治三十五年十一月六日生まる。新町の吉野藤一郎の男、明治三十五年生まる。慶大中退、会津八一、松岡雄等に学び歌人となる。昭和二十一年鎌倉アカデミー文学部教授、『苔径集』『早梅集』『寒蟬集』等の歌集あり。鎌倉文壇の一員なり。昭和三十四年には『吉野秀雄歌集』が第十回読売文学賞を受く。

一九四九	昭和年間	横山 静子
〃	昭和二四	宮下 秀列
一九五〇	〃 二五	松浦 真太郎
〃	〃	蟻山 芳郎
一九五一	〃 二六	小笠原 米一
〃	〃	島田 俊
〃	〃	浜名 一雄
〃	〃	石橋 栄太郎
〃	〃	富沢 勝五郎
〃	昭和年間	白石 喜一郎
〃	〃	落合 義雄

旧姓天野、中川・詩人として知られ日本詩人の同人なり。昭和の初め井上保三郎の保育園に保母として来高、今中川保育園の保母にして女流詩人として知らる。

群馬郡三の倉に生まる。高崎中学を出て成田町に住み早大在学中失明、琴を宮城道雄、作曲を田辺尚雄に学び新曲『双調の曲』で昭和二十四年の作曲コンクールに文部大臣賞を受く。

上和田町・この年参議院議員選挙に自由党より出馬、馬山村出身にして東京高工を卒業、小島機軸製作所社長、自由党県支部長にして明治三十五年七月十四日に生まる。

明治四十年十一月十五日歌川町に政次郎の末子として生まれ、高中、一高、東大コースから同盟通信特派員となりインド、ビルマその他をめぐる。

『大英帝国の変貌』その他の著あり。

高関・農、この年の県会議員選挙に民主党より出馬し当選、以来連続県議、自由党県議会議幹事長、自民党県連総務会長の他公職多し。明治四十年七月六日生まる。

沖町・自由党より出馬してこの年県会議員となる。土木請負業なり。明治三十四年七月七日生まる。民主党より出馬し群馬郡より県会議員に当選する。自民党県連総務。五十六才。

末広町・明治二十七年十一月十五日安五郎の長男として生まる。歩兵少尉、米穀肥料商から市会議員となり、更に市役所吏員となつて税務課長、収入役、助役と果進す。

里見・元里見村議長、県亜炭鉱協合理事長、県議に当選県議会議長となる。五十八才なり。高崎に多くの炭鉱を有す。

請地町・牛乳販売業、碓氷郡岩野谷村に生まれ農業、同郡から県議に当選県議会議長にもなり、製糸産業に参与する。のち現在のところに移り九十才近くなお健在なり。

宮元町・横浜興信銀行（現横浜銀行）員より芸術運動に入り、郷土芸術社に關係、絵、歌、詩をよくくし、この年アマチュア劇団ボロボロ座の主幹となる。

一九五一	昭和年間	中村 節也
〃	〃	北村 明道
〃	〃	豊田 一男
〃	〃	分部 順治
〃	〃	天引 忠定
〃	〃	浦野 芳雄
〃	〃	清水 吾一
〃	〃	安藤 賢一
〃	〃	黨 三衛

なる。現に俳優生活に入り大映に關係す。柳居晴児ともいう。

柳川町・洋画家なり。中村竹邨の男として明治三十八年十一月三日生まる。上野の美術学校在学中に二科会に入選、天才振りを発揮し以来二科会独立美術展等の同人として美術界に重きをなす。県展、高崎市民展の審査員。高崎経済大学教授なり。寄合町出身、日本画家、日本美術展にその作品を発表、県展、高崎市民展の審査員なり。

三の倉に明治四十二年六月十三日生まる。高松町、上野の美術学校を卒業、高工、県女の教師、モダンアートその他美術団体に關係、蠟画の大家として知らる。県展、市民展審査員なり。

八島町・上野の美術学校彫刻科を卒業、日展、文展に入選、入賞し、無鑑査、昭和三十年には文展審査員となる。県展、高崎市民展審査員なり。明治四十四年一月六日生まる。父文一郎は高崎最初の洋行者として知らる。

堰代町・医師、天引病院長なり。宙と号し俳句、短歌、洋画、彫刻をよくし文化人として知らる。天引鬼太郎の男、明治三十四年七月廿七日中紺屋町に生まる。

上豊岡・鬼城門下の俳人として知られ、明治二十七年五月二十日生まる。農業。

飯塚本町・土木建築請負業研屋に關係し、明治四十二年三月十一日群馬郡至田町に生まる。大東亜戦争に出征、この年市会議員に当選、昭和二十九年六月以来市会議長となる。

田町・薬剤師、この年市会議員に当選、以来連続市議、副議長となる。高崎小中学校PTA協議会長、県アマチュアボクシング協会長、高崎消防団長、その他公職多し。明治四十五年七月十一日に生まる。三十四年には県会議員に当選。

柳川町・この年市会議員に当選、以来連続市議、副議長となり三十三年十一月議長に当選、有名な乙種料理店の組合長をなし、昭和三十三年四月一日から実施された売春業者廃業転業に努力す。明治三十年十月十日生まる。

一九五一	昭和二六	矢島 栄三郎	上並榎町・農、大郷村長、この年高崎市に合併して市議員に当選、昭和二十八年六月市会議長となる。明治二十七年六月二十八日生まる。
〃	〃	飯塚 栄山	下小鳥・蓮華院の住職、大僧正なり。明治二十五年六月十五日生まる。この年市議員に当選、以来連続市議。昭和三十三年六月二十一日死亡。
一九五二	昭和年間	原 一雄	連雀町・会社々長、歌人にして青垣に籍を置き昭和十七年出版された『十人歌集』のうちの一人なり。大正元年十二月七日生まる。
〃	〃	小滝 和子	歌人なり。『吾妹』に籍を置く。昭和十七年出版された『十人歌集』の一人なり。
〃	〃	阿部 善一郎	高崎信用金庫の専務理事、歌人なり。『十人歌集』の一人にして知らる。明治四十四年四月二十三日歌川町に生まる。
〃	〃	高橋 邦一	連雀町・医師、高崎ボートイスカート団長なり。高崎文化連盟をこの年結成し会長となる。明治三十一年七月廿六日生まる。
〃	〃	友松 龍洞	堰代町・本名要、教員生活を終つて書道に専心、明治十二年四月七日上郊村に生まれ高齡なり。字義宗、不知年、井底蛙人の号あり。上杉豊嶺に経書を学ぶ。高崎書道会を昭和四年創立し、機関誌『龍集』を出す。昭和三十四年四月八十華書道記念書展を開く。
〃	〃	滝川 喜平	赤坂町・茂三郎と称し喜平は父の名を襲名、写真は少年の頃より始め高崎造形文化協会写真部長。明治二十四年六月十九日生まる。
〃	〃	中沢 賛	連雀町・書家として知らる。高崎造形文化協会書道部長、明治二十八年四月六日利根郡利根村に生まる。夫人於君は高崎の最初の女医なり。
〃	〃	中島 浩	下和田町・片岡中学校教諭、彫刻家にして県展、市民展審査員なり。滋賀県彦根市に明治三十九年五月二十二日生まる。東京美術学校を昭和五年卒、片岡中の教授となる。
〃	〃	水原 徳言	柳川町・井上房一郎のミラテマ社に關係、工芸家として知らる。明治四十四年六月二十九日生まる。
昭和二七	〃	中沢 宗弥	宮元町・教育委員会制度により初の高崎市教育長となる。小学校長から高崎実践女学校（現市立高女）校長となり、更に戦時中高崎市助役に異進、

一九五二	昭和年間	真木 武次	教育には実に五十年近く關係している。明治十九年五月十七日勢多郡上川淵村上佐鳥に生まる。
〃	〃	金井 辰之助	新町・真木外科病院院長、高崎市医師会々長、スキークラブ会長等公職多し。明治三十一年五月十九日生まる。
〃	〃	吉野 五郎	下和田町・柔道六段、高崎市議員たりしこともあり、体育協会副会長。明治二十五年四月十三日生まる。
〃	〃	山口 しう	新町・吉野藤一郎の男、明治四十二年十一月二十一日生まる。農民運動を行つた時代あり、評論家として知らる。高崎市助役中召集されて大東亜戦に参加、ソ連に捕われる。国光株式会社々長、商工会議所議員なり。
〃	〃	福田 赳夫	下小鳥・海軍少将山口権平の妻なり。白百合保育園長。明治二十五年十一月二十三日生まる。
〃	〃	黒崎 義平	台町・この年十月の衆議院議員選挙に無所属で出馬し当選、明治三十八年一月十四日群馬郡金古町に生まる。東大を出て大藏省に入り主計局長、退職以来引続いて代議士となる。昭和三十三年には自由党政調会長又幹事長となり、高崎から初めて大臣級代議士を出す。
〃	昭和年間	岡田 元雄	昭和町・高崎製紙会社々長にして、この年高崎商工会議所会頭となる。二十九年の改選にも重任、県教育委員に推薦さる。明治二十九年一月二十二日生まる。
〃	〃	綱島 新八	沖町・剣道錬士、七段、旧高中の剣道師範で父又八に学び自宅に道場をもち指導する。県剣道連盟の副理事、明治三十年七月生まる。
〃	〃	木暮 武太夫	鶴町出身、高崎商業学校から立教大学に入り野球部主将となり大大学野球に名外野手として活躍、卒業後プロ入りし、大映その他球団外野手として名をなした。

伊香保町・正一、武太夫は祖名を襲名、武大夫旅館で名あり。この年衆議院議員選挙に返映きして当選、昭和二年政友会で当選以来、政務次官等に任じ重きをなし、のち参議院議員に当選現在に至る。高崎の関東いすゞ自動車株式会社々長なり。また自由党の政調会長にもなる。

一九五二	昭和二七	平山長次郎	八島町・井上工業株式会社重役、社会事業に専心 県保護司会長として紺綬褒章を賜わる。明治十六 年二月二十八日生まる。
〃	〃	境 栄一	相生町・染色業、商工会議所議員、高崎商工金庫 の理事長となる。明治二十一年七月一日生まる。 染色組合長、その他公職多し。
〃	昭和年間	田村今朝吉	石原・製糸業、社会事業家にして石原保育園、乗 附保育園等独力で建築寄付する。民生委員。明治 二十九年四月十八日生まる。紺綬褒章を受く。
〃	〃	坂本セン	本町・助産婦、高崎婦人団体連絡協議会長にして 婦人運動につくす。明治二十六年十月三十日生ま る。
〃	〃	関 幸平	新町・旅館信濃屋の主人、東武通信株式会社社長 剣道教士六段にして県剣道連盟副理事、体協役員 なり。明治四十年一月十五日生まる。
〃	〃	橋爪 良全	この年高崎市教育委員最初の選挙に当選、石原観 音山慈眼院住職なり。明治三十三年六月一日生ま る。
一九五三	〃	田中順二	高崎市教育委員に当選、柳川町宇喜代料亭の主人 なり。明治三十三年一月十五日生まる。商工会議 所議員でもある。
〃	〃	小島 軍造	高崎市助役たりし事あり、この年参議院議員選挙 に出馬する。県教育長にもなる。国際キリスト大 学教授なり。
〃	昭和年間	大和 与一	石川県に生まる。江木町・鉄道職員、早大出、国 鉄労組中央執行委員長からこの年全国区参議院議 員選挙に出馬して当選現在に至る。社会党なり。
〃	〃	山内 憲一	三十二年参議院運輸委員長となる。明治四十一年 十二月三日生まる。三十四年参議員に再選。
〃	〃	横山 鶴藏	元紺屋町・民生委員会々長、十一年より方面委員、 保育園長、母子寮長、社会事業家なり。三十三年 福祉事業十周年記念で厚生大臣より表彰される。 明治十七年七月十六日生まる。
〃	〃	竹内平四郎	下横町・龍興寺住職、高崎司法保護司会長等社会 事業につくす。明治二十四年三月二十三日生まる。 椿町・織物工場主、キリスト教徒にして高崎市防 犯委員会長、明治二十二年七月三日埼玉県に生ま る。

一九五三	昭和年間	新井 静次	新田町・歯科医師、スポーツマンにして高崎野球審 判協会審判長を始めスポーツ団体に関係多し。勢 多郡木瀬村に明治三十六年七月二十六日生まる。 剣崎・農、高崎里親会長、里親につきつくとこ ろ多し。民生委員、区長。明治二十三年十月二十 三日生まる。
〃	〃	五十嵐 仲藏	岩鼻・県会議員たりしこともあり、醤油製造業。 弓術家として知られ、明治二十年三月二十八日生 まる。
〃	〃	堀越 呼雲	台町・書道家にして呼雲塾長なり。県展、市民展 審査員。名悦太郎、江木に明治四十四年一月二十 四日生まる。
〃	〃	石田 光峯	江木・小原流華道の大家にして県展、市民展の審 査員、高崎造形文化協会華道部長、本名てい。明 治三十四年三月九日生まる。
〃	〃	松村 恵一	飯塚町・三光蚕糸高崎工場の代表者にして戦後の 蚕糸界に活躍する。
〃	〃	河田 一英	鍛冶町・名好治、明治三十四年三月廿五日生まる。 華道師範にして県展、市民展審査委員なり。高崎 茶華道雅友会長、遠州古流。
〃	〃	佐藤 市郎	九藏町・発明協会群馬支部理事、発明家として多 数の発明品が登録されている。明治三十五年八月 二十二日時計商の家に生まる。
〃	〃	吉田 元	並榎町・中央小学校教員から桐生の高等工業学校 (群大工芸部)に転ず。山岳家として知られ、ス キーの指導者。明治四十三年十月四日生まる。 妻静枝も市立高女教諭にしてスポーツの理解者な り。大正五年十月廿三日生まる。
一九五四	〃	鶴岡 政男	砂質町・鍛冶峯と云つた建築金物製造をしていた 人の男、東京余丁町に住む画家、自由美術に属し この年七月の現代日本美術展で作品『落下する人 体』で受賞、オブジェで山口薫とならび称さる。
〃	〃	花柳 徳兵衛	南小学校卒、明治四十一年高崎に生まる。昭和九 年新舞踊『釈迦と魔女』を発表して有名になり、 この年『慟哭』で文化祭賞を受く。花柳徳之助の弟 子なり。三十三年には中共に舞踊をもつてゆく。 明治四十一年十一月五日京カ島に生まる。石原町 に住み小学校校長なり。この年九月三日高崎市民音
〃	〃	真下 条次	

一九五四	昭和年間	志村 立美	豊岡の出身、高崎で製屋を父が営む、のち上京し画家となり、岩田専太郎の弟子にして挿絵画家として知らる。
田中 徳次郎		大橋町出身、東京海上火災社長で、日本損保協会長、高中卒『財産保険の理論と実務』その他の著あり。	
塚越 応環		芝塚・女子美術を出ている。松風流盛花華道師範にして、県展、市民展の審査員なり。本名環子、明治二十七年二月十二日生まる。	
金沢 子卿		柳川町・高崎郵便局に勤務、書道家として名あり。三十二年にはその篆刻文展に入選する。県、市書道展審査員、大正十三年九月廿五日生まれ、初め小林のち金沢と改む。	
儘田 利夫		寺尾・小学校教員から大東亜戦争中南方に司政官として派遣される。陸上競技家として知られ、県体の審判員なり。明治四十二年八月三十日生まる。	
吉田 庄三郎		赤坂町・日本画をよくし史家として知らる。高崎造形文化協会日本画部長なり。明治二十三年三月二日田町の吉田家に生まる。	
加藤 安雄		高松町・史家にして『富岡市史』を編纂する。昭和二十九年には『群馬県蚕糸業史』織物篇を編纂している。愛知県海部郡佐屋町に明治四十一年三月十日生まる。	
伊藤 富太郎		九藏町・菓子製造業、芸術写真家として各コンクールに入賞。明治四十二年十一月二十日生まる。	
相場 月山		成田町・大和花道高崎支部長。明治三十九年二月十四日生まる。	
田部 井晃翠		連雀町・宏道流華道師範、田部井巳之八の長女、名は富、明治四十一年一月廿六日生まる。	
鈴木 策節		大橋町・本名秀雄、和様会花道師範、県女、市女華道教師、明治四十年生まる。和様会により昭和三十三年十月その三十年記念式を行った。	
松田 松濤		住吉町・高崎茶華道副会長、尙真流華道師範なり。名は有隣、明治四十一年二月六日生まる。	
田中 順三郎		龍見町・明治三十四年十二月二十日生まる。高崎市吏員から税務課長、学務課長等を経て吏員として	

一九五五	昭和三〇	渡辺 覚哉	て最初の収入役になる。三条中学を出る。倉賀野町・農、この年県会議員に当選、自民党県連組織副委員長、長野塚土地改良区議長、六一才なり。
武井 晴耕		正観寺・農、中川村々長にして高崎市への合併に努力し、その目的を達す。この時六十二才なり。明治二十五年九月五日に生まる。昭和三十四年歿す。	
山口 菊次郎		鞆町・靴商、この年県会議員選挙に民主党より出馬して当選、三十一年の知事選挙には竹腰徳藏の参謀となつて、その身代りに後藏をして当選せしむ。明治三十九年十二月一日生まる。県火災共済協合理事長。商工会議所副会長。	
安藤 安次郎		通町・鉄道職員、高鉄労組から推され社会党県議としてこの年当選する。明治三十六年四月三十日生まる。県商工労働治安副委員長。	
山口 薫		箕輪出身、高中から美術学校西洋画科卒業、フランスに三年間留学、昭和八年に帰る。自由美術に属し現東京芸大講師、この年現代日本美術展で入賞、またこの年高崎市役所に大壁画『朝風夕』を描いている。昭和三十四年毎日新聞賞。	
田中 金司		大橋町・徳次郎の従弟、高崎中を卒、神戸大学校教授なり。	
並木 裕		岩鼻出身、高崎中学卒、国鉄電気局長なり。	
相川 良藏		小鳥町・明治十九年五月二十日生まる。前橋中学を経て日本特殊鋼株式会社常任監査となる。	
今井 平三		明治二十一年十一月九日八幡に生まる。東京にあり歯科医師として知られ、日本歯科医師会保険審議会委員長、その他の公職あり。この年三月十七日六五才で歿す。	
住谷 啓三郎		柳川町・明治三十年七月十二日田町に喜平の長男として生まる。昭和七年市会議員に当選、議長となる。この年公選第三回目の市長選挙に出て当選	
紋谷 英雄		音楽センター建設、近村合併、県立精神病院及び沖電気工場誘置、中央通道路拡張、汚水処理場工事、第五中学校建設、その他事業に積極的にしてスポーツマン。三十四年市長に再選される。南新波・長野村長にして高崎市への合併に努力実現す。市議に当選明治二十八年八月十八日生まる。	

一九五五	昭和三〇	加部 清	八幡・運送業、八幡村高崎市に合併し、この年最初の市議員選挙に同区で無競争で当選、昭和三十四年再選、明治四十年七月二十一日に生まる。中豊岡・漬物業、豊岡村高崎市に合併し、最初の市議選に村民から推され無競争で当選、昭和三十四年に再選す。明治四十一年五月十六日に生まる。新保町・農業、新高尾高崎市に合併し、この年市議員選挙で当選、明治二十八年十二月廿五日生まる。
〃	〃	峰岸 松太郎	小八木・農、中川村会議長、この年中川村高崎市に合併し最初の市議選に当選、更に再選、明治三十三年一月五日下大類町に生まる。全国引揚連盟副会長、同群馬県会長、高崎産業経済委員長なり。山名町・この年社会党より推薦されて県議員に当選、明治四十五年四月十六日生まる。農。
〃	〃	串田 松雄	鶴見町・井上工業会社取締役、益景に達し高崎造形文化協会の益景部長、市民展審査員、明治四十四年九月一日生まる。
〃	〃	吉田 侯郎	明治三十年七月九日東村に生まる。慶大卒、東京電燈会社に入り高崎の名家堤家の嗣子となる。祖先克寛は高崎藩家老なり。この年区長制度なるや区長連合会長となる。金丸証券会社高崎店長。
〃	〃	伊藤 政次	保三郎の男、刀剣の愛好者として知られ、この年所持の『備前国雲次』は国の重要文化財として指定される。大正元年八月七日生まる。困碁三段。
〃	〃	平野 西藏	高松町・立教大学卒、この年メルボルンに開かれたオリンピック大会に水泳選手として選ばれ出場した立教大学水泳部選手。昭和十年二月八日生まる。
一九五六	三二	堤 克敏	滝川村・高崎工業学校出身、メルボルンのオリンピック大会に体操選手として出場、銀メダルを得て居り、三十二年には台湾、三十三年にはソ連の世界体操選手権大会に出場。
〃	〃	井上 正三郎	明治四十一年三月三十日京カ島に生まる。高崎商業から東大を出て高崎商業学校長。八幡の旧家沼賀家の嗣子となり、この年八幡村史を編纂する。
〃	〃	清水 健	明治二十八年一月八日吉井町に生まる。高崎実業組合連合会長、この年高崎裁判所調停委員懇和会
〃	〃	相原 信行	
〃	〃	沼賀 健次	
〃	〃	斎藤 忠三郎	

一九五六	昭和三一	酒井 兵太	長、高崎商工会議所副会頭、高崎消防団長、防犯委員会々長等公職多く三十四年藍授褒章をうく。根小屋・農、高崎市への合併につくし、参与となる。明治三十一年六月十五日生まる。
〃	〃	小林 忠太	岩鼻・高崎市への合併につくし参与となる。村長なり。大正元年八月十三日生まる。
〃	〃	高井 甫一	大類村最後の村長、高崎市への合併を実現する。体育協合理事、中大類町の農、明治二十三年十一月二十一日生まる。
一九五七	三二	大橋 文夫	高崎工業高等学校教諭、体操のベテランであり、相原等を七だてる。この年十一月日中親善体操大会全日本軍の監督として相原等と共に台湾に遠征する。大正二年六月七日生まる。
〃	〃	吉田 文子	大橋町・菊男の妻、小学校教員より第一次教育委員公選に昭和二十七年当選、婦人会協議会長、この年柳川町特殊飲食店の雇女転向指導に当る。三十三年四月一日売春禁止法実施により、これ等女性は営業が出来ないためである。明治四十年七月十二日生まる。
〃	〃	栗本 正彦	柳川町・栗本牧場を経営、高崎食品会社々長なり。父秀雄は旧武州忍藩士で九代目なり。慶大を出て居り、正彦もまた学者にして東大農学部を卒、高崎市教育委員に推薦されて委員長となる。大正元年九月十一日生まる。
〃	〃	根岸 雄助	宮元町・新聞雑誌会社中沢堂で知られる。高崎最古の新開店、朝日新聞専売を行つて居る。公選が中止されて初の教育委員に推薦される。早大を出る。明治三十四年二月廿三日生まる。
〃	〃	小川 嘉重郎	環代町・群馬師範を出る。中央小学校長を最後に終戦直後退職。民生委員、根岸と共に市教育委員に推薦される。明治二十四年四月七日生まる。
〃	〃	尾崎 喜左雄	群馬大学学芸部教授なり。観音塚古墳研究をこの年八幡町毘沙門のタテ塚、下佐野町藏王塚、上大類の稲荷塚古墳等を発掘する。何れも盗掘されて出土品は殆どない。古墳研究家にして著書多し。
昭和年間		大河原 梅吉	明治三十六年一月二日京カ島に生まる。羅漢町・ホクシング、ウエー・トリングの指導者として戦後いち早く体育館に道場を設けて青少年を集める。

一九五七	昭和年間	湯浅林太郎	南方に指導のため行ったこともあり、県、市体協常任理事。
〃	〃	田辺忠男	若松町に明治三十四年九月五日生まると。柳川町の湯浅柔道場長、戦前戦後を通じて青少年の指導にあたる。体協常任理事。区長其他公職多し。
一九五八	昭和三三	中島千代	高崎短大をこの年経済大学に昇格学校長となる。経済学博士、柳川町中西邸に住し、東京杉並より移る。
〃	〃	小山藤三	上並榎・農、この年高崎市教育委員に推薦される。明治四十五年四月二十三日生まると。
〃	〃	山本津水	田町・高崎竹工協同組合理事長、高崎の竹工芸終戦後盛んとなり、この年県立工芸所内に共同作業所を設ける。年産二千五百万円、その製品は(盛カゴ)はグッドデザイン賞を受く。
〃	昭和年間	丸山勝広	下和田町・高崎女子高等学校教授にして書家。この年毎日新聞社書道展審査員に推薦される。県書道及市民展審査員、本名忠美、富山県西砺波郡福光町に明治四十四年十一月二十二日生まると。
〃	〃	小林鉄一	群馬フイルハーモニー事務長、戦後生まれた同音楽団を今日に育てあげ、その苦難の道が映画『ここに泉あり』で世に発表される。大正三年三月二十一日下和田町に生まると。
〃	〃	田中友次郎	昭和町・豊岡に生まると。小学校教員をやめ詩作に入り三〇年『きじと山鳥』を作詞、弟の三木かほるにより作曲され、コロムビアでレコードに作らる。この年朝日新聞公募の『新しい日本の歌』に歌詞入選する。
〃	〃	井草憲太郎	連雀町に明治三十四年一月二十一日生まると。高崎市立高女、県立高女等の校長、この年市民新聞に『大手前の子』を発表、住谷市長その他後援会により出版される。
〃	〃	山崎宏	貝沢町・医学博士、この年医学の世界的権威グリブランド・クリニック博士のガンは治り得る。ガンを恐れるなの『ガン』という著作を金親保介と共同翻訳で出版した。大正五年一月十三日生まると。柳川町・医学博士、下佐野町に山崎脳病院を設立院長となる。俳人にして熊子と号す。この年第二句集『きたかぜ』を出版した。明治四十年七月二十九日生まると。

一九五八	昭和三三	室賀栄治郎	新紺屋町・呉服屋を営み戦争で統制により廃業、映字郎と号し俳句をよくす。経済大学に事務員として勤務、明治三十三年四月五日生まると。
〃	〃	市川喜一	八島町・米穀肥料商市川朝次郎の男、高崎商業を出て上京映画俳優となり、女優関千恵子と結婚、シナリオライターから東宝プロデューサーとなり、先年群馬フイルハーモニーをモデルとした音楽映画『ここに泉あり』を製作、この年山下清をモデルとした小林桂樹の『裸の大将』のプロデューサーとなる。
〃	昭和年間	松本忠義	龍見町・八島町の駅弁当屋に明治四十二年一月一日生まると。高中を出て画業を志し、昭和十三年二科に入選、山口薫と行動を共にする。
〃	〃	湯浅専太郎	末広町・明治四十四年二月二十八日生まると。芸術写真に興味をもち、高崎造形文化協会写真部副部長。
〃	〃	松本義範	成田町・成田山高徳寺住職、明治三十二年十月廿九日に生まると。成田山保育園々長にして社会福祉運動につとめ茶道にくわし。西毛保育園会長にもなる。
〃	〃	天引津留	堰代町・天引忠定の妻、井上保三郎の女なり。婦人運動につとめ日赤、婦人協議会の役員、明治三十九年六月二日生まると。
〃	〃	梅山直衛	下小島・農、梅山大兵衛より十三代目の名家にして明治二十八年三月二十七日生まると。同家に高崎城々門等が残る。菊つくりの名人にして区長、この年三月二十七日死す。
〃	〃	斎藤民	大橋町・教員にしてみどり会長、文部省創作オペラ『鷹の泉』を上演し三十四年には四家女子のオペラグループと『カルメン』に出演している。音楽指導者なり。明治四十四年三月二十五日生まると。
〃	〃	橋敬太郎	檜物町・高崎藩の重臣の子、同志社に学び内村鑑三に私淑、横浜の商社に通訳として勤務中失明、盲啞学校をたてて失敗、高崎に移り龍見町の南教会に通う、クリスチャンとして知られ、この年九月三十日八九才で歿す。
〃	〃	狩野登美江	龍見町・片小養護教諭、明治三十九年二月十三日

一九五九	昭和年間	友松善三郎	相生町・製綿業、明治四十一年十月七日生まる喜平の男なり。昭和二十二年市議となり今日に至る。文教委員長、スキークラブ会長。
〃	〃	須藤力一	乗附・農、明治三十五年九月十五日生まる。昭和二十六年以来市議となり今日に至る。農務委員長。
〃	〃	落合 操平	嘉多町・染色業、明治三十三年九月四日生まる。高崎白張業の草分なり。昭和三十年以来市議なり。
〃	〃	宮下 武治郎	末広町・倉賀野に明治三十五年三月二日生まる。薬剤師、昭和二十二年市議となり今日に至る。この間総務委員長副議長となる。
〃	〃	清水 只直	上中居・農、明治三十年十二月十七日生まる。昭和十五年市議に当選、以来今日に至り最古参なり。
〃	〃	飯野 信義	大正七年二月二十五日甘楽郡黒岩村に生まる。玉川大教育部卒、第二中学校教諭、社会科学習資料『高崎の歴史』等編集する。
〃	〃	石川 正己	明治十八年五月十日東京新宿に生まる。東京美術学校の造園関係を卒業、千葉県技師となり、のち本県に転じ群馬県工芸所長、デザイナーとして知られ、木工竹工のよき指導者なり。並榎町に住む。
〃	〃	山口 高音	並榎町・明治三十五年八月十七日箕輪町に生まる高崎信用金庫の理事長となり、この年三階建三五四坪鉄筋の新店を建造する。洋画家薫の兄なり。三の倉出身、高申を出て美倉産業会社社長、群馬詩人クラブに属する。詩人にして彫刻を分部順治に学ぶ。この年五月五日若くして死んだ萩原恭次郎詩碑を前橋の群馬大橋脇につくる。
昭和三四	〃	豊田 勇	住吉町・薬剤師、区长、この年市会議員に当選する。大正二年八月二十九日生まる。
〃	〃	小川 健一	中尾町・農業、新高尾村議会議長、この年市会議員に当選、明治四十四年四月五日生まる。
〃	〃	矢島 信一	新後雨町・鉄道弘済会職員、右に同じ。大正五年十一月五日生まる。
〃	〃	吉田 良八	通町・安国寺住職、保育園長にして右に同じ。大正十一年十一月十二日生まる。
〃	〃	大田 秀三	旭町・ネオン製作業、右に同じ。大正四年二月三日生まる。
〃	〃	寺本 昇	新紺屋町・化粧品商、中央商店街幹部、高崎商業を出る、右に同じ大正三年九月二十一日生まる。
〃	〃	広兼 勝久	



一九五九	昭和三四	鈴木巳之吉	高松町・専売公社職員、労組幹部なり。右に同じ。明治二十八年 十月二十日生まる。
〃	〃	塚越 秀太郎	上並榎町・農業、四中PTA会長、右に同じ。明治四十三年十月二十一日生まる。
〃	〃	上原 仙藏	山名町・農業、右に同じ。明治二十九年十一月二十日生まる。
〃	〃	細野 甲千男	上豊岡町・共産党役員、右に同じ。大正十三年四月一日生まる。
〃	〃	小池 長一	台新田町・農、村長たりし事あり。右に同じ。明治三十三年三月十九日生まる。
〃	〃	松沢 睦	江木町・父隼人と共に社会事業に力を入れる。右に同じ。昭和五年九月十五日生まる。最年少市議なり。
〃	〃	梅山 太平	下小鳥町・国鉄労組幹部にして右に同じ。大正十二年三月十一日生まる。
一九六〇	昭和三五	木村 実	下和田町・会社重役、右に同じ。明治三十九年六月十九日生まる。

編 集 後 記

さきに『高崎市史年表』を編纂して思ったことは、高崎にもなか／＼大人物が活躍して居つたという事であり、それが古史の上では、ばら／＼となつて掲載されているために兎角そうした人材を見落しがちであつたので、『高崎市史年表』の姉妹篇として『高崎人物年表』編纂を思ひたつた。それは高崎の歴史を知る上にも欠くべからざる事であり、その時代々々に生きた人々の記録は貴いものがあるからである。

高崎に関係ある市史は勿論、あらゆる古書、近代書をあさつて、その時代にそれなりに飛躍していた人物探しを始めて二年有余になり、やつとこれだけの人物をみつげ出したが、出版費が少ない関係もあつて、その史蹟は僅かに、その人物のアウトラインを知る程度にししか掲載が出来ないのは残念であつた。一人でも多くの人々をあげたいという欲望もあつたし、将来市史が編纂されても、これだけ沢山の人物は当然のせられまいということも考慮に入れたからである。

編纂に際し、特に留意したのは、その時代の歴史と共に生きた人物という点で、いわば名もない庶民階級の人々も出来るだけ拾ひあげたが年代もところも不明のままに相当の人材もあり、また外郭の新合併地区にも多くの人々が居つたであろうけれど、それを知る術もないままに残されたのは止むを得なかつた。また大正、昭和時代の人物にしても当然のせられねばならないものもあつたが、現代では多くの人々を省略したのは遺憾であつた。余りにも多くの人々

を限りある予算では掲載し得ないからで、従つてその時代に生きた代表的な人のみを選ばなければならなかつた。特に現代活躍している人々は、その見方の角度によつて当然ここに選ばれねばならない人々が沢山残されたので、そうした方々には大いに不満もあろうし、その人物のとり方にも異論のあることは承知の上であつた。要するに史上、或は社会教育上必要あるものは出来るだけとりあげるようにつとめたのである。

大正、昭和年代の人々で残されているものについては追つて研究の上、改訂版として再出版する際掲載する考えである。

大河内治下になつてからの人物には、本名と雅名とで別人のように考へたり、町家にあつては先代の名を襲名しているのを、史実のくさから同一人として取りあげたりしたものも二、三あると思われるが、二千百余名(古代四二、赤坂時代三三、和田時代一三〇、高崎時代五五七、明治維新三一、明治五七九、大正一三四、昭和三一九)の多数のため、再調査する期間がなかつたので、この点お許しを願いたい。また人物の生没年が記入されていないのは、資料が乏しく調査が困難であつたためで、従つてその人が活動した年代、特に記録に残されている年を選んで編入した。

最後にこれを編集するに当り、諸先輩の指導を受けたいと考へていたが、出版期の関係で、それが不可能になつたのは残念で、もしそれが出来たら、これ等の誤りや欠点も修正されたことと思うので残念であつた。またこの事業に後援下さつた方々には、心から感謝の意を表するものであります。

(編 集 者)

パルプ・板紙・洋紙・段ボール原紙

高崎製紙株式会社

取締役社長 黒崎 義平

本社 高崎市八島町192
東京事務所 東京都千代田区神田淡路町2ノ7
工場 高崎・日光・千住

建築一般・木材・家具・建具・鉄工

信沢工業株式会社

取締役社長 信沢 克己

高崎市旭町18 電話5801-5803

上州の旅は高崎から!

颯爽 — 群馬バスで —

○榛名湖 ○伊香保 ○水上 ○前橋 高崎
藤神 ○室田 高崎
名社

群馬バス株式会社

路線案内 貸切バスの御相談は
高崎駅前 群馬バス・サービスステーション

牧歌的で美しい
(バンガローとキャンプ)

神津牧場へ

貸切バスの御相談は

上信電気鉄道株式会社

◇出版後援者芳名

印刷所	発行所	編集人	発行人
吉本印刷株式会社	高崎市社会教育委員会	根岸省三	根岸省三

昭和三十四年三月三十一日印刷発行 定価金百円

◁ 和洋用紙・文房具類 ▷

株式会社
白木屋紙店

高崎市本町一丁目 (電話2320番)

創立明治30年1月
農林省指定倉庫
貨物の保管・生繭の乾燥・火災盗難を防ぐ

高崎倉庫株式会社

本社 高崎駅前 電話(代)6161
支店 北高崎駅前 電話2416・5256・6164
出張所 前橋駅前・藤岡駅前

日本石油代理店

ガソリンの
百足屋

高崎市本町一丁目 電話 2205・3005番

願海塾々長 鬼城会幹事
高崎郷土史研究会々長
高崎造形文化協会常任理事

清水糸蔵

日動火災海上保険会社
高崎市田町 電4642番
自宅 高崎市下横町18 電2636番

・新築落成・

記念旅行 観劇付 預金御招待

高崎信用金庫

理事長 山口高音
高崎市田町 電話 3.201

◇ 庶民の銀行...高崎市金庫 ◇

群馬銀行高崎支店

高崎駅東口通りに東支店が出来ました
にご利用下さい
高崎市田町 電自3501番 至3507番

ユリア系・メラミン系・合成樹脂
フェノール系・成型材料

理研合成樹脂株式会社
高崎工場

高崎市江木町760 電話 3.241-5
現場事務用 (2.378)

カメラと材料
8ミリシネ

小沢カメラ店

富士フィルム其他代理店
高崎市九蔵町 電話 6250



医薬品・工業薬品・農薬・塗料

卸 販 売

株式会社 安藤震四郎商店

社長 安藤 文夫

本社 高崎市田町 (電話 2131 - 2135)

支店 東京都千代田区神田鍛冶町 電話7867-7869

御宿泊に… 御集會に… 御商談に
～ ぜひ御利用下さいませ～

料金は御予算により
御相談に応じます。

大広間(舞台付百畳敷)
各室共見晴し絶佳
浴 場・娯樂室完備
烏川河畔(国道18号線)

高崎市高松町
TEL (3965-3308)

高
松
莊



凡ゆるスポーツ用具と服装

エスワイ運動具店

高崎市田町 電話 3182

吉本印刷株式会社

社 長 吉 本 弘 次

オフセット工場 (84番地)
活版印刷工場 (67番地)
製本工場 (65番地)
電 話 (高崎) 3 9 8 6 番

21801



高崎市立図書館

☎ (0273) 22-7919



11032510-7

